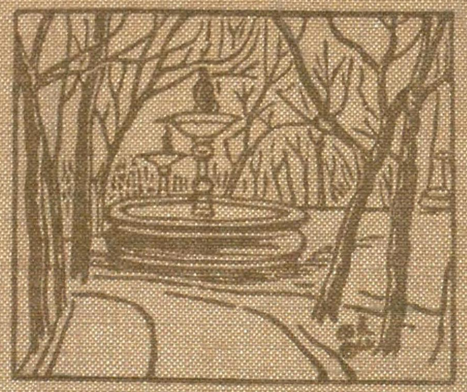


歐洲藝術巡禮紀行

K41
54
86W27150
O
複写

國畫創作協會同人
大阪時事新報社編

歐洲藝術巡禮紀行

十字館發行

國畫創作協會同人
大阪時事新報社編

歐洲藝術巡禮紀行

十字舘發行

K41
54

702 3

86W27150

序

我國の畫家で其畫筆を海外に運ぶ人は決して少くはないけれども一派の畫家が隊を組んで世界の藝術を隅々まで漁つて歩いたことは國畫創作協會同人の今度の藝術巡禮を以て嚆矢とずるであらう。其巡禮の足跡をたづぬれば支那に始まつて海峽植民地、錫蘭島、エジプトを經て普く歐洲各國に亙つて居る。天才畫家隊の一行が足かけ三年に亙る其藝術巡禮に於て何を觀何を感じたかは此畫家隊によりて作られた巡禮紀行が遺憾なく之を表白して居る。百枚の畫、百篇の文、之ぞ一行が日頃憧がれぬいて居た異國の藝術に直面して得た感激の迸りである。

此藝術巡禮紀行の畫と文とは東京の時事新報並に其分身た

る大阪時事新報が昨年一月一日の初刷紙上から一年間に亙つて連載して世間から多大の歡迎を受けたものであるが今度之が單行本として發行せられるとになつたのは我國藝術界の爲に甚だ喜ばしいとである。

東京、大阪の兩時事新報社には其社中に立派な畫伯もあり又專門の藝術批評大家もあるのに門外漢たる僕が此卷頭を汚かすやうな廻り合せになつたとは甚だ恐縮に堪へねが同時に又甚だ光榮とする所である。

大正十二年八月

大阪時事新報編輯局にて

上杉彌一郎

歐洲藝術巡禮紀行

紀行文

（一）上海の一日一夜……一
（二）蘇州行……九
（三）香港にて……一三
（四）新嘉坡にて……一六
（五）馬拉加の半日……二三
（六）彼南にて……三
（七）古倫母の一夜……一六
（八）蘇土まで……二四
（九）カイロ行……三四
（一〇）地中海を越えて……四一
（一一）巴里に入るの記……四四
（一二）巴里客窓記……四九
一、河岸のホテル
二、ドミエーの舊家

目次

三、ドミエーの展覽會其他
四、現代作家の個人展覽會
五、秋のサロン
（一三）カイニユ訪問記……六三
（一四）ゼノアミピザ……七〇
（一五）羅馬にて……八三
（一六）ナポリミボムペイ……一〇六
（一七）アッシシにて……一一〇
（一八）雨のフイレンツエ……一一三
（一九）曇るヴエネチヤ……一一五
（二〇）バトヴア……一一五
（二一）ミラノの三日……一一六
（二二）ピレネを越えて……一一七
（二三）マドリツドにて……一一八
（二四）エスコリアル……一二〇
（二五）トレド早春……一二九
餘錄……一三四

スケツチ挿畫（コロタイプ寫眞版）

上海
（一）上海港にて……麥仙作
（二）龍華の塔……晩花作
（三）四馬路街……竹橋作
（四）歌妓樂弟の圖……麥仙作
蘇州
（五）寒山寺へ通ふ道……晩花作
（六）蘇州郊外……竹橋作
（七）蘇州城外斜陽……麥仙作
新嘉坡
（八）埠頭の所見……晩花作
（九）牛車……麥仙作
（一〇）土人部落の一部……竹橋作
（一一）馬拉加の船着き場……麥仙作
（一二）彼南にて……晩花作

（一三）古倫母にて……竹橋作
蘇土
（一四）蘇土にて賀茂丸甲板……麥仙作
（一五）蘇士港頭……黒田作
カイロ
（一六）埃及にて……竹橋作
（一七）カイロへの車窓より……麥仙作
（一八）地中海アラブの行商人……晩花作
巴里客窓記
（一九）セーヌ河岸……竹橋作
（二〇）ドミエーの舊家……麥仙作
（二一）習作……竹橋作
（二二）雨の廣場……黒田作
（二三）ボンヌフ……麥仙作
カイニユ
（二四）窓外のニイス……麥仙作
（二五）ルノアールの居を訪ふ道……竹橋作
（二六）ルノアールの家……竹橋作
（二七）ルノアールの庭……麥仙作
ゼノアミピザ
（二八）カイニユの並樹道……麥仙作
（二九）オリーヴの老樹……黒田作
（三〇）ヴィアデラアジオラ……竹橋作
（三一）聖シスト寺……麥仙作
（三二）ピザの街……晩花作
（三三）長ショールの女……麥仙作
ローマにて
（三四）羅馬のある街角……黒田作
（三五）ボルゲーゼの庭……竹橋作
（三六）公園……麥仙作
（三七）聖グレゴリオの石段……麥仙作
（三八）コロセオ……晩花作
（三九）バラチノ丘の裏手……竹橋作
（四〇）羅馬の塲末……麥仙作

（四一）チタスの凱旋門……黒田作
（四二）聖ボナベントレ僧院……麥仙作
（四三）聖グレゴリオの廣場……竹橋作
ナポリとポムペイ
（四四）カムパニヤの一驛……黒田作
（四五）プロキユロの妻（壁畵の一部）……麥仙作
（四六）ポムペイ浮彫……竹橋作
（四七）エルクラナム附近……黒田作
（四八）ソレントとカプリ……黒田作
（四九）雨後のヴエスビオ……黒田作
アッシシにて
（五〇）伊太利少女……竹橋作
（五一）アッシシにて……麥仙作
（五二）アッシシの町……竹橋作
（五三）サンフランチエスコ寺……麥仙作
（五四）オテルスバシオより見たる聖フランチエスコ寺……黒田作

（五五）ポンテヴエッキオ……黒田作
（五六）或るレストランにて……竹橋作
（五七）サンイアコポ……麥仙作
（五八）マリアの顏……竹橋作
（五九）アルノ河畔にて……黒田作
（六〇）フイレンツエの或る庭……黒田作
ヴエネチヤ
（六一）モンセリチエ……麥仙作
（六二）夜のヴエネチヤ……竹橋作
（六三）聖ジジヨルジオヂマヂオレ……麥仙作
（六四）小運河の一角……竹橋作
パドヴア
（六五）マドンナテルアレーナ……黒田作
（六六）堀割の岸にて……竹橋作
（六七）凍てつく町端の道……麥仙作
（六八）片側町……黒田作
（六九）河岸の會堂……竹橋作

ミラノの三日
（七〇）ピアツアデルヅオム……黒田作
（七一）昔の俤の残つたミラノ……同作
（七二）伊太利の少年……麥仙作
（七三）スフオツア城址……晩花作
ピレネを越えて
（七四）瀘車中の寫生……晩花作
（七五）マドリツドの廣場……竹橋作
マドリツドにて
（七六）マドリツド街頭所見……黒田作
（七七）物乞ひの老婆……黒田作
（七八）公園の日あたり……麥仙作
（七九）公園の午後……晩花作
（八〇）公園の池……晩花作
（八一）公園の一……竹橋作
（八二）公園の二……麥仙作
（八三）をどり娘一……黒田作
（八四）をどり娘の二……黒田作
（八五）をどり娘の三……同作
（八六）西班牙の兒ども……晩花作
（八七）エスコリアル郊外……麥仙作
（八八）エスコリアル遠望……竹橋作
エスコリアル
（八九）モナステリオ廣場の一部……晩花作
（九〇）エスコリアルの町……晩花作
（九一）エスコリアルの村……麥仙作
（九二）案内者の兒供……竹橋作
（九三）聖ペトロ僧院……晩花作
ドレド早春
（九四）水汲女……黒田作
（九五）タアホ河畔……黒田作
（九六）ドレドの少女……同作
（九七）サンチン橋……晩花作
（九八）グレコの家の前……麥仙作
（九九）タアホの河畔……竹橋作
（一〇〇）丘上廢寺……黒田作

歐洲藝術巡禮記行

黑田重太郎記
大阪時事新報社編

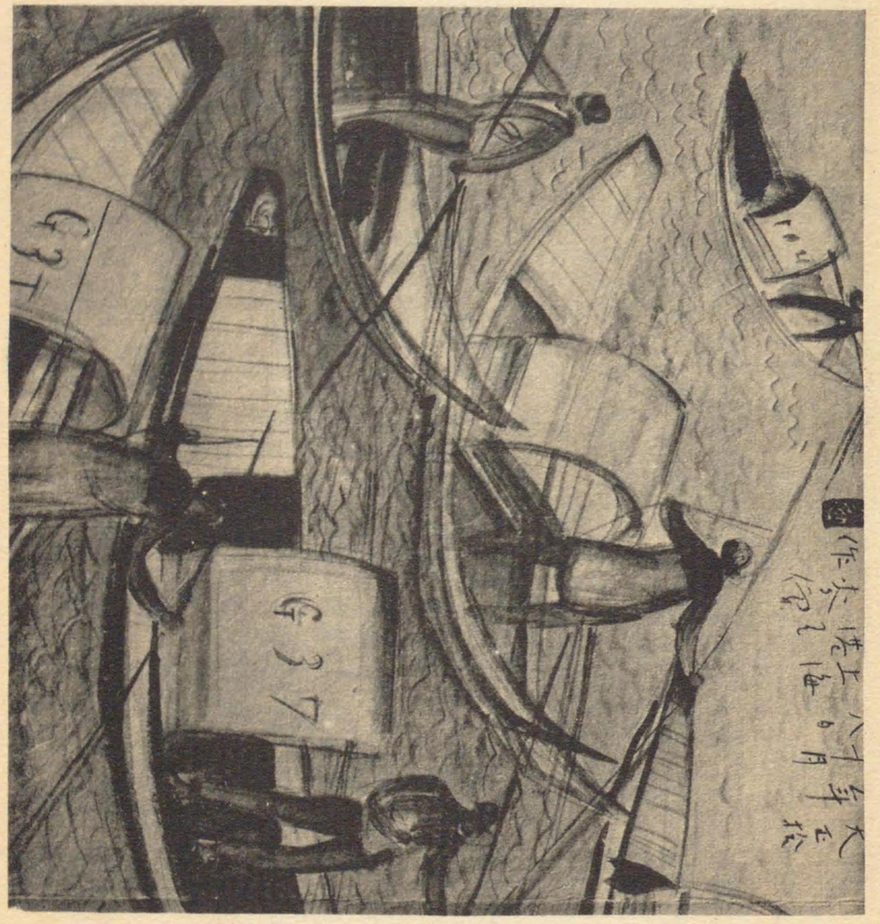
上海の一日一夜

——西遊途上——

（一）

門司を出て西へ航すること一晝夜、廣袤百里の海上を、何時も霖雨をあこのやうに、土色に濁つた波が、果てしも知らぬ大空の下を相搏ち相追ひ乍ら、ひろがつて行く樣が見える。云ふ迄もなく黃海である。

異邦の風物を憧憬して、長い船旅をつゞけやうとする者は、先づ此海を越ゆるとき、はじめて『生れ故郷』の意識を、はつきりと胸裡に刻込まれる。そして其れまでの生活の頁を終つて、更に新しい生活の頁をひらく可く、離愁と期待の奇異に混淆した心地を經驗する。



土田麥僊作

また、幾年かを羈旅に送つたのち、再び此海を過ぎるものは、其彼方に横はる懐かしい郷土を髣髴して喜びに胸を戰かせる。同時に、旅で出あつたいろいろな事柄を思ひ返して、それが恰も見果てぬ夢の幻であるかのやうに、深い愛情の念を禁じ得ない。

五年前の十一月はじめ日本を出て、三年前の八月末に歸つた私は、一たび、二度此海を渡つて、其各々の時の心地を、しみじみ味はひ返し乍ら三度此處を通るときは、ごんな心地がするだらうと、門司を出帆するときから早や待受けられる心地でゐた。

併し其暇もなかつた。中一日をあけて、十月八日の昧爽船は最う揚子江口にさしかゝつてゐたらしい眼が覺めるなり甲板へ出て見ると、四邊はとうに明け離れて、縹色に晴れ渡つた空を鷗が飛び、黄褐色に濁濁した水が、靜かに兩舷に碎けてゐる、吳淞を過ぎて黄浦江に入れば、上海は其處である。同室の竹橋君を促して、上陸の準備を整へてゐる中に、次第に速力を緩めた船は遂に止まつた。上海である。

俄に船の内外が騒がしくなる。小蒸汽が横づけになるなり、先を爭うて舷梯を駈け上る宿引、兩替屋物賣り、人足のために、八千噸近い賀茂丸の甲板は、全く人で埋められてしまつた。水面を見下ろすとも一傳馬が二三艘漕ぎ寄せて、荷役が始まらうとしてゐる。其向ふに澁色の帆をあげた荷船や艀舢が幾つも幾つも浮いてゐる。長い櫓を漕ぎにくさうにして漕いでゐる、舢舨の船頭が、こつちの方を見上げながら、『オイ、オイ』と呼ぶ。乘つて行かないかと云ふのだらう。

甲板で荷役してゐた苦力の一人が、用もないのにそうそ船室をのぞき込む。こんな奴に限つて鞄でも着物でも、其ほかのものでも、手當り次第に掻つ浚つて行くのだ。全く油斷も隙もなりはしない。急いで窓を鎖め、鞄に鍵を下ろして船室を出やうとすると出會頭に日本人の宿引が、ねゝお泊りなら是非私共の方へと、べこべこ頭を下げ、名刺をおしつける。其時甲板では兩替屋の支那人と同船の西洋人の間に、激しい爭論が醸されてゐた。何でも贋金を攫ませたとか、つかませないとか云ふのである。

（二）

小蒸汽が棧橋へ着いて、稅關の構内を通らうとすると、少々目立つ大きさの鞄を提げてゐた竹橋君は呼び止められた。稅關の制服を着た、黄いろい、小さな男である。横合から私が顔を出すと御携帶品は一應檢査しますと英語で云つてゐる。大きな卓子のある所へ行つて、檢査濟のレッテルを貼つて貰つて其處を出ると、迎うに通過して待つてゐた麥僊君と晩花君が、得たりと毒舌を振ひかける。おい、あれは日本人だぜ、日本語で話しかけたぢやないか、何だつて英語で受答するんだい、さては支那人と間違へられたな、爭はれないもんだよ、なぞと。なにね、最初あの男が何か話しかけたのを僕がよく聞き取れなかつたものだからと、溫厚しい竹橋君は頻に辯解してゐた。

薄汚い、背の低い、梶棒の逆に反つて、所謂黄包車（俥のこと）が其處にずらりと甲羅を干してゐる母衣仕立の、物凄い眼つきをした車夫が一行を目がけてわやわや寄つて來る。よく斯うした場合に懐中

龍華の塔　　野長瀬晩花作

物なぞ掏り取られる事があるのを度々聞いてゐるので、私は尚更氣が許せなかつた。私達を乘せて梶棒をおけた車夫は、母衣を風に靡かせ乍ら海岸通の人ごみをわけて威勢よく走り出す。晩花君を乘せたのが一番威勢よかつたものだから、すぐ樣先頭になつてこもするこ姿を見失ひさうになつた。あこで『俺一入別に淋しいこころへ連れていかれるのぢやないかこ心配した』と、何時に似ず心細い事を云つてるたが、無理もなかつたやうである。

上海見物こ云へば、愚園、張園なぞ以前は屹度プログラムの中に入つたものだつた。併しそれ等は最近住宅地になつたり、取拂はれたりして、今は俤さへも殘つてゐない。それで私達は二三の公園を見たり、永安公司へ寄つて旅の用意に漏れたものを補つた外自動車を上海郊外西南約五哩のところ、龍華に走らせる。東道として小蒸汽の中で知り合つた日華洋行の伊達さんが立つて下さつた。

龍華は桃の名勝と聞いたがなる程その季節に來れば定めし美しいに違ひなからう。龍華寺へ行く迄の路の兩側は殆ご桃畑で續いてゐる。龍華寺の創建は吳の赤烏十年とも、唐の嗣聖四年こも云ふが、孰れにしても始めあつたものは失くなつて、宋の太平興國二年、(西紀九七七年)吳越王鏐王が重建せしめたと云ふのが本當らしい。それさへも度々の兵燹に罹つて、修復を重ねた後、殆ご舊態を存しないのである。その上龍華寺は現在民國兵の屯所と化せられて、唯だ私達の弔し得るものは、遠く望むさき多少均衡の美を保ち、近く接する時忽ち一個俗惡な色彩の集團こ化する、七層の報恩塔のみである。

つい近頃までやつてゐたと云ふ修復も了つて、塗り代へたばかりの其の色彩は一層の俗臭を帶びてゐた。墻壁の上に貼札をして『此塔に上らんとする外客は應分の喜捨を乞ふ』と云ふ意味の事が書いてある。伊達さんが心得て、私達を迎へた大男の坊さんの大きな掌の上へ、一弗銀をのせてやると、もつと吳れとせがむ。それをはねつけて、塔の上り段まで來ると、其處の番をして居た男が、また十錢宛よこせと云ふ。押問答の末其男が上てくれた木の扉を潛つて、狹苦しい階段に足をかけると、がたんと背後で氣味のよくない音がする。扉が下りたのである。塔上の一角から、隣の龍華寺の境內を見下ろすと、ほかほかとした秋日和の下に灰色の軍服を着た民國兵士の一隊が體操とも舞踏ともつかないものを躍つて居る。右へ眼を移すと、支那村落の瓦屋根の向ふに青々とした田がつづき、楊柳枝を垂れたあたりを白帆が往來する。黃浦江である。のんきな景色だ。

（三）

龍華からの歸り、道を霞飛路に取り法租界の公館馬路を經て、舊上海城內に入つた私達は、狹い路の兩側の店舖から、油の濃い、甘酸つぱい臭が漂つて來るのと、文字通り肩摩轂擊の有樣と、日當りの惡いじめじめした舖石へべつたり坐つて、蹇へた足や糜爛れた眼や鼻や、指のすつかりなくなつた手で哀を乞うてゐる乞食——中にはじくじく膿の出さうな腕へ何の積りか細い鐵棒をさして見せびらかしてゐる男があつた——に倦ざりして了つた。

歌妓樂第の圖　　土田麥僊作

宿へ引上げて、ぐつたり横になる間もなく、日華洋行の人達と約束の時刻が來たので再び黄包車を驅つて赴いた。支那藝妓を見せて貰ふためである。日華洋行は普通四馬路と呼慣されてゐる福州路にあるから、此夜行く筈の絳雪の家形へあまり遠くない。一行は四人の外に、伊達さんと吉川さんと今一人の日華洋行の人達と、其處の番頭さんの支那人と、取引先に當る天生錦の巖さん等である。巖さんは其道の大通らしく、萬事此夜の斡旋に努めた。

瓦斯の灯と電燈に埋もれた四馬路の夜は晝のやうに輝かしい。其處に櫛比した茶舘の二階を見上げてあゝ此處だなと私は思はず呟いたが傍にゐた人に何ですと聞答められた。前に歐洲からの歸るさ、同じ船の人に誘はれて、何でも斯うした家へ上つた覺があるが、怪しい職業の女たちが耳もとで『うれしかうれしか』と變な日本語で囁くのに恐縮して直ぐさま引下つたことなど話すと、そいつは面白い、一寸覗いて見ませうと、誰やらが先に立つて、ぞかどか階段を上るとき、其時まで西瓜の種子を噛つてゐた女達がばらばら一行を取巻く。多分自分をあけてくれと云ふのだらう、『わたしや、な?』と指で自分の胸をさすのを見流して、またどか降りかゝると、『ちきしやう』と蓮葉な言葉が桃の花片を二つ横にくつゝけたやうな唇から洩れる。

競馬場の方に向つて、辻を二つ三つ越して、薄暗い小路を左へ折れた所に絳雪の家がある。土藏の様な白壁に小さな入口を切つて、上に掛並べてある木札がこゝへ出入する藝妓の名前であらう。入るとき三

間に四間程の納屋と見違へられさうな汚い部屋に、餘り身裝のよくない男女が屯して居る。其處を突切つて、暗い階段をあがると帷を下ろした幾つかの階上の部屋の中の粗末ではあるが稍明るい感じのする部屋へ通された。入口寄りの壁に大きな鏡が掛つて、『摩天黄鵠有奇翼、拔地青松挺勁姿』と大書したこんな所にふさはしくない聯が懸かつて居る。

私達は其處の窓に近い卓子へ導かれた。女達が寄つてたかつて外套を脫がせる、帽子や洋杖を預かる茶を出す、熱い湯で絞つた手拭をすゝめる、下にも置かぬもてなしである。卓子の上には西瓜子や栗を堆く盛つた菓物がある、つき出しの四皿が出て、名を聞いても覺えられさうにない料理が順々に運び出され、巖さんが態々取り寄せたと云ふ芳醇な老酒の醉が、皆の瞼のあたりを薄く染めた頃、妓丁の高く叫ぶ聲が聞えて、先づ帷をかゝげたのは瓜實顏の白い額に漆黒の髮を切り揃へて垂らせた、此家の縫雪である。

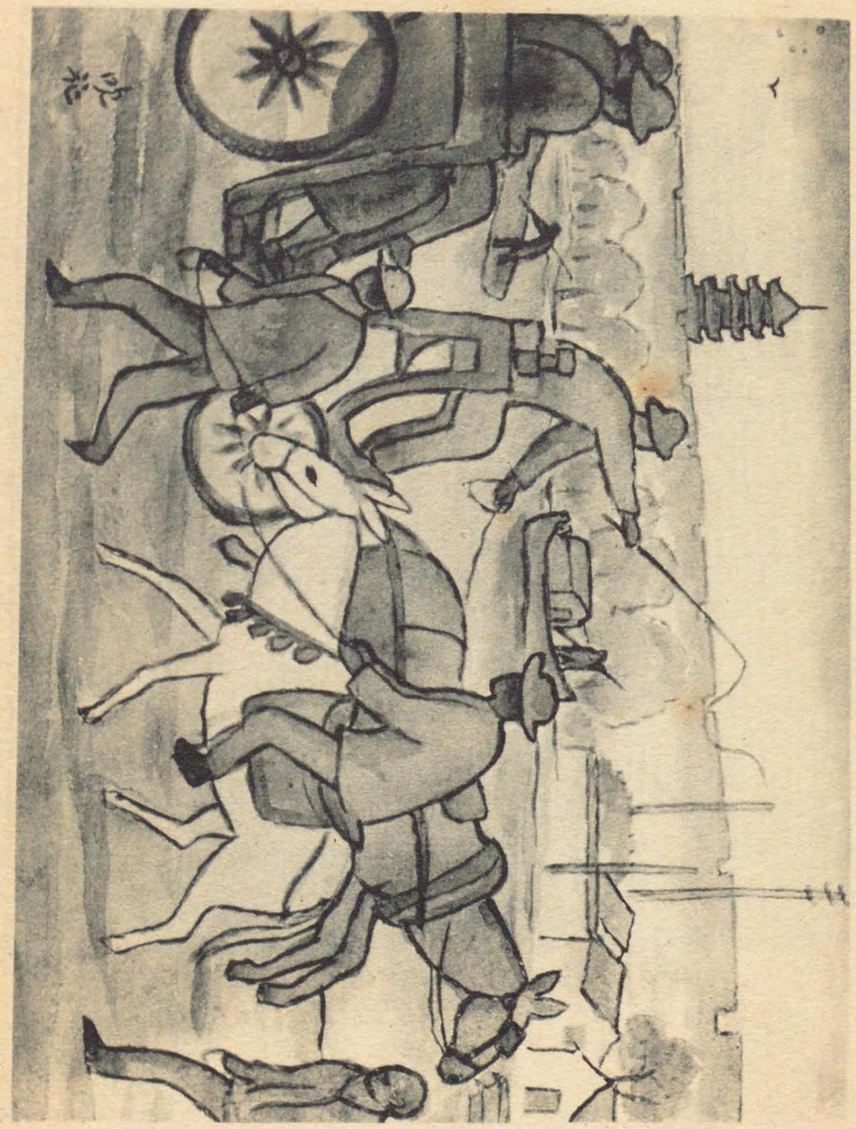
（四）

丸顏の、でつぷり肥つた、如何にも人の好さそうな巖さんが、物馴れた風で招くと縫雪は身を飜して寄つて來た。如才なく皆に愛嬌をふりまいてゐる中に、また聲がかゝつて膩粉を粧つた明眸皓齒の妓達が、次々にあらはれる。皆小柄で、漸つと十五六にしか見えないが、實際はもつといつてゐるのださう

芥川氏の紀行でお馴染の花寶玉と云ふのも居た――が、上海の名妓と謳はれた花寶玉は、近い頃袁世凱の息子に六千元と云ふ身代金でうけ出されたと云ふから、芥川氏のはその花寶玉か、或は此の代替りの花寶玉か、詳かでない――時鴻と云ふのもゐた、彼女は紫緞子に黒い立涌のやうな模様のある衣をまこうて紺青の袴を穿いてゐた。座についてしばらく、朱唇をひらいて、切々たる調子で唄ひ出した。樂弟と云ふのが居た。彼女は綠玉の色した上衣に黒繻子の袴を穿つて、麥僊君の書筆に入ることを興あるここゝ思ふらしく、時々其方を覗き込みながら、無邪氣な笑を洩らしてゐた。其他にも幾人か居たが、麥僊君に續いて、ばら〳〵立ち上つて用意して來た繪具函をあけにかゝる三人を見て、涼しい眼を睜つてゐた。時鴻は、恥しがつて、顏をかくして見たり、思ひ出したやうに化粧函を取出して額に房々と垂れた髮をそろへて見たり、動いて、姿勢がきまらないので弱らせた。そして、肝腎の名指しで呼んだ花寶玉と、此家の絳雪が誰の寫生帖にも入らなかつたので一寸氣の毒な氣がした。絳雪を殘して、他の女達は間もなく歸つて行つた。宴終る頃になつて、主婦が札のやうな紙片を一枚つ、配つてあるく。聞いて見ると、これは轎飯錢と云つて、藝妓家から客の供に出す祝儀ださうである。普通銅貨二十枚の莊票を出すことになつてゐるさうだが、私達は別にお供を連れて來たわけでないから、歸りに車に乘つてこれをやればいゝのださうである。腹がくちくなつたので、皆な卓の前を退いて、部屋の一隅の椅子へ退いて、煙草など吹かしてゐたが、籐の肱掛椅子に凭つてゐた晩花君が、突然あ痛

ツと云つて立ち上つた。どうも南京蟲に螫されたらしいと云ふ。

其處を出て、四馬路をぶらぶらあるいてゐる中に見る〳〵腫上つて來る手をおさへて、大丈夫だらうかと晩花君が心配さうに聞いてゐた。なに、南京蟲位がこわくて、上海なんぞに居る事は出來やしませんと、伊達さんはさも何でもなさそうに答へる。して見ると今夜泊る筈の萬歲館にも居さうだと、そんなものにかぶれ易い私は、少々ならず心配したのであつた。



寒山寺へ通ふ道

野長瀬晩花作

蘇州行

——西遊途上——

（一）

禹貢の揚州、春秋の吳の都其後幾度か稱呼と所屬を更へて、隋より以降、いま蘇州と呼ばれてゐるのは、上海の西二十八里、その昔松江の名で知られた跡の、蘇州河に臨む地に在る。

翌れば十月九日、日曜と云ふので例の伊達さんなど、再び東道の役に當られた。滬寧鐵道で約二時間、朝九時半に發して、稍黄ばみかけた稻田を窓外になが めながら、故國の秋を忍ぶうちに、十一時過ぎ蘇州城外の停車場へ着いた。構内を出ると相變らずの雜沓である。御者の男や、馬追ひの子供たちが右往左往して客を呼ぶ叫喚の中を一行は騾馬に引かせたガタ馬車の二臺に分乘して、先づ楓橋へと志た、停車場前に通じた美しい並木路を、首のまはりに澤山の鈴をつけた驢馬が通る。からから、ころころと暢氣な音を立て乍ら行き違ふたびに、私はいつしか一九一八年の春、砲彈下の巴里をのがれて南佛の古都オランジュへ遊んだ時の事を思ひ出した。あの芽出し頃のプラターヌと、この散りがたの楊の樹と、其處を通る羊の群と此處の驢馬とは、まるで物は違つても、その牧歌的な趣致に於て相通ずるものがある。更にそれが纖綿の旅情を喚起する點に於て軌を一にすると云ひたい。

蘇州郊外

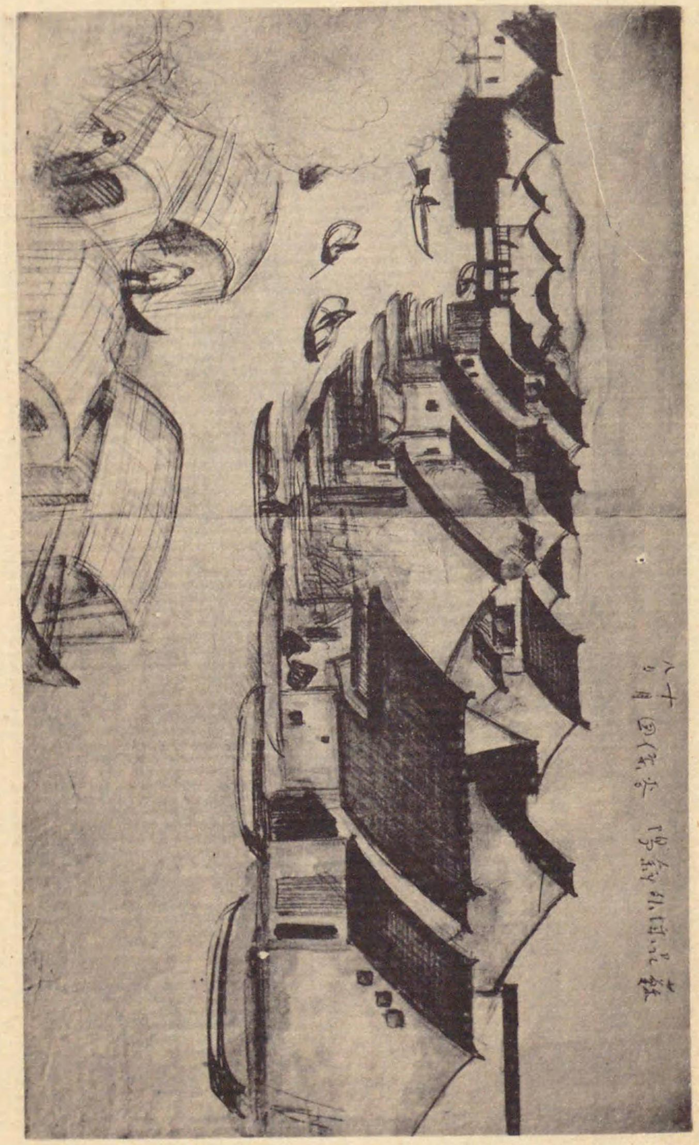
小野竹橋作

樹立を透して河が見え、河を隔てゝ姑蘇城壁が續き、層塔が聳え立つて、一碧の秋空が其上から擴がつてゐるのを眺め乍ら行くと暫時、路は急に右折して、二三の橋梁と支那村落を過ぎ、蘇州河の岸に沿つて走る。蘇州河には幾艘かの畫舫が油のやうな水面を櫂で亂し乍ら、悠々として上下して居る。右手——こゝ云つても土田君と相對して行手を後にして乘つてゐる私には左手である——には虎邱が見える虎邱の上には何かの畫で迚うに見覺えのある塔が稍頭を傾け乍ら立つてゐる。昔闔閭とか云ふ王樣を其處へ埋めるのに十萬の人間を驅り催したが、埋葬三日にして棺の金精凝つて虎となつたこと云ふ話だが、どうせ嘘つきの支那人のことだから信用は出來ない。蘇州河の幅は割にせまい。これが昔松江こ云はれた頃はいまの黃浦江以上に廣かつたさうだから、名物の鱸位は釣れたらう。河の上に、風雅な形をした石橋がいくつも架かつてゐる。これも各因緣つきださうだが急ぎの見物に一々ほじくり出すのは面倒だ。その上私はゆふべの憂慮空しからず、宿へ歸つて一寢入する間もなく頸筋の所を南京蟲にやられたので それが追々腫出して、このガタ馬車に搖られて、支那特有の黃な砂埃を浴びてゐる中に、疼痛堪へ難いまでになつた。おい泣い顏をしてゐるぢやないか、どうしたのだこ麥僊君が尋ねるから、首を前へつき出してそら此通りだこ云ふこ、なる程こいつは妙な格好だこ、同情するよりも先に可笑しがる恨めしい男である。

（二）

何と云ふのか名は知らない河向ふの小さな寺門の傍に公孫樹が一もと、梢を黄に染て立つてゐるのに今更のやうに畵興を唆られながら、見遣つてゐる中に馬車が止まつた。楓橋鎭である。例の變な臭ひのする支那家屋の間を拔けて、張繼の詩でお馴染の楓橋へ上らうとすると其石階の兩側には所狹まいまで食物店が出てゐる。橋上に立つてながめると、楊柳屋臺參差として水に映じ、四ツ手網を組むだ漁舟も浮び、鷄犬の聲のぎかに水を渡つて來る。寒山寺はその近くである。寺門の前にある橋をこれ迄楓橋と誤られ勝であつたさうだが、實際はさきのがさうであつた。寺門を入つて、有名な文徵明の碑の殆んど磨滅したのが、內壁に收められてゐるのを見、代りに立てられた兪曲園の新碑を見て、お茶所のやうな所で辨當をあけた。

寒山寺を出ると、私達はまたせて置いた馬車に乘つて、もと來た道を取つて返した。そして停車場近くの並樹路を左へ折れて、西園の戒憧寺をたづねた。山門は修繕中である。境內のこゝかしこに苦力共がだらしのない風で晝寢してゐる。本堂をのぞいて見たが、其處に納められた金色燦爛たる佛像の餘りに俗惡なのに驚いて、ほんやり棟のあたりを見上げてゐると、よい祝儀にありつかうとして、頻に氣を利かした男が、その方を指しながら何か云ふ。そしてがらがらごしんと云つて仕方をして見せる。伊達さんに聞くと、棟瓦が雷擊をうけて壞れたと云つてるのですと云つた。なる程、それでがら〳〵ごしんの意味が解つた。



作德麥田土

陽斜外城洲蘇

西園の東數丁の所に留園がある。昔劉園と稱したのがそれださうで、盛宣懷氏の父君の有に歸したのを、蘇州名所の一つとして一般に公開したのである。數奇を凝した庭園や茶室がある。此處で寫生をはしめた麥僊君を殘して、晩花君と竹橋君と私は吉川さんと一緒に馬車の一つを驅つて來る道で見つけて置いた姑蘇城壁を繞る河のほとりへ赴いた。晩花君と私は河の方を向いて、竹橋君は並木越しに野の方を描いてゐたが、其あたりを暇さうにぶら〳〵してゐる支那人の群に、一行は取圍まれてしまつた。殊更口數のすくない竹橋君は、たかつて來る人間を追拂はうこともしないものだから、十重二十重に押しかけられて、臭〳〵て困つたとあとで話してゐた。

× × × ×

蘇州を五時に出ると云ふ列車が、やつと五時半になつて動き出した。上海へ着いたのは八時近かつた停車場から直に自動車で日本人倶樂部へ駈けつけて、豫て準備してあつた日本食に箸を取つて、其間に萬歲館へ殘してあつた荷物を取寄せて貰つて、辛ら〳〵九時に碼頭を出ると云ふ郵船最終のランチに間に合つたが、そのせはしない中で、一寸姿が見えないと思つたら、晩花君と麥僊君はもう倶樂部備付の撞球臺でキウを取つてゐたと云ふ。其機敏さと熱心さには、流石の竹橋君や私も舌を捲かざるを得なかつた。

香港にて

——西遊途上——

上海を出て三晝夜、船中記載に値する程の事もなく、十三日の朝早く、船は香港港頭の大小島嶼を送迎しつゝ八時頃入港した、上陸する小蒸汽の中で私たちは思ひもかけず巴里から歸朝の途次に在る小林雨郊君と逢つた——尤も思ひがけないのは此方のことで、小林君は迚っから私達の船と、途中の何處かで行きあふことを承知してゐたのであつた。で、南から來た靜岡丸と、北から來た賀茂丸が、殆ど時を同じうして此港に船がかりするや、君は便を求めて此小蒸汽で來たのであつた。互に安否も尋ねたし、また所要の注意も促したいためだつた。私達は其好意を謝し、そして陸へ向ふ僅かな時間の中に、君に託して鄉里へ致す寸信を書いたりした。宛こして贋こ燕の交驩である。

やがて陸へ着く。同じ船で來た加藤氏の好意で、氏が香港に有して居られる東勝洋行の店員で、日本語をよく話す支那人を案內役につけて貰つた。そして小林君を加へて一行六人、ケーブルカアでピークの上へあがつて轎を雇ひ、山巓を一周したが大井川の蓮臺渡しのやうな格好で、所々斷片になつた上から、遙な町の甍や、港の船を見下して宙に懸つた心地で、魂身に添ひかねた、めい〳〵の顏色は一寸珍

とすべきものであつた。

山を下りて、海岸通の淸風樓で東勝洋行からの饗應を受ける。座に侍る香港藝妓三四誰れかが君達は矢張り日本人だらうねこ入りもせぬ念を押したのがはじまりで、喋るは喋るは、あなた方も支那人にしちやよく日本語をお話しになるのねこ、傍に先刻の案內役をつとめてくれた人がゐるのに差しつかへるやうな事を云ふもんだから閉口した。

午後自動車を驅つて香港を一周する。殆ご全部こ云つてもいゝ位、英國化された廣東省珠江の江口に位する此一小島には、別段筆にする程の事も見出せない。從つて私達の行動も平々凡々で、椋鳥丸出しに植物園をあるき廻つたり雜貨店をひやかした迄の事である。

× × ×

香港へ入る前、コダックをもち出して船の近くを往來する支那ジヤンクを寫してゐると、其處へ來た船員の一人がこの邊は要塞地帶だからなる可くはそんな事をされない方がいゝでせうこ注意されたのがはじまりで、問題を起したくないのは私達の方でも同然だから、上陸して後、いゝ畵材を見出しても筆を執りかねてゐた。あくる朝船へ歸つて後、竹橋君は堪り兼ねたと見え、寫生帖を取り出して、船室の窓から港の景色を寫してゐた。する中に潮の關係か何かで、船がだんだん廻り出して、折角半分まで仕上げた景色が、窓外に逸してしまつた漸つと出帆こ云ふ時分、この邊はかまはないのださうです。上の

兵營がやかましいのですと云つてくれた人がある。それならさうと早く云つて呉れゝばいゝにと恨んだ所で後の祭だつた。午前十一時靜かに錨を捲き上げた船はラマ海峽を過ぎて、鱗々と鍍だたむ海を南へ馳るのであつた。

新嘉坡にて

——西遊途上——

（一）

ぎり〳〵と壓しつけるやうな蒸暑さに徹宵安らかな夢を結びかねた私は、曉方近く頻に鳴る汽笛を耳にすると、船室を遁れて、甲板に出たのであつた。十月十九日、水曜日の午前五時前である　闇の周圍に迫つて、篠突くやうな雨が、激しい音を立てる舷窓から洩れるほのかな燈火に照して、白い水煙が搖ぐのも見ゑた、無數の島嶼と、暗礁のある狹い水路を過ぎるので、船足はいつの間にか緩くなつてゐたやがて夜が明けると。靄の立つた水面に影繪を思はせて、輪郭だけ見せた船の影が、つゝと舷側を掠てあらはれるかと思ふとまた消ゑて行く。

此處まで、いつも豫定よりは少し早めに來た賀茂丸も、此靄のために不慮の災害を慮つて九時と云ふ入港を次第に遲らせねばならなかつた。雨が稍小降りになつて、靄も次第に霽れて來たが、横さまに靡く雨の脚に、久しく甲板に止まる事は出來ない。喫煙室は一ぱいの人である。船室へ降ればむつと暑い、私たちは席を定めかねて、最う指呼の間に入つた新嘉坡の街をながめ乍ら、上陸の時間を待つてゐた。そして船が棧橋に横づけにされたのは午後三時を過ぎた頃である。埋カノォと云つて八丈島邊りに見る

彼南にて

野長瀬晩花作

こよく形の似た小舟を、幾つも〳〵漕ぎ寄せて、土人の潜水夫が、甲板の上の客を見上乍ら、金を抛つて呉れこせがむ。云ふまゝに銀貨の幾枚かを投じるこ忽ち櫂を捨てゝ、ざぶんこ水へ躍り込む。波を分てにゆつこ黒い顔を出すこ握んで來たものを見ぜる。そして舟へかき上つて櫂を取り直す、舟底へ溜つた水を足でかい出し乍ら、また金をせがむ其間もの〳〵一分こはかゝらない、餘り容易なので終ひには投けてやる方で馬鹿々しくなつて了ふ。

舟の着いたこころはタンヂョン　パガーこ云つて街の西端に位してゐる。自動車を驅つて海岸に沿ひながら、新嘉坡河上の鐵橋を渡り、ラッフルスの銅像を左手にながめて大きな榕樹や菩提樹が枝をさし交した大通りを、少し行くこ碩田館ホテルである。此夜は此處で一泊する事にして、少憩の後また自動車を雇つて波止場通りを、町の西端に沿ひつゝ土人部落に入り、遂に植物園に達した、雨は止むで灰色の雲重疊した西の空に、血のやうな殘照が流れる。門を入るこ雨に洗はれた赭土こ芝生の綠が、ほのかな夕闇の下にも、目の覺める樣な對照を作つてゐる。所々に點された瓦斯の火が白い息を吐いてゐた、野長瀬君が突然『ナテン』こ叫んだ。聲に應じて車が止まるこ、降りがけに『トンゴオシャジヤム』こ云ふ土人の運轉手がにやにや笑ひながら首肯いてゐる。呆氣に取られてゐる他の三人を流し目に見て、野長瀬君はしたり顏である。さては先刻出かけに宿の人から何か聞いて手帖にかき止めてゐたのはこれだなこ思つた。初めに云つたのが『暫く待つてろ』こ云ふことで、あこのが『暫く待つてろ』こ云ふのださうである。

こんな處で君に馬來語の通譯をして貰はうとは思ひがけなかつたと私が云ふと、よく覺えたもんだと小野君が感心する、なに馬來語の方が柄に合つてるのだと麥僊君がまぜ返したので、折角の苦心も臺なしであつた。

（二）

此邊は十月から雨季に入るので、來て見ると日本で氣にした程暑くはない。その夜、菩提樹の梢に忍びやかな音を立てゝ、小雨が何度も訪れた、暫らく振りの疊の上の樂寢に他の三君は枕に就くと間もなくすや〳〵安らかな夢路に入つたが、私は表の街路を軋らせて行く轍の音や、沖からかすかに響いて來る汽笛の聲が耳について、久しく眠りに入ることが出來なかつた。あくる朝、眠足らぬ眼を擦りながら窓から、海岸通を見下すと、濡れた舗石の上に病葉が落ち散つて、稻や梢の黄ばみかけた並樹の蔭を眞直に立つた角の先へ金環を嵌て、肩のところに大きな瘤のある、まるで羊のやうに、溫厚しさうな眼をした白い二頭の牛に牽かせて、長い鞭を横たへた土人の車が通る。象に引かせた見世物師の屋臺が、猿や斑驢を從へて、ゆるやかに軋らせて行く。黒人の小僧が、二頭の象の子の耳を引つ張りながらついて行く、その一頭が人通りの騒がしさに、こもすれば後退りしやうとするので小僧がもて餘して居た。通りがかりの土人があはあは笑ひながら、誰一人手を貸してやらうともせずにたかつて見てゐる。それを見ても用事のなささうな顏である。

牛車

土田麥僊作

朝餐を了へて、宿の人の案内で、印度更紗を賣る馬來人の店を冷かした。あまりいゝものはない。何時もの事ながらひどい掛値を云ふのと、こんな所まで日本出來の擬ひものが幅を利かせてゐるのには一寸驚かせられた。

出帆は午後五時と云ふのでそれまでの時間を寫生に費すつもりで、私達は間もなく自動車を賃して昨日植物園へ行く途中目つけておいた場所まで行つた。二度來て見るとあまり面白くない。兎に角その邊で材料を渉獵るつもりで、其處から自動車を歸らせた。宿に傳へる用事を運轉手に云ひつけてゐる中に土田君は最う來かゝつた俥を雇つてどん〳〵走らせてゐた。小野君と野長瀬君が相乘でそのあとへ續くおいてけぼりを食つた私は、ぶら〳〵あるかから歩いて行つたが、日がかん〳〵照り出して暑くて堪らない。仕方がないで矢張り其處へ來かゝつた俥を呼び止めて、三人の跡を追はせる。いくら行つても三人の姿は見えない。もう一哩以上も走らせると路の傍でかたまつて寫生してゐる。やあこゝだ〳〵と飛び下りる途端に、私は一寸失敗をやつた。それは降りがけに俥賃を渡すつもりで、小錢を入れた蟇口を洋袴のかくしにちよいと入れておいたが、降りて一足二足あるいて、氣がついて見るとない。何うやら蹴込みへ落ちたらしい。すぐふり返つて、車夫に聞くと知らぬと云ふ。此邊で一度自分の手元から離れたものは、永久に戻つて來ないと聞いたか斯う素早いものだとは思はなかつた。あの中に兩替し立ての二十幾弗かが入つてゐる。まるで他人に使はせるために兩替したやうなものだ。馬鹿を見た。

（三）

正午に一度船へ歸つて、それからまた波止場近くの土人部落で寫生してゐた私達は、出帆前一時間に筆を收めた。船室へ戻つて、ぐつたり疲れた身體を寢臺に横へてゐるうちに、うと〳〵しかけたが、ふつと何處やらで、何人かの男が聲を合はせて唄ふのが聞ゑる。それは恰度鹿島立つて行かうとする人を送つて、其心地を引立たせるために、努めて快活にしたやうな調子ではあるが、その裡に一味の哀愁が脈々として流れてゐる。最初それを聞いて、思はず微笑かけた私は、何時の間にか旅情の身に迫つて來るのを覺えた。そして私は耳を傾けた聲は斷續しながら傳はつて來る。それは甲板の上らしくも思へ、また棧橋の方であるやうにも思はれた。ふり返つて見ると小野君はぐつすり寢込んでゐた。呼び覺ますのも心ない業だと思つて、私は一人甲板へ出て見た。

空はまた曇つてゐる出帆の騷ぎも一先づおさまつて、陸には多勢の見送人が所々に集團を作つて立つて居る。その中に白い服を着た、護謨園の監督や役員らしい英人の群が居る。先刻の聲は其一團から起つたのらしい。皆赤い顏をしてゐる。酒を飲んで元氣をつけてゐるのと見ゑる。身振り手振りを交へながら大聲にわめいてゐる。でも附元氣は爭へないもので時に感傷的な調子がまじる。送られたのは、頬のこけた無暗に背のひよろ長い男である。頻に見送人の方へ向いて難有を繰り返してゐる。そして其合間々々にこん〳〵と變な咳をする事に依ると、此男は不治の病を得て、植民地でやりかけた事業を抛棄

土人部落の一部

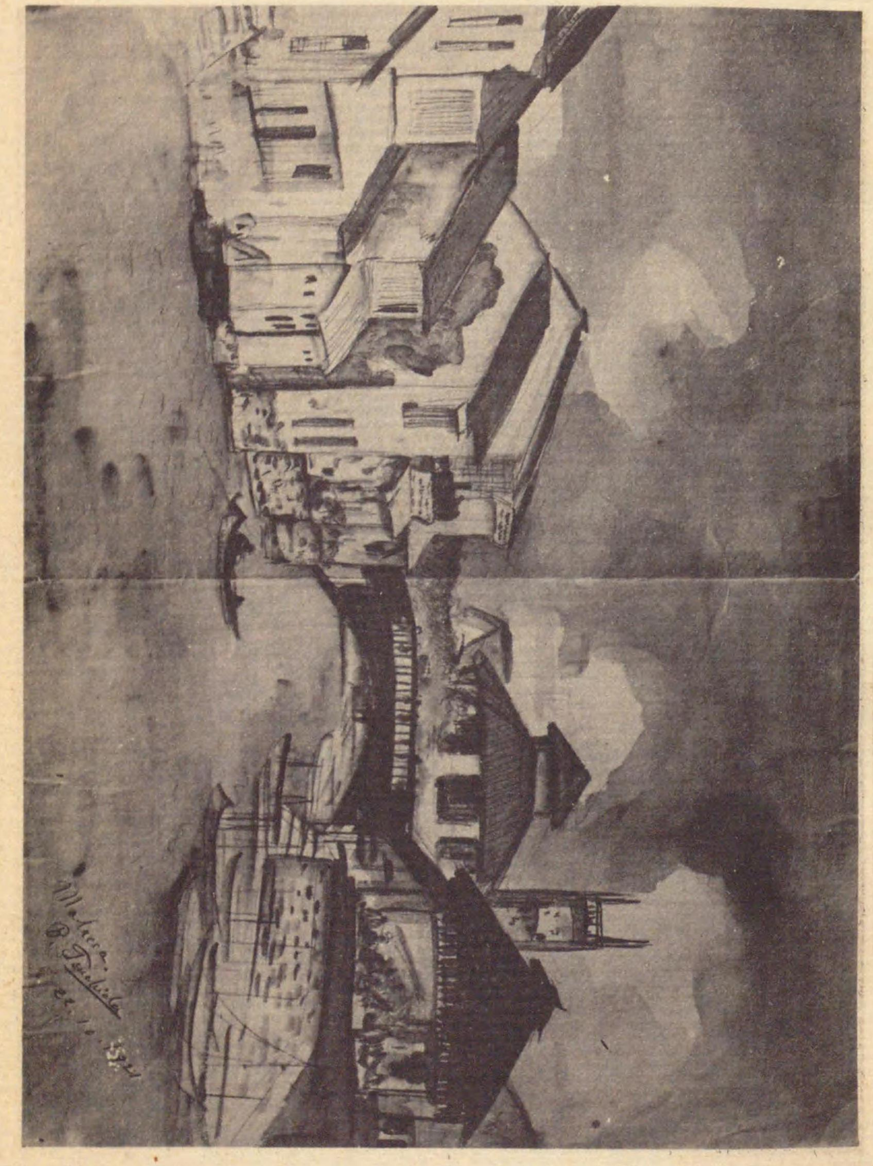
小野竹橋作

して、故國へ淋しく歸つて行くのかも知れない。——私の想像は太した誤りでもなかつたらしい。其夜此男の船室は上甲板の隔離室へ移されたから——兎に角私は陽氣な裡に沈んだところのある此の別離を稀らしいものに思つて見てゐると、その時、また一つの事件が起つた。銅羅が鳴り渡つて、船がするすると巖壁を離れやうとしたとき、ジョンストン・バイアの方から矢の様に馳つて來た一艘の小蒸汽があるそれが突堤に横づけになると、重い鞄をかゝへた男が、動き出した船を目がけて一散に駈けて來た。此處から乘込まうとする一人であらう。が最う遲かつた、ふところから切符らしい白い紙片を出して、わいわいわめいてゐる姿が、次第に小さくなると、私達を乘せた彫入な賀茂丸は、恰もそれ等陸上で起つた事に關知しない如く、兩岸の椰子林や土人の家に手が屆きさうな、狹い水路を拔け乍ら次第に速力を早めるのであつた。

馬拉加の半日

——西遊途上——

新嘉坡より北上する約百二十哩、前の日の夕方に出て翌る日の未明には早馬拉加へ着いてゐた。荷役の數時間が終れば、直に出帆する慣例になつてゐるので、上陸してもゆつくり寫生する間などあるまいと思つてゐる中に九時過ぎとなつて、上陸なさるなら直小蒸汽が出ますと云ふ。それならと船室へ取つて返して、寫眞機と洋杖を持ち出して駈けつけると恰度出やうとする所である。何時も悠然構てゐる小野君が舷梯を降りて行く姿が見えるので、氣の早い土田君や野長瀬君は勿論ゐる事だらうと、小蒸汽に乘り移つて見廻すと影も見えない。おい、土田君や野長瀬君はゐないかと尋ねると、さあ、僕もその積りで來たのだがと小野君が云ふ。ぢや遲れたのだらう、呼んで見てくれ給へとたのむと、心得て、高い甲板を見上けながら、おい〳〵何うしたんだと呼びかける。姿を見つけたのらしい。上で何か云つてるなと思ふ中に、小蒸汽が動き出した。氣の毒な事をした、土田君は僕等を捜してゐる中に、遲れたのだぜと小野君が云ふ。困つたね、短い碇泊時間にさう何度も小蒸汽は出まい、さぞかし俊寛もどきで今頃は甲板で足ずりして殘念がつてゐるだらう、後の雁が先になつたと話しあふ中に馬拉加河口に着く。遠淺なので船はずつと沖にかゝつてゐたから、其間ざつと三十分足らずかゝつた。陸へ上がると自動車がずら



馬拉加の船着き場

土田麥僊作

りこ並んで土人の運轉手がIsay, Mister,こ呼びかける。誰れ云ひ合はすこなく、それ〴〵に乘り込むと、行先を聞きもしないで滅茶々々に走らせ。何んでも最初は河の右岸に沿つて、町から、土人部落から、椰子林を抜けて、小高い丘に墳墓の累々と並んだ邊を過ぎ、ぐるりと廻つて海岸の聖ボール寺院跡の下からもこへ戻つて、今度は河の左岸を海岸に沿つて眞直に突つ走つて、い、加減な所から引つ返して河岸の波止場へ戻るこ、二時間經つてしまつた。前に來た時のやうに聖ボール寺院の廢墟に立つて三百年の昔を忍ぶ事も、極東の使徒聖フランソア、クサヴェーの埋骨の地に感慨に耽る事も出來ないで何が何やら、よいこ思つた景色も、面白いこ感じた風俗もまるで五里霧中で、運轉手に金を拂つてゐると、其處へまた一臺の自動車が止まつて、おい〳〵こ呼びかけたのは土田君である。何うしたんだこ云ふこ、あこの小蒸汽でやつて來たこ答へる。まあよかつたこ二言三言應答してゐる中に小蒸汽が出るこ云ふ。そら來たこ皆ざやく〳〵詰めかける拍子に、舟から岸へかけ渡した板が、人の重みでぼきつこ折れた。丁度其中程の所に居た私は危く中心を失ひかけたが、折れた板橋は中途の橋杭に支へられて、河中へ落ちるのだけは免れた。定めし其時の私の顏色は一行の問題になる可きものだつたらうが、幸ひ土田君はまだ渡らずに陸に立つてゐたので私のうしろだけしか見てゐない。他の二君は既に小蒸汽へ乘り移つて人込の中で氣付かずにゐる。小蒸汽が動き出した。土田君はまた陸へ殘された。まだ後に最終のが殘つてゐるからこ安心はしたものゝ、何時に似合はず二度まで番狂はせをさせたのは氣の毒だつた。だが何が

幸ひになるか解らない。あこの小蒸汽を待つ三十分餘りの間に、土田君だけは波止場近くの景色で寫生帖の二三枚を埋めて、旅の記念を作る事が出來たのであつた。こゝに掲げたのは其一枚である。

野長瀬晩花作

彼南にて

彼南にて

——西遊途上——

十月二十二日、朝食前のことである。甲板へ出て涼んでゐた小野君の話によると、翼の端から端までの差しわたし二尺にもならうと云ふ大きな蝙蝠が、陸の方から飛んで來て船を慕つてついて來たが、餘程疲れてゐたらしく、舷側へ止まらうとした途端にはたりと海へ落ちて、それ切り浮いて來なかつたさうである。馬鹿な、そんな事があつてはいけない。船は右手に馬來半島の翠黛を眺めて、左手に大小幾多の島嶼を送迎しながら行くのである。孰れにしてもさうした事が稀らしくない證據には、時々嘴の赤い、羽の黑い、腹の茶つぽい小鳥が飛んで來て、欄干に止まる事もある。

午過ぎに彼南へ着いた。赤、青、黑、さまざまの色に塗り分た、魚の形に象つた小舟が船の周圍に漕ぎ寄せる。上陸の客を待つのである。小蒸汽は一時半に出た。こゝもわづかな碇泊時間しかなくて、夜の九時には出帆するこ云ふから、陸へ上つても高々半日位しか暇がない。尤も見物と云つた所で支那寺院の極樂寺か、植物園位なもので。これとても見落して口惜しい程の代物でない、兎に角、その邊の景色を一わたり見て來れば氣が濟むわけだから、棧橋を上がるこ土人の馭者がすゝめるまゝに、乘て四哩山手の極樂寺まで走らせた。町を通りかゝるこ馬來特有の一種辛いやうな臭がぷんこ鼻を衝く。町を外れると

椰子林で、熱帯の景色も見馴れる單調なものである、極樂寺へ着いた。谿川に架した木橋を渡つて、高い石段を登つて行くと、黝黑な面に白い髭を生やして、黄色い衣を肩から腰へ纏つた、乞食坊主の様な恰好の老爺が待ちうけて、手にした芭蕉團扇で一人々々煽いでまはる。其あいまゝに掌を私達の鼻先へつきつけて、哀れを乞ふのである。うるさく附き纏つて來るには叶はない。門を入ると今度は支那人の小僧がついて來て、頼みもしないのに案内して廻る。寺の建物はあまり古くなく、俗悪な色彩で蔽はれてゐる。中の佛像はごれもこれも二目と見られたものでない。匆々にして門を出ると、例の老爺がまだ其處に居る。わからぬ事を云つては頻に煽ぎ立てたり、叩頭したりする、あまりのしつこさに一人逃げ二人逃げ、皆してごん〳〵石段を駈け降りると老爺も團扇を翳し乍ら追つかけて來る。其處の樹蔭に休むでゐた牛までが驚いて駈けて來るので、眞先に逃げ出した小野君と私は、待たせておいた馬車の中へ一散に逃げ込んだ。すると其處まで追ひ迫つた老爺は、窓からぬつと首を突入れて、其處に席を占めてゐた小野君の頬を、嘗めないばかりにすり寄せて團扇をせはしく動かせる。それに辟易した小野君は銀貨を一枚其掌へのせてやつた。老爺は馬車の傍を離れると今度は遅れてやつて來た。野長瀬君や土田君にせがむ。怒號りつけてやつと追つ拂ふと、馬車をもと來た路へ歸させる。

疲れ切つた私達はもう筆を執る氣もないので、歸途日本ホテルへ寄つて一休みした後、まだ日は高かつたが船へ歸つた。歸つて見ると九時の出帆が翌日の午前二時に延びてゐる。陸へ行くよりは此方がまし

ミ、夕食後寛いだ姿で甲板の籐椅子に横になつてゐると、稲妻頻に大雨沛然として到つた。やれ涼しくなつたと喜んだが何でもこの雨のために荷役が遅れて、漸く船が動き出したのは午前四時を過ぎてゐたさうである。

古倫母の一夜

——西遊途上——

十月二十七日朝、錫蘭島の南端を見た。はじめは唯一抹の黛影と見ゐたが、次第に近づくに從つてほのかな茜色の空に緩やかに高低を刻んでゐる、椰子の密生した丘陵の彼方を、半ば雲に包まれながら聳えてゐるのが、普通アダムス　ピークと呼ばれ、土語でシリバタギリ、即ち聖定山と云はれて、海抜七千五百呎の嶺上に一つの大きな凹窪があり、佛教徒ではそれを佛陀の足跡とし、印度教徒では佐摩那神回々教徒では原人アダムのそれとする有名なそれかと思ひながら行く。

彼南の出帆が遅れたので通例午前入港となつてゐる古倫母へ晝になつても着きさうになかつた、驟雨時々到つて、海は忽ち鱗々として灰色に掻きくらされると見る間に、また鮮やかなコバルトに歸る。そして次第に日が傾いて、凄じいばかりに黄な殘照が波間を彩る頃漸く止まつた。參差として暮方の空を劃する帆檣の向ふの、椰子の葉影の街は最う灯がちら〳〵してゐる。

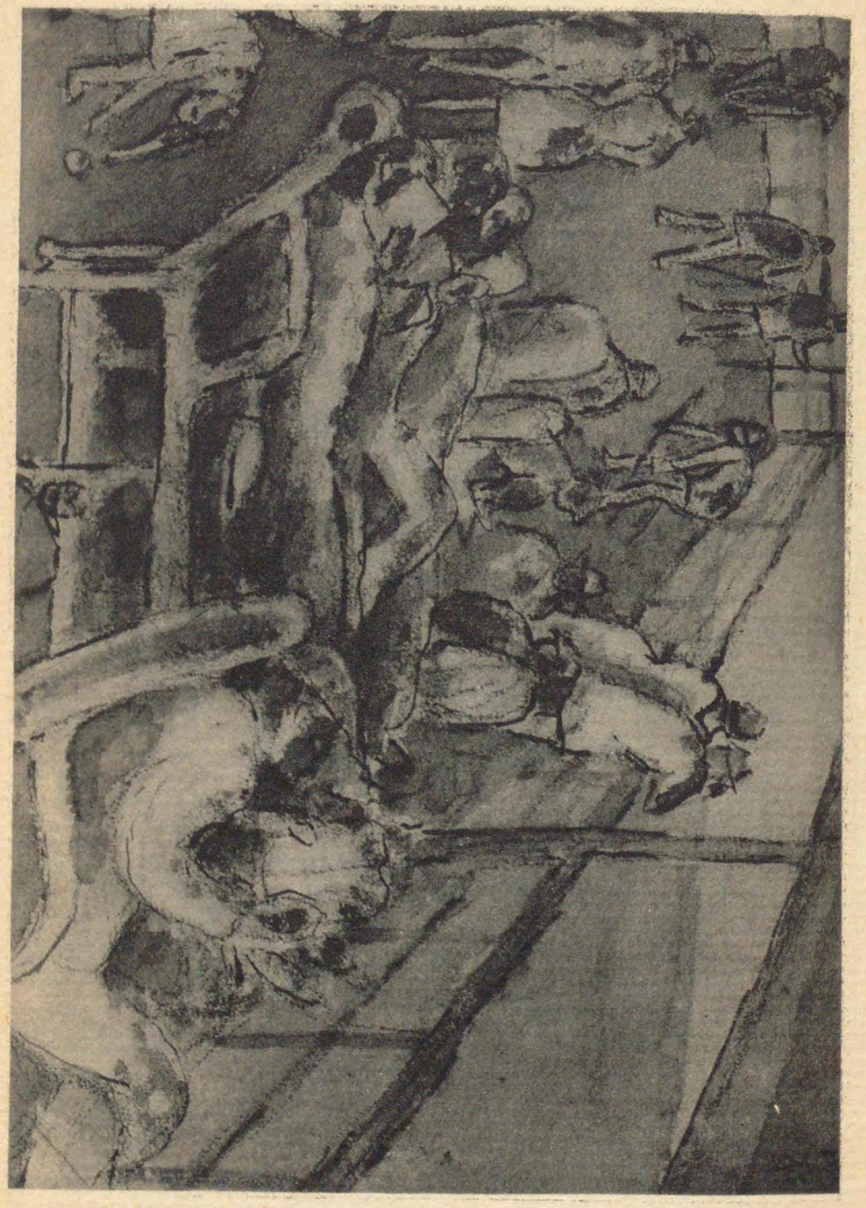
明日は午後二時の解纜だと云ふ。これではカンディの見物もしてゐる間はあるまいと兎に角陸で泊る事にして、恰度迎へに來た小蒸汽に乘つた、彼南の碇泊に船で寢て荷役の騒がしさに懲りたからである棧橋に着いて、稅關の構内を抜けて、街の一角に立つと、宿引、自動車屋の黒奴が煩さくつき纏つて來

古倫母にて　小野竹橋作

る。其中の一人で、ゴオル　フエースを名のつた者があるので、さう〳〵彼處は何でも大きなホテルだつたと、其れがすゝめるまゝに乗る。明るい、または暗い街を過ぎて、橋を渡つたり夜目にもほのかな水邊に大きな樹木が枝を垂れてゐる河岸に沿つて、少し行くと大きな建物の構内で自動車が止まつた。玄關の石階を登つて廣やかな一間に一歩を踏み入れると、俄に燦然たる燈光か眼を射つた。其處は舞踏場と見えて、白い羅や華やかな刺繍の着物を纏つた女が、黒いタキシードに身を固めた男と腕を組合せ乍ら、幾組もあるいたり休むだりしてゐた。舗石を市松に置いた露臺へ出ると、芝生の向ふの、椰子の木の間から、濤の音が手に取るやうに聞こえる。籐椅子に腰を下ろすと黒奴の給仕が出て來て、酒を飲まないか、食事を取らないかと頻にすゝめる、そんな事よりは早く部屋を極めてほしいと、帳場まで行つて一行四人のために、二つの寢臺を備へた部屋を二つ借りる事にした。土田君に野長瀬君、小野君に私と云つた風で枕を並べながら、お互にこんな野郎同士と添寢ぢやつまらないと減らず口を利き乍ら、寢に就いたのは十時を過ぎてゐた。

枕に通ふ波の音に、夢路を故郷に誘はれると書けば、定めし優美に聞こやうけれど、餘りにそれが騒がしいので、耳についてその夜一夜安らかな眠りを結ぶ事が出來なかつた。私達は今更のやうに海岸近くの此宿へ泊つた事を悔むだ。そればかりでない、暑いので窓をあけて置くと、火の光を慕つて無數の羽蟲か飛び込んで來る。翼のさし渡し一尺近い蝙蝠が窓から入つて來て、はた〳〵と天井にぶつ突かるのに

驚いて、こう〳〵窓帷を鎖したが、あくる朝自動車で市中を見物して、皇太子殿下が御成りになつたと云ふモント　ラヴニヤで一憩して船へ歸るまで、誰に聞いて見てもゆふべは寢が足りないで頭が痛いとこぼして居た。



加茂丸甲板

野長瀬晩花作

蘇士まで

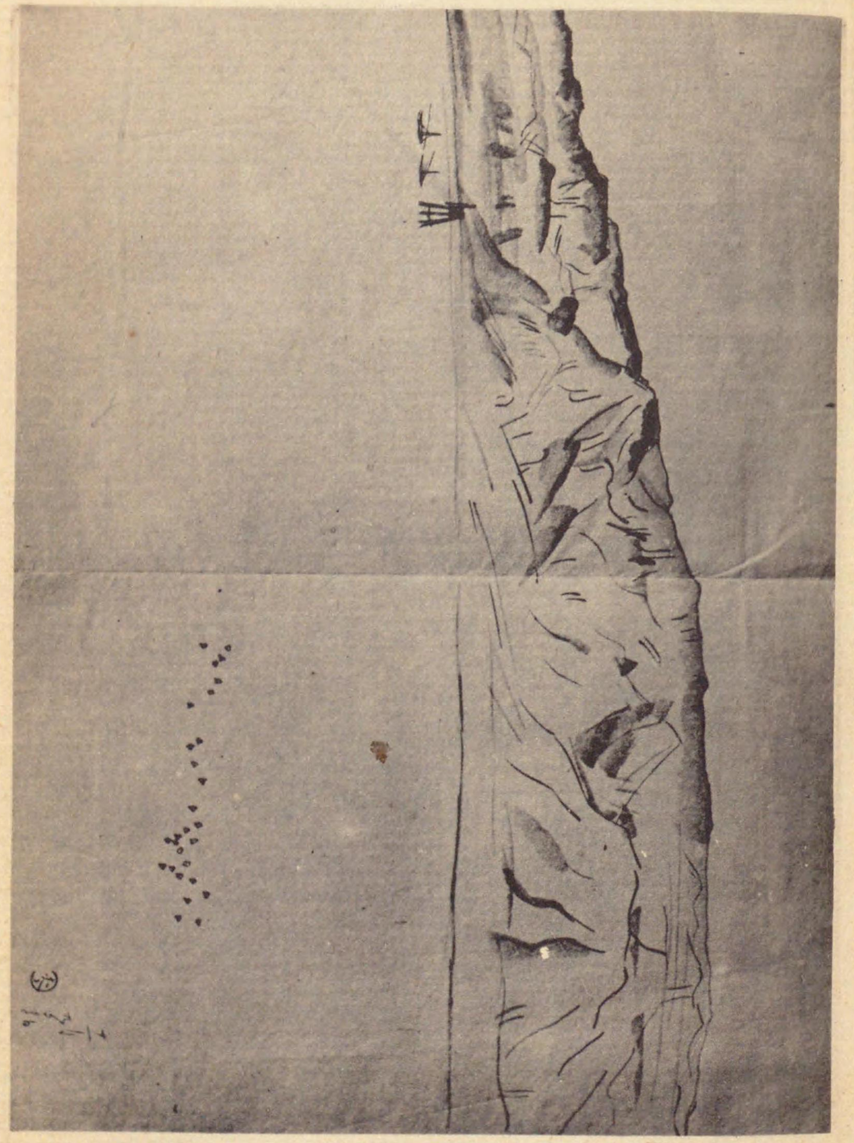
——西遊途上——

古倫母を發して一週間餘一望碧藍々たる印度洋を突破し、バベル　マンデブに達したる後更に數日を費して紅海を縦斷すれば蘇士である。此間私達は毎日々々版木で捺したやうに單調な、そして無聊な時間を過さねばならなかつた。船の中で讀む積りで、同室の埃及人カンビイ氏を吃驚させた程澤山の書物を網棚に積上げてゐたし、第一出發以來まるで御不沙汰してしまつてゐる人達へ手紙も書かねばならず、約束のある原稿にも筆を染めねばならなかつた。が、何か斯う頭を集中する必要のある仕事にかゝりかけると、きまつて船暈に似たやうな不快な心地を覺えるのであつた。それが稀に見る平穩と云はれてゐる此航海で、而かも船に餘り弱くない私にしてさうだから、はじめて遠く乘り出した一行の、他の三君に至つては贅言を要しない。私達はいつも甲板の籐椅子に反くり返つて小説本でも讀み耽るか、デツキ　ゴルフに汗水を垂らすか、或は唯だぼんやりと紺青の波を分け飛ぶ飛魚をながめて暮す位のものであつた。

飛魚と云へばこんな事を思ひ出す。去るやんごとなき邊りの御方が、畏くも思ひ立たゝ事あつて、遠く西歐の旅に出ました途上の事である。一夜御召の船の燈光を慕つて飛魚が甲板に上つた。すると

それが瑞兆だとあつて、大抵の新聞が大きな活字を並べて書き立てたものである。飛魚と云ふ芽出度い名からして、それが瑞兆である事は私も同感する。唯だ私一個の貧しい經驗から推すと、この瑞兆は稀らしい事でないやうである、何故なれば今度の樣に平穩な海上では餘りそんな事に出遇はさないが、以前歐洲に渡つた時、恰度冬のはじめで、神戸を出てから新嘉坡まで約二週間、港々へ着く日を除いて殆ど荒れ通しだつた。それで日が入つて燈火が點くと、所謂『瑞兆』が船を目がけて飛び込んだ事は何度もある。波の高さと甲板の高さとが殆ど平均する位になるからである。現に其時古倫母まで同行した石崎光瑤君なぞは、あくる朝になると前の晩につ拾て置いた『瑞兆』を、洋食皿に入れて克明に寫生してゐたし、他の船客の中には日本酒の壜を傾けて、『瑞兆』の鹽燒を肴に氣焰をあげてゐる人も見受けた。

つい筆が辷つて詰らない事を書いてしまつた。そんな有樣で、私達は自分で自分の身體を持て扱ひ兼ね乍ら、古倫母を出た三日目の午前零時、晝間見るとこの邊に散在する環狀珊瑚礁の一つで、其上に椰子檳榔樹が密生して、遠く望めば恰も海中より直ちに生ひ出でた樣な奇觀を呈すると云ふミニコイ島燈臺が、右舷遙な海上の暗を劈いて、わびしげな光を投けてゐるばかりなのを見、四日目は天長節で聖壽無窮を壽く可く三鞭の杯をあげ、六日目の午後にソコトラ島の黛影の水天の間に彷彿し、八日目の午後二時過亞典沖を通過し、翌朝早くも大小の島嶼の不毛にして荒寥たる樣を送迎しつゝ、何時の間にか紅海へ入つてゐた。流石に其日の午後から此航海中嘗て覺えなかつた程の暑さを覺えて、其夜は中庭に轉輾



蘇士港頭　土田麥僊作

しつゝ寢起のわるい曉を迎へたが、それも案じた程の事はなかつた。その翌る日から涼しくなつて、遂に蘇士に投錨した時、其處かち上陸してカイロ行を思ひ立つた二十何人の船客の中には、早白い夏服を脫いで、色のある合服や合外套に身を固めてゐる人を多く見出したのであつた。

カイロ行

——西遊途上——

（一）

かつきり晴れて、雲一つない空へ、鳶色の高低を連續させながら、不毛の丘陵が聳え其が次第に雪崩落ちて茫々たる沙漠の一部と變じつゝ左右の眼界を消え去ると、其處から俄に瑠璃を碎いて溶かしたやうな水が、幾十の帆檣を林立させ、幾百の輕舟を點在せしめて展がつてゐる、水と陸との境するあたり白堊の家が陽を受けて眩しく輝き、陸と空の近づくあたり濛々として一抹の紅靄が罩めてゐる。それが沙漠の煙塵である事は間もなく知れた。稀に雨を見る地方にて、乾きに燥いた微細な砂埃が、そよと訪れる風にも舞ひ騰るのである。

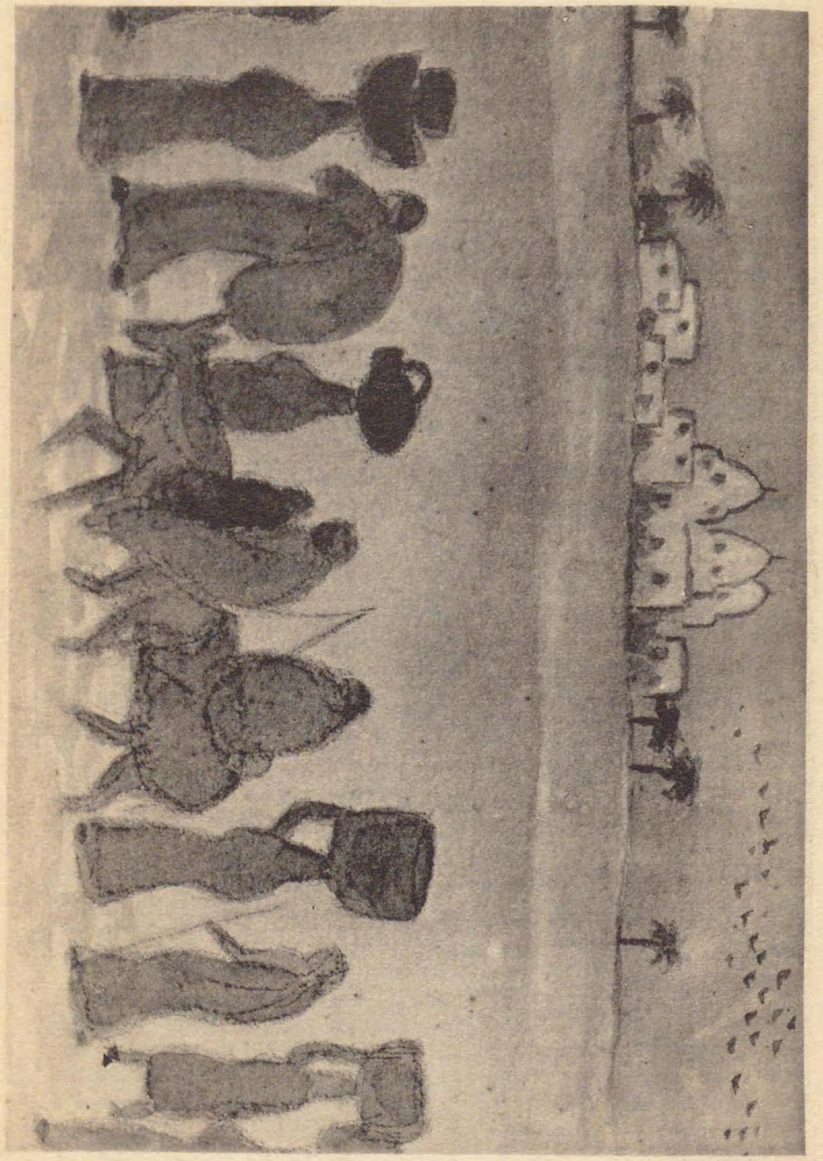
十一月九日午前七時、蘇士へ着いた私達は、翌日午後賀茂丸がポートサイドを出帆する迄の時間を利用して、カイロを志したのであつた。一行二十餘人、大部分は日本人で、僅かに佛蘭西人と亞米利加人の各一人が加はつたのみである。十時上陸、小蒸汽が棧橋に着くと、赤い土耳其帽の金モールで縫ひをしたのを冠つて、眼の怖い、口髭の長い大男が出迎へに來た。郵船代理店から、さし向けられた案内者である。私達が上るのを見て、よい椋鳥御座んなれと、あたりに居た土人共がばら〳〵寄つて來るのを

その案内者が太い洋傘を逆手に持つて、片つ端から殴りつけてゐる、物騒な男だなと思つたが、あとになつて、迚もあゝしなければ收まらないのだと思ひ當る事が何度もあつた、其男に導かれて先づ稅關へ入つて持物や旅券の檢査と、健康診斷を受ける。健康診斷と云つても、ずらりと一列に並んで舌を出して見せるだけの事である。

イスマリアまで、瀛車は運河に沿つて走る。波濤の様な沙丘や、蒼々とした檳榔樹の林を縫つて、時々一流れの青帶が横はるを見えるのはそれである。それが物影に隱れてまた現はれ、次第に廣くなつてリツツル　ビツタア、グレート　ビツターの二つの相續いた湖水のあたりへ來ると忽ち眼界が擴がつて鏡を延べた様な水面を掠めて、一條の黑煙が柱する。運河を航行する船の一つである。

イスマリアへ着いたのは正午を大分過ぎた頃である。こゝでボートサイドから來る汽車に乘換へるのであつた。私達はそれを待つ間、構內のカフエーに憩んでゐた。英語よりも佛蘭西語の方がよく通じるので何だか私には便利な氣がした。椅子に凭りかゝつてぼかんとしてゐると、何時の間にかせつせと靴を磨いてくれる小僧がある。汽車の煙が見えたので立ち上るを、脇から引つたくる様にして鞄を持つてくれる男がある。孰れも過分な心づけを要するのは云ふ迄もない。

イスマリアからカイロまで所謂『ニールの賜』と呼ばれた、一望の青蕪を見ながら行く。銀灰色の橄欖林や黝綠の檳榔樹を點綴して、赤い穗先を風に靡かせた唐黍畑がつづき、さゝ流れに沿つた道を驢馬の背



埃及にて

野長瀨晩花作

に乘つてゆつたり打たせて行く、黒い被布眼深の女や駱駝を追つて來る赤い頭巾の男や、素燒の水甕を斜に頂いて行んでゐる少女などを、時々見かける度に、私達は初期伊太利派の手に屢々成つた『聖家族埃及へ逃る』の圖を思ひ出さない譯には行かなかつた。斯うして私達は六時間近い車行を、殆ど退屈する事なしに、窓外の景色を貪る樣にして行つたのであつた。唯だ困つたのは、無暗に埃りつぽい事である。いくら叩いても車席の上は素より、顔や手首まで茶つぽい灰のやうなもので氣味わるく蔽はれ、朝變へて出たばかりの襟が垢じむだやうになつてゐた。

（二）

次第に傾いた太陽が、金の大きな圓盤をくる〳〵舞はせながら、遙な野末に落ち、其處から灰色がかつた紫色の靄がぼおツと湧き出して、眞紅に燃ゐた殘照の空へ、幽かな金字塔の影が二つ、夢のやうに描き出された頃、漸く私達はカイロへ着いた。停車場を出ると、前の廣場を繞つて高低參差する大きな建物の不規則な外郭が聳ゐ、其窓々を彩どつて、黄に、赤に、綠に無數の燈火が燦々として煌めき、其下を、恐らく世界各國の有ゆる種族から流れ込むだと思はれる人の波が、右に寄せ左に打ち返してゐる。

斯くてカイロの第一印象は非常にアニメエーたものを私達の胸に投げ込むだ。私達は唯だ倉皇として廣場の一隅に私達を待受けてゐた自動車に分乘して、それ等燈火の海を横切り、人波を分て、幾條かの繁華な街を右折し、ニイル河に架した橋を渡つて、植物園の前を眞直に、ギセと呼ばれた郊外へ通ずる

街道を、濛々たる砂塵を揚げながら驀然こして疾驅するより外なかつた。大きなアカシアの並樹が道の兩側に聳えてゐる。其梢の間から、金を燻したやうな空の色が。次第に紫がかつた紺青に變つて、段々數を增して行く星影こ、左手上にかゝつた片破月の影が、漸く光を加へて來るのが見えた。樹の間から透かして見るこ、泥を固めて築き上げた例の土人の部落がつゞき、獨り暮殘つた水たまりの上へ、はつきりこした金字塔の倒影が映つてゐる。並樹の盡きやうこする處に小さな廣場があつて、一方の高いホテルの窓から、明るい火影が斜に射してゐた、其處から先は坂路になつてゐるらしい。

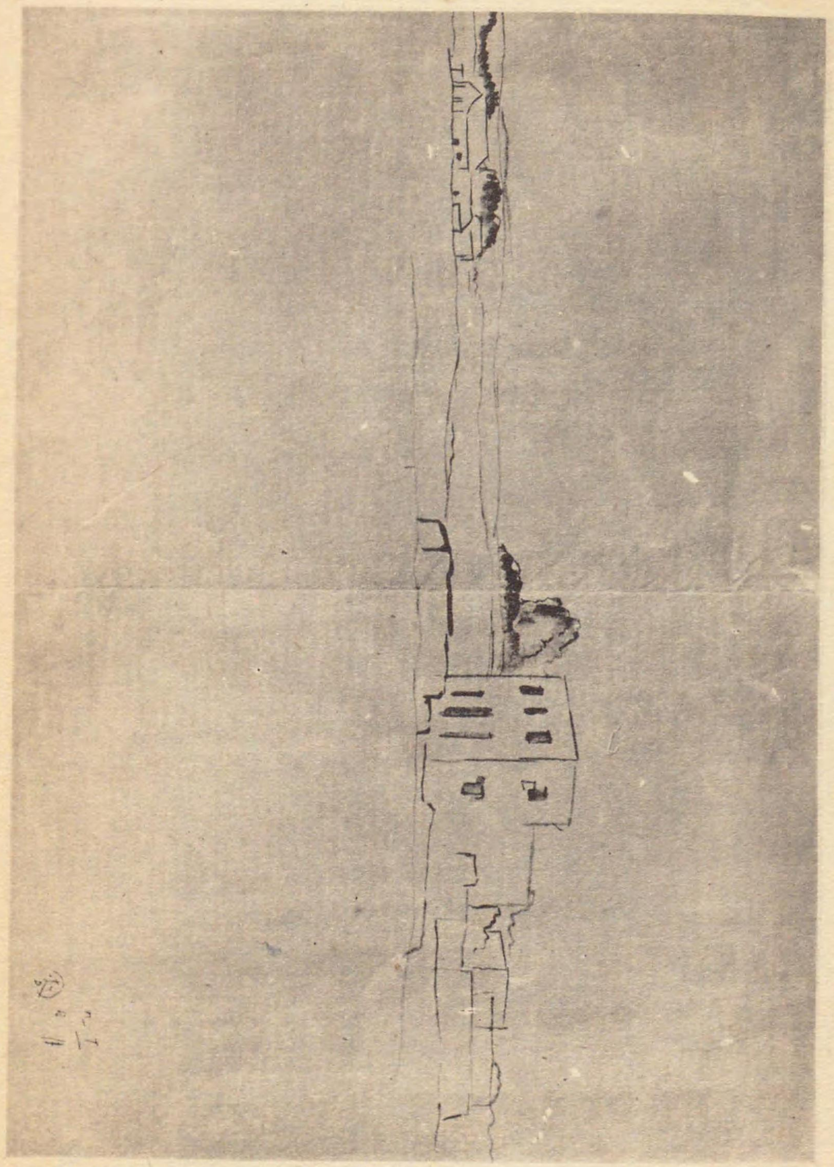
自動車は其處で止まつた。私達の降り立つのを見かけて何處から出て來たのか、見上げるやうに高い、大きな駱駝を牽いた亞拉比亞人が何人も寄つて來た。大きな聲で、まるで喧嘩でもしてゐるやうに喚き交はす中に取り圍まれて。私達は小さくなつて一箇所に密集してゐた。決して一人で離れちやいけませんよ、此奴等は實に慄悍で、强盜同樣なんですから、ごんな事をするか知れませんよこ、Nこ云ふ何度も此邊へ來て、よく事情に通じてゐる人が頻に注意してゐた。

例の大男の案內者は、少しの油斷もないこ云ふ樣子で、太い洋傘をふり上げ乍ら、一行の一人を勝手に連れ出さうこする駱駝牽きをビシリビシリ毆りつけてゐた。やがて案內者の指圖に從つて、私達は一人々々駱駝のゐる所へ連れて行かれるのであつた。段々連中が減つて、順番が近づいて來るに從つて、私は困つた事になつたこ思ひつゞけてゐた。こんな生體の知れない生物に乘つて氣心の知れない男に連

れられて、人氣のない沙漠へ踏み出して、若し途中で落つこちて、一行に離れやうものなら、何うなるだらうこびく〳〵者であつた。それで自分の番になつて、逞しい男に肱を取つて連れて行かれて、其處にうづくまつてゐる駱駝の背中へ扶け乘せられた時、密かに觀念の眼を閉ぢたのである。駱駝が、むく〳〵起ち上つた。後脚から始めるので鞄こ洋杖を抱へて背の上で縮み上つてゐた私は危ぶく前へのめり落ちさうになつた。皆用意が整ふこ、小山のやうな生物は其まゝ縱列を作つて爽かな月の光を踏み乍ら石高道を登り降る。こ、其處から沙漠がひらけ、其行手に、ありこある人の手に作られたものゝ中の、最高最大を思はせる金字塔の影が其尖頂を空に向けて立つてゐたのである。

（三）

駱駝を牽いてゐた男が私に話しかけた。ムツシユウは英語が出來ますか、佛蘭西語が出來ますか？佛蘭西語の方がいゝと云ふこ、『ぢや一層好都合』(Tant mieux)こ言下に答へて、ぺら〳〵金字塔の說明をはじめた。ギゼにある金字塔は其數九つあつて、其三つが大きく六つが小さい。こゝにあるのが最も古いもので最もいゝものだこ云つたが、最も古いものだこ云ふこは嘘だが、最もいゝものだこ云ふこは古代の史家をはじめ近代の考古學者も口を揃へて稱讚してゐるのでもわかる。高さ百卅七米突こ云ふケオツプスの金字塔の脇を通つて其偉大さに感嘆の聲を漏し乍ら行く程に、駱駝の說明は何時の間にやら、酒手の無心に變つてゐた。そこでムツシユウ(あなた)は何かお忘れものがありませんかこ云ふ。何もない



カイロへの車窓より　土田麥僊作

こ云ふこ駱駝牽きへの贈物をこうるさく手を出す。奴等が何を云つても取あつちやいけませんよ、なまじつか錢なぞをやるこ、まだ〳〵持つてゐるこ見込んで、どんな事でもし兼ねませんからね、それに一人がやるこ皆がせびられる譯ですからこ、呉れ〳〵も申し渡されたのを正直に守つて濟んだら皆で一所に渡してやるからこ云ひ〳〵する中に、女面獅子像まで來た。

今度は案内者が其前に立つて説明をはじめる。何こ云つたか今よく覺えてゐない。覺えてゐないこ云ふよりも、寧ろ聞いてゐなかつたので頭にないこ云ふ方がいゝ。そんな怪し氣な説明に耳を傾けるよりも、好きな時にマスペロの本でもあけた方がましだこ思つたからである。私はそれよりも此沙漠の夜の透明な空氣を徹して水の様に澄んだ月の光が、五千餘年の昔、ケオプスの世既に存在したと云はれてゐる巨大な女怪の像を、青繻子の澤やかさを有つた空を背景にして浮き出させてゐるのに心を奪はれてゐた。こ忽ち一道の光明が此巨像の足下から閃いて俄に濃くなりまさつた、四邊の闇を押し拂いて何を凝視めてゐるのか、大きく瞠つた眼や、蠻人襲來の時に慘らしくも毀たれた鼻や氣味わるい微笑を湛へて兩の端で屹こ引締めた唇が歷々現はれて、あつこ驚く暇もなしに墨を流したやうな夜の色に歸つた。光明に眩むだ眼はもこの像をそれぞこ定め兼ねた。私達をしてよく見させるために、案内者の燃したマグネシウムが盡きたのである。私達はまた駱駝に乘つて女面獅子像の背部を廻つた末古代墳墓の一部へ導かれた。其處でも案内者はマグネシウムを燃いて見せてくれた。夜の事で、はつきり位置を定め兼ねたが

これは慥か第五歴朝に出來たと云はれてゐる、メヒの墳墓であつたと思ふ。收穫や牧畜の情景を現はした浮彫が昨日彫つたと思はれるばかりの生々しさを見せて、其間に配された秀麗な人物の横顔が現はれてまた消えた三度駱駝の背に凭つて、私達は盡きぬ名殘を惜しみ乍ら遂に其處を去つた。

もと來た道を引返す間、駱駝牽きの酒手を請求する事一層の烈しさを加へた。中には煩くなつて何がしかを握ませた人もあるらしい。私なぞは正直に云はれた通りを守つてゐたお蔭で、もこの廣場へ來て駱駝を降りやうとすると一人小暗い所へ連れて行かれて、兩方から寄つて來た、荒くれな男に兩腕を摑まれ、一生懸命振り切つて逃け出したが、あんな事ならやつた方がましだつたと思ふ。歸途でも一行の間にそうした話が交されて、誰れも強請られた、俺も取られたと云ふ事ばかりだつた。中には金をくれなければ鐙を外して落してやると脅迫された人もある、もうこれから先通用しない新嘉坡の五十錢札を握らせて、これは五弗だぞと云つた人なぞは、最も巧妙だと云はねばならない。其夜私達はコンチネンタルホテルに一泊して翌早朝ボートサイドへ向つた。カイロの一夜は強い印銘を私達の胸に刻み込んだ。あの秀抜な埃及藝術をもつと根本から理解するために、機があれば今一度ゆつくり出かけたい氣は充分あるが、あのひどい埃と乞食根性の人間ばかりが充滿してゐるのを思ふと、その勇氣も大分挫かれさうである。

アラブの行商人

黒田重太郎作

地中海を越えて

——西遊途上——

坡西土へ着いたのは晝過ぎた頃である。此の運河と同時に開け、通航の船舶や旅客に依て繁榮を維持してゐる一個淺俗な港場に就いては記載す可き何者も有しない。また其程の時間もなかつた。汽車を降りるなり郵船代理店へ行つて、賀茂丸出帆の時刻を聞くと午後一時だと云ふやれ忙しない。買物する間も何もないうかゝして俊寛を學ぶなど、あたふた波止場へ駈けつけて、小蒸汽を雇つて船へ歸り、まづ御無事で何よりと殘つた人達から祝されたのはよかつたが、直にも出るかと思つた船はまだ一向動く景色もなく、依然として荷役をつゞけ、甲板に群つてゐる物賣や兩替屋の聲も喧しい。聞けば出帆は二時と最初から決つてゐるので、一時と云つたのは私達をして乘遲れさせないための懸値であつたらしい。そんな事ならちやんと昨宵書いて置いて、投函するばかりになつてゐる國許への手紙も出せたのにと口惜しがる人もあつたが、事なく濟むだのを寧ろ感謝しなければなるまい。兎角云ふ中に荷役の物音も靜まり玩具函を引つくり返したやうな甲板上の雜沓もきれいに掃出されて、薄れ日の下に鈍い銀色に光つて居る波の上を、するゝと辷つて、船は愈々地中海へ浮び出たのであつた。

翌る日は大分搖れた。久しく平穩な海上に馴れてゐるので船暈に惱まされた人も可成りあつた。三日

目の早朝クリードの南端を過ぎ、四日目の夜十時、メシナの狭い水路を通つて、兩岸のレツギオ、メシナの二つの街を美しく飾つてゐる、無數の燈火に懐しい南歐の景色を忍び乍ら、五日目の午後二時、ストロンボリを活火山が見ゆるに、船で親しくなつたドE機關士に起こされて、蒼味を帶びた夜の空に、朱を滲ませたやうな噴火の色を睡た眼を擦り乍ら讃嘆し、六日目の朝コルシカ島山の向ふに、雪を戴いたアルプスの連峰を遠く髣髴しつゝ、七日目は此航路で殆ど お極りの樣になつてゐる荒浪に遇ひ、八日目の十一月十六日朝早く馬耳塞港外に達した。

其前夜私は過ぎ去つた昔や、これから先のことをあれこれと思ひあはせて、殆ど睡りを結び得なかつた朝五時、まだ暗いのに床を離れて甲板へ出て見ると、冷たい風が頬を掠めて過ぎた。やう〳〵曉け離れて行く空の一方に月が殘り、何時の間にか靜かになつた海上を、白くほのめくのは港外に點在する石灰質岩より成つた幾多の小島嶼であらう、近づくに從つて眞つぼい綠の草に蔽はれた、白い崖の上や片蔭に赤瓦の家が一軒二軒ぽつんと淋しさうに立つてゐるのが見ゆた。明るくなるに連れて、次第に濃い銀灰色の霧が流れ、暫くは海も島も空も唯一色の空濛裡に融け去つたが、やがて右手の水平線上が淡い茜色に染まつて、刻一刻それが廣がつて行くと、其間から突然朱盤をかけたやうな大きな太陽が登つた。同時に厚く封じた霧の一部が裂けて、澄んだ空の琅玕の色が滲じみ出すと見る間に、それが次第に擴がつて行つた。霧は追々一方に押し遣られて、水面の上幾十丈を菫色に匂つてゐる其中から、微な影法師を抽き

出して、高く聳えるものがある。瞳を定めてよく見るこ、それは見覚えのある馬耳塞のノオトルダム
ドラガルドの伽藍であつた。四十餘日に亙る長の航海を了へて、憧憬の地は斯くて私の目前に横たはつ
た、私はその時の感じを何こ云ひ現はしていゝか知らない、唯だ無暗に動悸の高まるのを覚えてゐるば
かりである。

巴里に入るの記

——西遊途上——

（一）

山程ある一行の荷物をクック社に託して、無事税關を通過した上、珈琲店へ休むだり、馬耳塞名代のバツソオで魚羹汁に舌鼓を打つて見たり、ノオトルダム ドラ ガルドへ上つたり、美術館へ駈けつけたり、椋鳥らしい忙しい一日を送つて、停車場へ赴いたのはその夕方の五時前だつた。其處へ來てゐたクック社の、朝上陸する時厄介になつた男に、もう乘り込むでもいゝかこ聞くこ、いゝえ七時半のですこ云ふ冗談ぢやない、君は朝此汽車で立てるこ云つたぢやないかこ突込むこ、實は席が取れなかつたのでこ頭を掻く。いくら云つた所で乘れないものは仕方がないから、其れ迄待つ事にして界隈の珈琲店で待つ中に、土田君が今夜此處で泊るこ云ひ出してくれては困る。席の申込を取り消したり、車中へ運ぶ筈になつてゐるこまかい荷物をまこめて其上ホテルを捜したり、そんな事は迚も僕一人の手におへないこ云ふこ、ぢやア井ニオンで降りやうこ云ふ。一體ごうしたのだいこ聞くこ實は船を降りる前から下痢を催してゐるので、長い汽車の旅には堪へられないのだこ云つた。困るなあ、荷物がふければ僕も途中のる〳〵見物し乍ら行く方がいゝんだけれど、かう澤山ぢや降りる度に車を呼んだり、

運んだり、降ろさせたり迚もたまらない。辛棒してせめて里昂迄でも行つてくれないかと云つたが聞かない。第一ア井ニヨンぢやいゝフレスコが見られるさうぢやないか。現に送別會のとき、君は僕等に是非あれだけは見せたいと云つてゐた、だから降りたいこと云ひ張つて了ふ。既に言質を取られてゐる上、相手が病人——こいふ程の事もないらしいが——來てゐるもので私が讓歩して、それに從ふことなつた。そして夕食を其處の食堂で認めた上馬耳塞を立つ。

汽車中で二人の佛蘭西人と懇意になつた。一人は四十恰好の商人體の男で、今一人は三十そこ〳〵の物こし恰好何か斯う粋な商賣のお主婦らしかつた。退屈紛らせによい鳥がかゝつたと思つたのだらう。いろ〳〵日本の事を聞くので、其れに應じた答へをしてゐるこ、何か唄を歌つて聞かせこ云ふ。よろしいと他の三人を促して『山で赤いのは』こ歌ひ出したが、膽が据わつてゐる樣でも、實は何處かにしほらしい處のある連中故、途中で地味な節に落ちて行くのを、堪へ〳〵してやつこ終るこ、大出來こ喝采する。ごうお思ひでしたこ折返して尋ねると左、樣少し悲哀でと云はれたには何れも開いた口が塞がらなかつた。日本には都踊こ云ふのがあるさうですね、定めし綺麗でせうこ云はれて、さうです先づこんな風でこ、家に子供がある事も忘れて、見まねの手をあけたり足を踏み出したり仕方話をして見せたが、これは後で考へても汗が出る。まづそんな調子で二時間は瞬く間に過ぎ、ア井ニヨンへ着く。其人に手傳つて貰つて窓から荷物を出し赤帽を呼んで運ばせ、さて改札口を出やうとすると、六百基米以內は下車出

來ないと云ふ。そんな筈はない。クツク社の出張員が出來るこ云つたこ押し返して見たが駄目、驛長室へ行つて一人宛六十何法かの增賃を拂つて、やつこ構內を出た。其處へ來てゐるオテル　レヂナの馬車に乘つて宿へ着くこ其夜は疲勞に前後も知らず眠つてしまつた。

（二）

翌る朝は夙く起きて法皇宮へ志た。旅館を出て左すれば市廳前の廣場へ出る。十四世紀下半に成つたこ云ふ古風な鐘樓の上に、晴雨を豫知するために設けられた男女の人形の、これも古風な衣裳を着けたのが、今日は曇ると見ゐ、對ひ合つてゐるのを見上げ乍ら、少し登りになつた道を法皇宮の前まで出た。案內の時間にはまだ間があるので、其少し上に聳えてゐるロシエ　デ　ドムの丘に登つた。丘の根元を繞つてロオヌの急流が迂曲しながら流れる、河の中程に半ば斷ゐた聖ベネゼ橋が橫はり、中島の木立を越して橄欖の野が擴がり、キルヌウヴの城址や慶塔が赤い甍の村落を裾に控へて屹立ち、雪かこも見られる白い崖の斷續した遠山影が地平を劃つて連つてゐる。南佛蘭西の秋は酣であつた。所々に點綴された黃な白楊の葉が、黝綠のシプレスこ照り映ひながら淡い日ざしを浴びてゐた。なる程いゝ所だなこ先づ土田君が感嘆の聲をあげた。小野君や野長瀨君も其れに同じだ。こんないゝ所だから通りすがりに見て行くのは勿體ないこ云つたのさこ云ふさ、またも一度ゆつくり來るさ、いゝ所は何度來てもいゝんだからこ土田君が云ふ。丘を降りがけにロシエ　デ　ドムの伽藍を訪ねて玄關上壁に描かれたシモオヌ　デ　マ

ルチノの作の殆ど剝落したのにも伊太利古大家の筆の跡を忍び、さて法皇宮へ行つて、宗議室に描かれた豫言者の群像や、聖マルチアル、聖ジヤン二禮拜堂に飾る二聖者の一代記や殊にガルドロオブ全體を充した初期フランス派の風俗畫に魅惑されて了つた。二度目に來た私さへさうだもの、はじめて、それ等第一流の藝術に接した他の三君の感激は察するに難くない。（この法皇宮の歷史や、其の中の壁畫に就ては拙著『憧憬の地』に大抵盡してある積故反覆を避けたい）

法皇宮を出たのは正午に近かつた。ホテル前の料理店で晝食をしたゝめた上、再び旅裝を調へてア井ニヨンを立つたのは午後二時半である。里昂へ行く迄の汽車の中でも、また佛蘭西人と懇意になつて適當なホテルを敎へて貰ひ、七時半に其處へ着いた。

段々北へ上るので大分寒かつた。こゝある料理店で夕餐をしたゝめた上、町を歩かうこしたが、疲れてゐるのと、浮ツかり合外套を着て來て風邪を引く心配があるのとで、其夜は早くホテルへ歸つて寢た、里昂を立つたのは翌る日の午後三時半であつた。近代の名匠シヤグンヌの鄕里であるだけ、まるで其人の筆かこ思はれさうな、靜かな、麗しい秋の野の景色を心ゆくばかり窓外に眺めた上、今日は金曜日こ云ふので、がらりこ空いた車室を四人で占めながら、巴里へ着いたのは夜の十時過ぎであつた。私が晝をやり出した最初からの友人T君が停車場まで迎へに來てくれてゐた。

ホテルもらやんと用意してゐるこ云ふので、ではこ自動車に乘つて、河岸の並樹蔭を河に沿つて下る

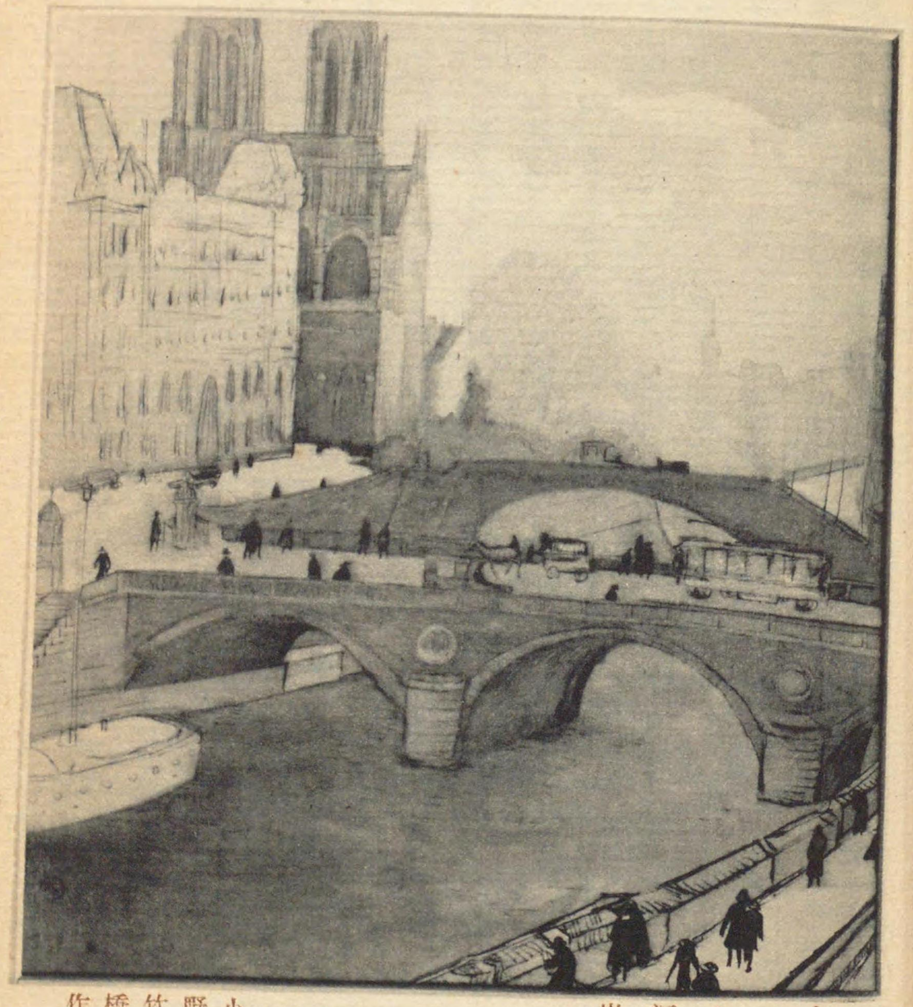
間、私は以前此藝術の都が、一度危機に迫つて、あはや獨軍の手に落ちやうこした時、綿々の憾みを抱きながら行李匆々こして立去つたここを思ひ出さずには居られなかつた、やがて聖ミツセル橋詰の廣場へ出て、其處が煌々こした瓦斯や電燈の光りこ、車馬人影に埋められてゐるのを見た時、思はず叫ばないでは居られなかつた。や、こんな巴里は始めてだと云ふこさうだらうね、君の居た時分は隨分暗かつたさうだからこT君が答へた。其處を通り過ぎて半町ばかりグランザオギユスタン河岸の卅七番地の前で車が止まつた。當分一行が起居する事にきめたホテルは其處だつたのである。

巴里客窓記

（一）河岸のホテル

私達が最初に行李を解いたのは、前にも書いたごとく、グラン　ザオギユスタン河岸のビツソンと云ふ旅館で、それは巴里を貫流するセーヌの左河沿ひの、恰度中程の處にあつて、上に聖ミツゼル、下にボン　ヌフの二つの橋を控へてゐる。河岸に面した何階目かの、小野君の部屋から瞰下すと、此地方の此頃の季節とて、何時晴るるとしも見えぬ銀灰色の鎖した中を、蕭條たる並樹の梢が連らなり、それを抽いて一際高く、ノオトルダムの塔影の、淡いシルウエツトが聳ゆ冷たい空の光を宿したセーヌに、幾つかの橋影倒に落ちてゐる。折々窓硝子をビリ〳〵顫はせて大きな貨物自動車が通りすぎる、これが夜更けても朝早くからでも、お構ひなしに續くので『おち〳〵眠る事も出來ない』と一行はこぼしてゐた。併しルーブルもリユクサンブルも手近にあるので、乘物の助けを借る世話もなく、便利なところから當分こゝに腰を落つける事となつた——尤も、私だけは月が變ると、現在のクリユニイ博物館裏へ引越したが、

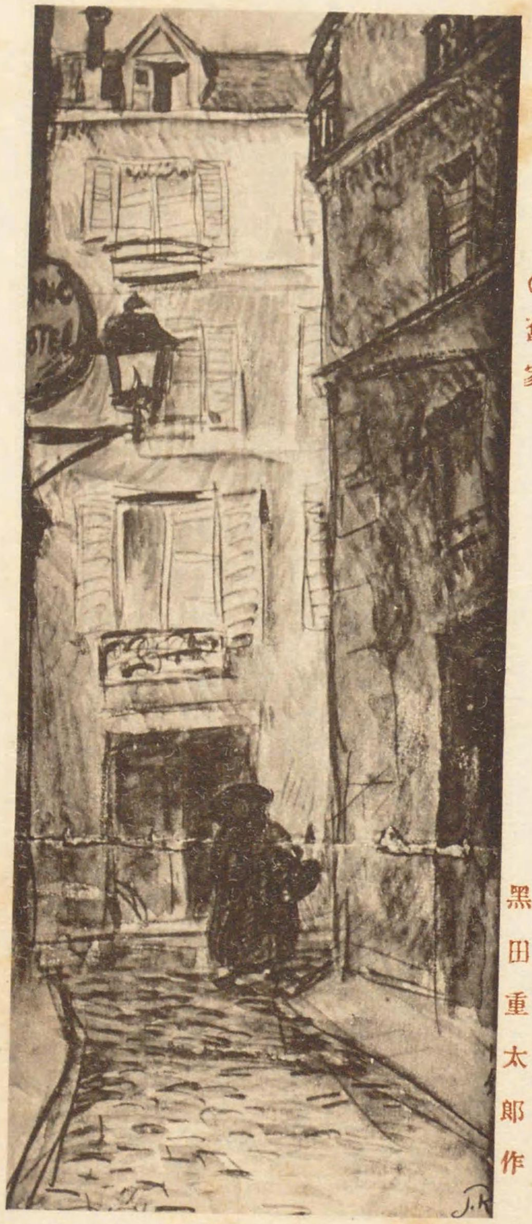
私達は此河岸を日に幾度となく往復した。食事に出かけたり、買物に廻つたり。美術館を訪れたりする度に、自然其處にある種々の物が私達に親しいものとなつた。違つた土地へ來て、第一に見出した境



セーヌ河岸　小野竹橋作

域は、永久に消えない印象を留めるであらう。河に沿つた胸壁の上には黒い函が幾つも並んでゐる。例の名物の古本屋で、汚い山高帽を冠つた水鼻汁を垂した爺さんや、穴のあいた毛絲の肩掛を纏つた婆さんなぞが、ユウゴオの所謂『十文撰取りの版畵の中で本物のワトオを見つけ出さうとする』好事家を、寒空の下で戰へ乍ら待つてゐる。折々稀覯書目に入つてゐる樣な、それ〴〵の專門に向つて貴重な記錄すべきものも見つかるが、大抵は讀み古しの手垢のついた小說本が並んでゐる、それに値段も餘り安くない。同じものなら街の古本屋へ行く方がずつと安い。私は前に來たときもこゝを歩くのを樂みにしてゐた。それは勿論掘出しものをするのも一つの目的だつたが、唯だ何と云ふ事なしに、いろ〳〵な畵家の筆に入つたこの河岸の景色を見ながら歩くのが好きだつた。この黒い函は何時も全部開いてゐるとは限らない。天候の加減や、日曜と平日の人出の多寡に應じて、開かれる數も違ふのである。

河岸の片側には矢張り古本屋や、古道具屋が軒を並べてゐる。その中には稀覯書だけを賣つてゐる家も數軒ある。何か絕版物を手に入れたいと思ふ時は私はきつと其處を尋ねる。古道具屋はサントノレ街に比べて、大分格の落ちた家も多いが、時ともすると古畵の本物に出會す事がある。汚いカルトンをあけて丹念に撰り出すと、隅に大家のスケツチ位手に入る事も出來る。



ドミエーの舊家

黒田重太郎作

（二）ドミエーの舊家

聖ミツセルの橋詰からオテル　ビツソンの前まで、ものの一町に足りない間に辻が二つある。孰れも河岸と直角になつて、すぐ行當りになる甚だ短いそして狹い通りである。その橋に近い方をジルクール街と云ふ。河岸から入つて左へ曲つた處に、またもう一層狹い袋路がある。リロンデール街と云ふのがそれで、十九世紀の偉大な畫家オノレ　ドミエーが少年時代を過したのは此處であつた。

つい昨今の事である。巴里の地圖を按じてゐたとき、私はふとそれに氣がついて、直さまレイモン　エスコリエーの著書を開けて見た。すると『リユー　ド　リロンデール二十四番地』と出てゐた——知らない事とは云ひ乍ら、巴里へ着くなり腰を下したところが、此大家の矢張り此土地へ來た最初に住まつた所と眼と眉の間にあるを氣づかずに過ぎるところだつた。少し物好きの樣だが平素敬愛してゐる心持に對しても尋ねずむばある可からずと、番地を便りに行つて見た。それは全く昔の巴里の俤を存じた古びた不規則な家並の間に割込んで、大きな倉庫の裏手に當る、八百屋、荒物屋、洗濯屋、怪しげな女の出入りしさうな安宿や、汚い酒場が額をつけ合はしてゐる裏町の一つであつた。凸凹になつた街路の舖石は何時もじめ〳〵と濡れてゐて、縱令夏の明るい空の下にしろ日の目を拜むだ事がないらしい。あの羅甸區の勤勞とも云ひたいブールヴアル　サン　ミツセルと背中合せになつて斯んな所があらうとは、

通りがかりの旅行者には想像もつくまい。

ドミエーの舊家は其袋路へ入らうとする左手の角にある。鼠とも茶ともつかにない煤けた壁の、四階建の家である。どこがさうだらうと壞れた窓の鎧扉を見上げたが、勿論掲示してあるわけでもないので、知れさうな筈はなかつた。界隈を聞いたところで百年餘りも前の事だもの、知つてゐる人もなささうに思へた。

故郷のマルセーユを離れて、彼が此家に來たのは一八一四年末、漸く七歳の頃であつた。其父ジャンバプチスーも此畵家にふさはしく狂激な夢想家の一人で、玻璃職工で、そしてまた天稟の詩人であつた幸か不幸か其作『春の朝』の一詩が馬耳塞學士院の推賞する所となつたのがもとで、彼は滿々たる希望を懷き乍ら其生業と鄕里を拋つて巴里へ來た。併し『時はミューズに幸しなかつた。聯合軍は血痕斑々たる巴里をやつと離れた所であつた』。此優れた詩人の韻律に耳を傾ける者もなかつた。一家は漸次慘澹たる境涯に落ちて行つた。幼いオノンは自ら口を糊するために執達吏の雇員となり、書店の小僧となつたが彼はその孰れの役目をも滿足に果し得なかつた。夙に眼覺めてゐた繪畵に對する稟性が、彼をして空しく塵俗の裡に沒せしむる事を許さなかつたのである。父は其子の切なる希望を察してゐた。併しながら既にミューズに對する奉仕の苦い經驗を嘗め盡してゐたので、進んで其子を勵ます迄には至らなかつた。屢オノレが其雇用者の許から姿を消すのを知ると、急に思ひ當つてルーブルへ走つた。そして其

習作　土田麥僊作

處にリユーベンスやレムブラントの前で恍惚としてゐる襤褸服の少年を見出して引つ立てゝ歸つた。幾度かの嘆願と拒折の後、オノレは漸く許されてアレキサンドル　ルノアの教を受ける事になつた。併し彼は其處でも從順な弟子ではなかつた。石膏細工の鼻や耳を何遍となく模寫させられるのが嫌さに、それからそれと街頭をさ迷ひあるいて、其れ等の商店や、見世物や、通行人の樣子に魂を奪はれて居た。後年熾烈な人道主義の畫家として、常に貧しき者惱める者の友となり、鋭い筆致に凡ゆる人間の弱點を突き乍ら、其裡に博大な愛を湛へた大藝術家の素地は斯くして養はれたのである。此家、此周圍そ、れは飽くまで生の苦惱の叫びである、此畫家の藝術の搖籃としてふさはしいものと云はねばならない……こんな事を考へ乍ら。せめて記念にもと寫生帖を出し見取圖を取つてゐると、凄い目つきをした車力や、長い麵麭を小脇にしたよぼ〳〵の婆さんや、學校通ひの鼻涕し共が、珍らしさうに私の方なぢろ〳〵見返り乍らすぎた。ドミエーの畫其のまゝである。表通を通る電車の音が、ごうと籠つて響いて來る。まるで地の底にでもゐる樣だ。スケツチが出來るとそれをポケツトにしまひ込み乍ら、一つ巴里の美術家に關する史蹟でも調べてやらうかなと思つた。ごうせ忙しい身體でゐて、それは唯だ思つただけに過ぎまい。

（三）ドミエーの展覽會其他

ドミエーと云へば、此稿に執筆してゐる現在——十二月廿一日から一月七日迄——フオブル　サント

ノレ街のバルバザンジュと云ふ畵店で、此の大家の素描を四十枚ばかり集めて展觀してゐる。其等は一すした略寫や、版畵の下畵に過ぎないけれど、普通知られてゐる此人の石版畵や油畵の二方面を通じて、其れ等の根抵を窺知する上に有益な催しである。半分消えかゝつて居乍ら、それでもなほゆら〳〵と焰の搖らぐやうに、自由な勢ひを有つてゐる木炭の線、ぐい〳〵と抉る樣に強く押しつけた洋筆の跡、針のやうに鋭い線を細かに組合せて、隨所に淡い、または濃い、美しい鼠色を作つて行く鉛筆のモドレ、太いタアシュで一息に抹りつけたやうな水繪具の色、其處から大きな口を開いて論難辯證に努めてゐる公證人や、裏店の隅で出澁る乳房を餓えた小兒に含ませてゐる痩せた母親や、傲然として身を反らしてゐる裁判官や、横倒しに取つ組合つて力の限り爭つてゐる旅人と盜賊の姿が、くつきりと丸彫にしたやうな強さと、生々しさで見る者の胸に迫つて來る。ごんな粗い描法にも生其者の機微を逃がしてゐないと同時に、ごんな細緻な表現にも餘贅がない。これが此大家の藝術の本質である。兎に角いゝものを見たと思つた。概して何時もよりは淋しいと云はれてゐる此美術季に此展覽なぞは特筆すべきものであらう。

私達が巴里へ入る少し前からロワイヤル街のドリユでオディロン　ルドンの水彩や素描の展覽會があつた。恰度巴里へ着いた其日に終つたので見る事が出來ず、非常に殘念に思つてゐたが、ドニの展覽會を見に行つた序に、其時のものがまだ殘つてゐないかと聞くと、あるとの事で、その賣れ殘つた幾十點かを手に取つて見ることが出來たのは幸福だつた。それとなほ其時に出なかつた幾點かの油畵を見ること

雨の廣場

小野竹橋作

も出來た。それから何日か經つて、友人の買物を手傳つたところからつい知り合ひになつた、ボエシ街の一書商の案内で、ルドンのものを多く集めたP氏の蒐集を見る事が出來たのも此上ない悦びであつた。私達は其處でも重要な作品の幾つかを見た。前に來た時から、此近代畫壇に獨自な地位を有つてゐる大家に對して、私の感激はより大きなものであつただけ、今度見たそれ等の作品に就ても、反つて多くを語り得ない程動搖されて了つてゐる。此人の描いた花の一つ、蝶の一羽は束の間に燃て、束の間に消えて行く脆い美しさと生命を限りもなく優しく、深い感情に依つて寫し出されてゐる。春闌な野面を、通り雲の影が掠めて行くやうに、無知な純潔な魂の上に投げられた、或る暗い翳に驚いて眼をみはりながら、空しく遠い所を見つめてゐるやうな少女の瞳、それは實在其者であると共に、實在以上の或世界のひらめきであるのだ。『見ゐざる世界』と云ふものは、果してあり得ないものだらうか……』。其石版畫の一つに記された此人の言葉は、其まゝ取つて其藝術と其思想の總てを蔽ひ得る者と云はねばならない。

（四）現代作家の個人展覽會

現代の作家の個人展覽會中注目す可きものは十一月末旬から今月はじめへかけて催されたモオリス・ドニとジユール・フランドランの展覽會に指を屈しねばなるまい。どちらも同じドリユエの店で同じ期間に催された。前者のは油畫後者のは水彩、色鉛筆、素描なぞを集めてあつた。ドニに就ては既に先年

發行された拙著『ゼザンヌ以後』の中に述べた如く、彼は『藝術の傳統と民衆進化の關係に明るい一個の智者であり、一個の才能である』と云ふ言葉を更める必要はないと思ふ。靈感の源泉を『フイゾオルやフロランスの様な藝術の搖籃』に求め其形式を近代繪畫の燦然たる光と色』から繼承してゐることも今に於て變りがない、此折衷主義は『型』と云ふ桎梏を彼に置いて、まる三年經つた今見直しても新な展開は望まれないが、併し漸く人材の沒し去らうとする現代畫壇に在つて、搖ぎのない格致と端麗さとで、或規範を示してゐる事は爭はれない。フランドランのものは多く匆卒の間に成つたやうな、旅中または閑餘の小品に過ぎないけれど、その大きな摑み方と、澁滯のない、流暢な表現とは此作家の或一面を窺知せしむるものがある。私は今年春兒島虎次郎氏が將來された倉敷大原氏の蒐集にある大作『聖母讃頌』を見て以來、其清新なる色彩と、大きな所のある表現に、或期待を此作家の將來に有つてゐる。但し今年のサロン　ドオトンヌで見たものには感心しない。

同じ頃、マドレイヌ廣場のベルネイムの店でヴラマンクの展覽會があつた。此人は一八七六年の生れだと云ふから現在四十餘歳、此處の畫壇では働き盛りの年輩である。彼が畫に志た時分にはそろ〳〵セザンヌやゴオギヤン、ヴン　ゴオグなぞの名が持て囃されて來たのであるから、炯眼な彼が其れ等の大家から何かを汲み出さなかつたとは何うしても思へない。現在彼は『私はミュゼーなんぞへ行きもしない』とか云つてゐるが、併し其作品がセ

ボンヌフ

黒田重太郎作

ザンヌの感化の或痕跡を存してゐるのは明かであらう。寧ろ此大家の感化から出發して、其『未完成な』形式を、彼獨特の『單純化』にまで推し進めやうとする努力が認められる。勿論私はセザニズムが彼の全部とは云はない。その大きな均衡を捕へやうとして縦横に走る彫大な筆致や、墨を多分に使つて稍暗澁を呈してゐる色彩やは矢張り彼獨特のものだと恩はせられる。が此獨特さは時として見る者を反撥し去る事がある。それが最も有効に働いた時、始めて其處に一種個性ある自然が展開されるのである。

續いて同じ店で彫刻家クラレの展覽會があつた。それに先立つて此店を尋ねた時、私達はそれ等の小塑像を示されて一寸面白いと思つたが、更めて見返すとまだ大分技巧に冴わが足りないのを見出した。彼の作品は可成顯著なマイヨオルの感化を止めてゐる。時には其墨を摩して居るやうなものを見ないでもないけれど、私にはまだ洗練が足りてゐないやうに思はれる。それが終るとヴァン ドンギャンのヴエニスのセリイが展觀された。此人は日本でも可成り知られてゐる人だし、事實現代畫壇の新らしい潮流に寄與する所の多かつた人であるが、忌憚なく云ふと、今度の展覽會には全然失望させられた。筆致に暢達はあり、技巧に洗練はある。併し『馴れ』に任せてやつて除けられた其れ等の作品の裡に、何が含まれてゐるだらう。仔細に檢べて見るとそれは全く稀薄と云ふより外にない。前に來た時も此人のものを見て、それ迄有つてゐた期待が大きかつたゞけ、それを裏切られる事も大きかつたが、でも流石に其卓れた素質を窺はせられる作品を二つや三つは見る事が出來た。今度のに到つてはそれさへも見出し得なかつた

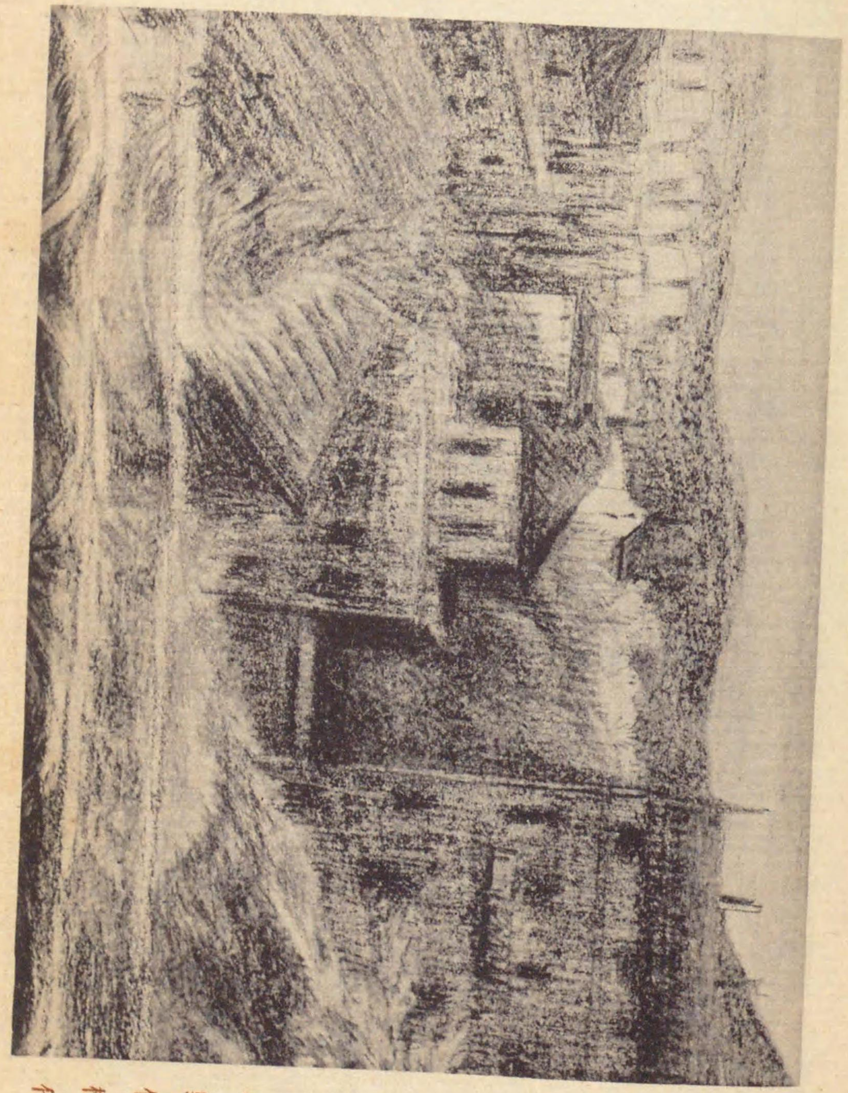
（五）秋のサロン

サロン　ドオトンヌも見た今年は參考品として此處にもドミエーの版畫と、カイユボットの油畫が各數十點並べられてある。ドミエーの事は前にも書いたから省くとしてカイユボットのものは、これ迄印象派の二流作家位にしか思つてゐなかつた私にも、流石に斯うして集められて見ると或る敬意を拂ふ事が出來たのみならず、或る秀れた素質をも見出し得たのである。題は忘れたが大きな鳥を描いた靜物の一點を見ても、たゞそれがマネの作品であるとした所で、可成り程度の高いものゝ思はれた。此人にはピサロの敦厚も、セザンヌの直截もルノアールの豐麗も求められない。併し素直な、溫雅な畫風はそれ等大家の間に介在を主張し得るゞ思ふ。

今年の出品は去年に比べて一體にいゝ方だゞ云ふ話だが、去年のを見てゐない私にはそれが本當かどうかよく判斷がつけられない。三千近い作品を一々名前をあげるだけでも大變だから、一寸頭に殘つた點だけ擧げて見ると、可成りいゝ成績を示してゐたのはオトン　フリエッである。『野獸畫家』と云はれた一人で可成氣儘に振舞つた描き樣であり、時々統一を失した所もあるがまた其爲に生々潑溂たる印象が其儘に再現されてゐる所もある『ル　アーブル』『大きな汽船』、『エトルタ』なぞは佳作だゞ思つた。色彩は墨ゞ青との勝つた、ごちらかゞ云へば愉快なものでない。が、一種の深味を有つてゐる。思つたよ

り感心しなかつたのはシャール　グランの『黄な肩掛の女』である。私は幾つか此人の作品を見て、可成敬服してゐたのであるが、一所に見に行つた連中が此れ一つで此人を悪く云ふのが氣になつてならなかつた。此處數年來大分評判のいゝのはアンク　オットマンである。綺麗さより外云ひやうない位の色彩であるが、私にはそれが熟熟を缺いてゐるやうに思へて、深く感心する氣にはなれない。が、此人もよく冴えた技巧を有つてゐるので、稍淺薄だとは思ひ乍ら、つい引入れられる所はある。アルベール　マルクエのものも此人のものとしては大したものでない。マルヴル夫人の作も私は大抵はすきでないが、今度の『メリサンドの庭』には多少好意を有てた。竪に長い畫面へ、白いきものを着た少女の立像をあらはしたものである。その夢見るやうな顏、淡い肉色に映じて、鮮かな緑の背景がフレッシュな感じを見たあとまで殘させる。マイヨオルの彫刻の可成大きなものがあるのを、最初行つた時見落したので、次に行つた時、一々目錄と引合せて虱殺しに調べて見た。果してあるにはあつたが、私にはどうも此人に似合はない出來のわるいものだと思へた。石彫の『浴する少女』の殆ど等身に近いものである。首より下には流石に此人のものだと思はせる卓れた所も見出されたが、第一顏から頸へかけて實に固い感じがする。その周圍をまはつて眺めて見ても一つもいゝ線が出て來てない。全體のボオズも少し延べつけたやうだつた。

巴里へ來てから一月餘りは夢の樣に過ぎた。其間私達は尙いくつかの展覽會や、畫商や蒐集家達の收藏品や、ルーブルを始め幾つかのミュゼーを見て廻つて、上は埃及希臘から、下はマチス、ピカソ等の生躍々たる現在の畫壇にまで、一瞥を投げる事が出來た。日毎に新な感動は私をして屢次過度の疲勞と不眠にまで導き、或種の焦燥をも齎したのである。私は以上の外なほ語る可き多くを有つてゐるけれど今の所これ以上に筆を續ける事は出來ない。漲り寄せる潮流の唯中に身を置いて、それを靜かに眺める事はむつかしい。私達は間もなく伊太利へ立たうとする。いま灰色の空の下に、眞裸で戰へてゐるクリユニイの庭の木立を、窓越しにながめ乍ら、遙に南歐の碧玉の空を思ひ、黄金色した日ざしを想ふと、魂飛ぶに堪へない。殆ど寧日のない昨今暫く消息を絶つてゐた故國の親しい讀者達に、遙にアミチエを送つて、私は一先づ此客窓記の筆を擱きたいと思ふ。（一九二一年十二月二十五日降誕祭の日）



窓外のニイス　小野竹橋作

カイニュ訪問記

（一）

美の不死鳥が其灰から起き上るさ、詩人の謳つた伊太利へ行つてRenaissanceの土其の者を實際に踏んで來たいさ云ふことは今度同行した諸君が遠うから懷抱してゐた心願であつた。私とても其心願に變りはない。前に來たさき偶々墺伊の戰況日に非なるものがあつて、空しく旅行の計畫を挫折された憾みを有つてゐただけ、或は異なる處があつたかも知れない。で、巴里へ着いて、見るだけのものを見て了つたら、直にも立たうでないかと、皆顔を合せる度に云ひあつてゐた。さころがさてさ云ふ段になるさ物は思ふやうに運ばぬもので、いろんな都合を見合せてゐる中に五日延び、一週間延び、最初きめた十二月半が末になつて、さう〳〵年を越わた一月九日の夜八時半漸く南行きの急行列車に身を託することが出來た。

同行三人、土田小野兩君さ私である。此行に野長瀬君を缺いたのは實に殘念だつた。既に手續も濟み愈々明日立たうさ云ふ日の朝、數週間以來感冒の氣味であつた同君がとう〳〵床に就いてしまつた。困つたなあ、一層延期しやうぢやないかさ三人で相談して、さて其事を同君に通じるさ、皆豫定があるのだから便々さ侍つて居て貰ふのは氣の毒だ、ざうしても立つてくれ、癒ればあとから追つかけるからさも立つてくれ、

云ふ。冗談ぢやない。そんな事が出來るもんかと云つたが聞かない。兎に角翌る日醫者に見て貰つた上の事にして其夜はそれで濟んだ。あくる日になると思つたより樣子がいゝ。それぢやと云ふ事になつて立つ用意を始めたのは其日の晝頃だつた。兩替をしたり、買物に走つたりする中に早くもその日の夕方になる。いつも親しくしてゐる人達に同君の事を吳々も賴んだ上、タキシを雇つてガールドリヨンへ駈けつけた。

避寒旅行で車内は一杯である、人蒸れとスチームの溫かさで咽喉が乾いてたまらなかつた。午前二時頃ディジョンへ着くともう堪へ切れなくなつて構内の食堂へ駈け込み、鑛泉水二壜を抱へて戻ると、三人して貪るやうに飮むだ。寢たり醒めたりする中に里昂もアヴニヨンも過ぎた。夜があけて陽があかあかと照り出すと汽車は橄欖と葡萄の赤土の野を眞驀に走るのであつた。馬耳塞から先は地中海の岸に沿つて行く。二三の隧道を過ぎ、里昂の灣頭數箇の小島嶼を指顧の間に迎へれば、其處はモネ等近代佛國畫派の筆に屢々入つた明媚な風光が展開される。サン　ラフアエル、カンス、アンチーヴなどを過ぎて午後四時幾分と云ふにニースへ着く。其夜はオテル　オツコンノールで泊る事とした。

ニースは歐洲中氣候最も快適で、冬季旅客の蝟集する事多しとばかり、案内記の文句を口うつしにする外、私は語る可き多くを有しない。私達が伊多利行の途次態々遠廻りをして、こんな所へ泊つたのも唯だルノアールの家が見たいばかりで、外に意味があつたのでない。で、折角來た序に賭博場を見やう

ルノアールの居を訪ふ道　　小野竹橋作

ニ云ふ氣もせず、大方まる一日打つ通しの汽車の旅に疲れて、其夜は食事をすますなり枕に就いたのであつた。

（二）

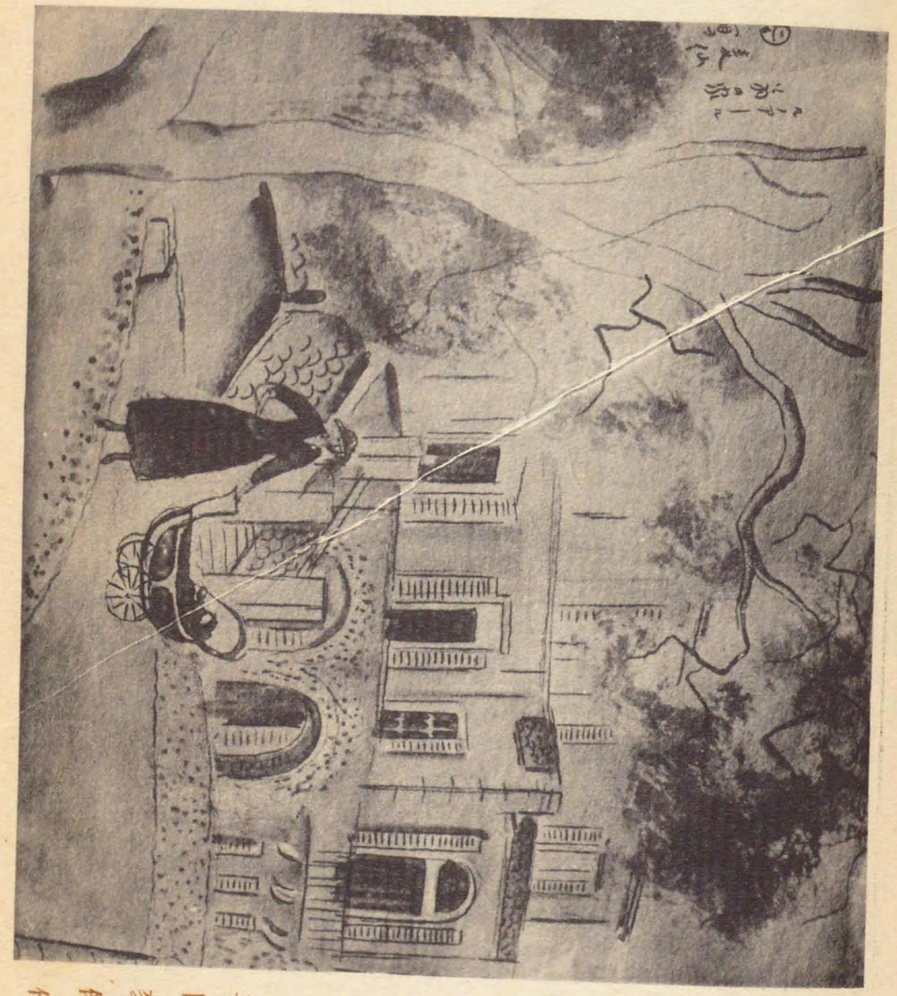
翌れば一月十一日、前々夜からの疲れで、貧る様な睡眠に落ちた私達は、でも朝の八時になるニ云ひ合したやうにして床を離れた。九時半ホテルを出てリユード フランスの停留場まで行つた。僅かの違でカイニユ行は出てしまつた。田舎の電車の事だから後のは急にやつて來ない。此分で行つて、若し書過ぎて向ふへ着くやうな事があると大變先方に迷惑させるがニ私は獨り心の中でやきもきしてゐた。ニ云ふのは、いくら殊勝な志を有つてゐるにしろ、何の紹介もなしに突然訪ねて行くのは餘り失禮だニ思つて、伊太利へ立つ二週間程前から、私は今度巴里へ來て此方、始終厄介になつてゐる。批評家デユレ氏を煩はして、豫め私達が行くことを通じて置いたのである。續いてルノアールの令息クロオド氏へ私が出した手紙にも十一日午前中に訪問しますと書いて置いた。そればかりでなかつた。巴里のデユランエルの番頭さんに聞くニ、今度クロオド氏は結婚するので隨分取込み中だらうニの事である。その最中に訪ねるさへ可成り氣がひけるのに、半日も待呆けをさせて重ねく申譯がないニ思つたからである。

道傍に立往生する事約三十分餘。十時過ぎてやつニ電車が來た。やれ待つてゐたニばかり乘り込むニ直ぐ動き出した。ガタ〳〵ニ餘り穩かでない音をさせ乍ら、町を通り拔けて、小綺麗な別莊建の續く間か

ら、一方には折々海が見え、一方は山手になつて、菜園や果樹園の間を、一帯に灰銀を帯びた緑の橄欖樹で點綴されてゐる。金色の日ざしが濃青に晴れた空から、温かに落ちてゐた。ユミードな空氣に鎖された巴里に居ては、辿も想像がつかない程の美しさである。曲り辷つて、上り下りの一寸はげしい道を揺られ乍ら、最後の坂路の角をまがつて下りると、一望俄に開けて、樹立の間から白つぽい黄な壁と赤瓦を連らねた村家が、上に小さな城跡を戴いた丘陵を層々として圍んでゐる。カイニユだ。

電車を降りて時計を見ると十一時前、直様其處に居合はせた馬車屋を呼んで、『ヴラ　コレツト　リユー　オウギユスト　ルノアール』と命じる。心得て一鞭あてると。馬はギヤロツプを踏んで、プラターヌの並樹路を滅多無性に走り出す。近頃大分訪ねて行く人があると見えて、御者も呑み込んだものである。これを四年前エックスにセザンヌ隠棲の跡を訪ねあぐんだ時に比べると、孰れ優り劣りのない大家であり乍ら、時と處に依つて斯うも違ふものかと、私はまた感慨無量なものがあつた。道は次第に爪尖上りになる。橄欖樹の大きなのが一面に繁つてゐる間を抜けて、白い石門に『ヴラ　コレツト』とあるのを通り、十坪あまりの果樹圍の中央に、巴里のカマンド伯の庭で見たのと同じ裸婦の像が立つてゐる。庭に入ると瀟洒な、然もごつしりと重みを失はない家が、左右に石階を繞らし、前に露臺を控へて温かな日を浴びて立つてゐた。

馬車は其石階の脇を廻つて、戸口の前で止まつた。



ルノアールの家　土田麥僊作

（三）

馬車から降りる私達を見て、其邊に遊んでゐた子供が物珍らしさうに寄つて來た。同時に戸口が開いて女中らしい若い婦人が私を出迎へた。來意を告げて、取次を賴む迄もなく、續いて出て來られたのは、脊の高い上品な容貌をした、まだ二十代と見られる若い紳士であつた。『ようこそ』と初對面に似合はず氣輕さうな挨拶である。さてはクロイド氏かと思つて、『お邪魔に上りました。先達てお手紙をさし上げました』がと云ふと『おゝ、あれは弟が拜見しました。生憎所用で外出しましたが、決して御配慮には及びません、ざうかお入り下さい。私はジヤン　ルノアールです』さては此人が大家の二男に當る人かと思つた。

直樣應接室へ通される。閾を跨ぐなり、其處にフレミツサントな色彩と、ビユールな愉悅の、較ぶるものもない煌かしい世界が待ち受けてゐた、露臺に面した一方を除いて部屋の三方の壁と云ふ壁を、殘る隅なく理めたのは宛ら燃え熾る火に一摑みの眞珠を投入れたばかり、朱と茜で統べられた色調の中に、輝く銀の肌を横へた裸女の姿や、なよやかな白綠の莖の上へ濃い紫紺と赤の花瓣をひろげるアネモネや黑い緣を取つた朱の着物に黃な帽子を冠つた無垢な表情をした女の顏や、滴るばかりの靑い空の下に灰綠の葉を髮の樣にゆるがせてゐる橄欖樹の景色であつた。ヴラスケスの『バルタザール』に新しい魂を吹き込んだやうな、銃を持つて立つてゐる少年クロオドの等身大の像も焰燼の上に懸つてゐた。美の不死

鳥は伊太利に許り居なかつた――『いゝなあ！』と、まるで子供のやうに、いゝ畫を見る度にきつと此言葉を連發する麥僊君や、『いゝとも』とそれに裏書するやうに答へる竹橋君に感心する方は任せて置いて應接室から畫室、畫室から其他の部屋と家中案内される間、私は折々ジャン氏と故大家に對する感想を述べ合つたり、それに關して、次々に出て來る話の應酬に努めねばならなかつた。

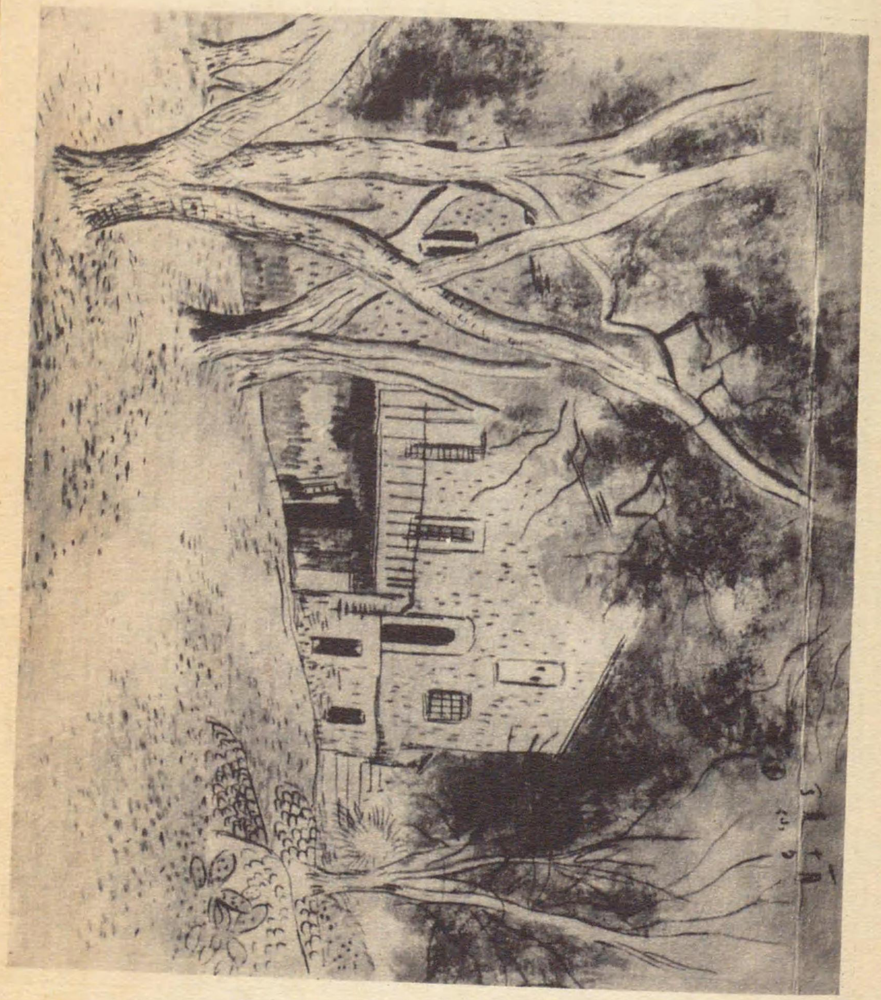
畫室の壁も一面に畫で蔽はれてゐた、それぱかりでなかつた。片隅にある、何段かに仕切てある棚にも縦に並べて、ぎつしりトワールが詰つてゐた。机の上にも山の樣に積んであつた。こゝにあるこれだけの畫と、佛蘭西をはじめ各國の各地方にある美術館と、畫商と、個人の蒐集に收藏されてゐる畫の數を算へれば、殆ど信じ得られぬ程の數に上るに違ひない。古來多作を以て聞こえた人にリューバンスがある。史家の記述に依つて、私の推測する所に誤りがなくば、それは無慮三千近い數に上るであらう。然も其饒多な作品の過半は、其れ等多くの弟子とのコラボラシオンに成つた事を思はねばならない。全然一人の手に依つて斯る多數の作品が生み出され、而も其多くが秀拔なカリテエを示し得て居るに至つては正に史上稀有の事に屬する。

（四）

其澤山の作品の中から、私達は偶然コロオの摸寫を見出した。グレフエの本にも出てゐた畫で、懐かしく思ひ乍ら見てゐると、ジャン氏は私達が、全くコロオの樣だ、いやコロオの精神をよく摑んである

とか云つてゐるのを聞きつけて、『それは父が摸寫したのです。彼はコロォに深い尊敬を有つてゐました。で、時々摸寫も試みたのです……が、矢張ぎこか違つたところがあるでせう』と云つて、別の棚からコロオの小品を出して見せられた。それは竪位置の、道の傍に樹が一本立つてゐて向ふに農家の見える、澁い色彩の、荒い筆觸に成つたものであつた。廊下にセザンヌの畵が二枚ばかり懸けてあつた、左關の脇にボナールや其他の現代作家のものもあつた。前者に此二大家のアンチイムな關係が窺はれ、後者により若いそれ等作家のルノアールに對する尊敬が示されてゐる。最後に導かれた部屋の煖爐の上にマイヨオルの小塑像が置かれてゐた。『メエトルはマイヨオルを好んで居られた樣に聞きましたが……』と私が云ふと、ジャン氏は Oui, assez, mais……(えゝ可成り、ですが……)と云つて一寸言葉を切り、『父が本當に彫刻家として好んでゐたのは寧ろ晩年のドガの作品でした』私ははつと思つた。ジャン氏の語る簡單な言葉を介して閃くやうに偉大な魂と魂の結びつきを想見し得たからである。

『畵界のリア王』と或る評家の云つた如く、其物質的に富裕だつた境遇に拘らず、畵家として畵筆を執る事の出來なかつたドガの晩年は全く失意と焦燥の裡に過ごされたのであつた。ルノアールが親しく梅原君に語つた所として『少し目が惡くて、ドガは彫刻をしてゐるさうだが、氣に入らないと云つて悉く壞して了ふさうだ。何と云ふ惜しい事だ。きつと美しいものだらうが』と云ふ言葉が私達に遺されてゐる。して見ると、ルノアールは其後ドガの彫刻を見る機會を有つたに違ひない、そして其不幸な友人の美



ルノアールの家庭

土田參德作

しい作品を見て深い感動に打たれたのであらう――こんな事を考へてゐるこ『君はドガの彫刻を御覽になりましたか』こジャン氏が聞いた。『いゝえ、私達が佛蘭西へ着く少し前に其展覽會が有つたこ云ふ事を聞きましたが、見られないで殘念な事をしたこ思つてゐます』こ云ふこ『其時の作品の或者を政府が買ひ上げてルーヴルへ入れる事になりました』こ云はれた。『それは大變喜ばしい事です』こ云ふこ『私もさう思ひます。父が生てゐたらさぞ喜んだ事でせう、』

そつこ時計を出して見るこ午近くなりかけてゐた。まだ〳〵畫も見てゐたし、もつこ話も聞きたかつたが、定めし取り込み最中を御迷惑だこ思つて、名殘惜しさうにしてゐる兩君を促して辭去する事にした、せめて何かの思ひ出にもこ、門口まで送つて出られたジャン氏に庭の一部を寫生帖に收めて歸りたいこ頼むこ『さあ〳〵お構ひなく、よろしければ午後でも』こ云はれた。

庭の檜欅の老木を透して、向ふの小高い丘を描いてゐるこ、待たせて置いた馭者がやつて來て『暇が要るなら私は歸つてもう一度來ます。飯時だから』こせき立てる。それも尤もこ急に筆を收めて『何處でもいゝからレストランへ連れて行けこ命て再び車に乘つた、小石の多い坂道をガタ〳〵こ搖られて下り乍らふり返つて見るこ、ほか〳〵日の射してゐた南向きの露臺は、其時檜欅の樹陰に隱れ、何處やら暢氣さうな鷄の聲が聞えた。

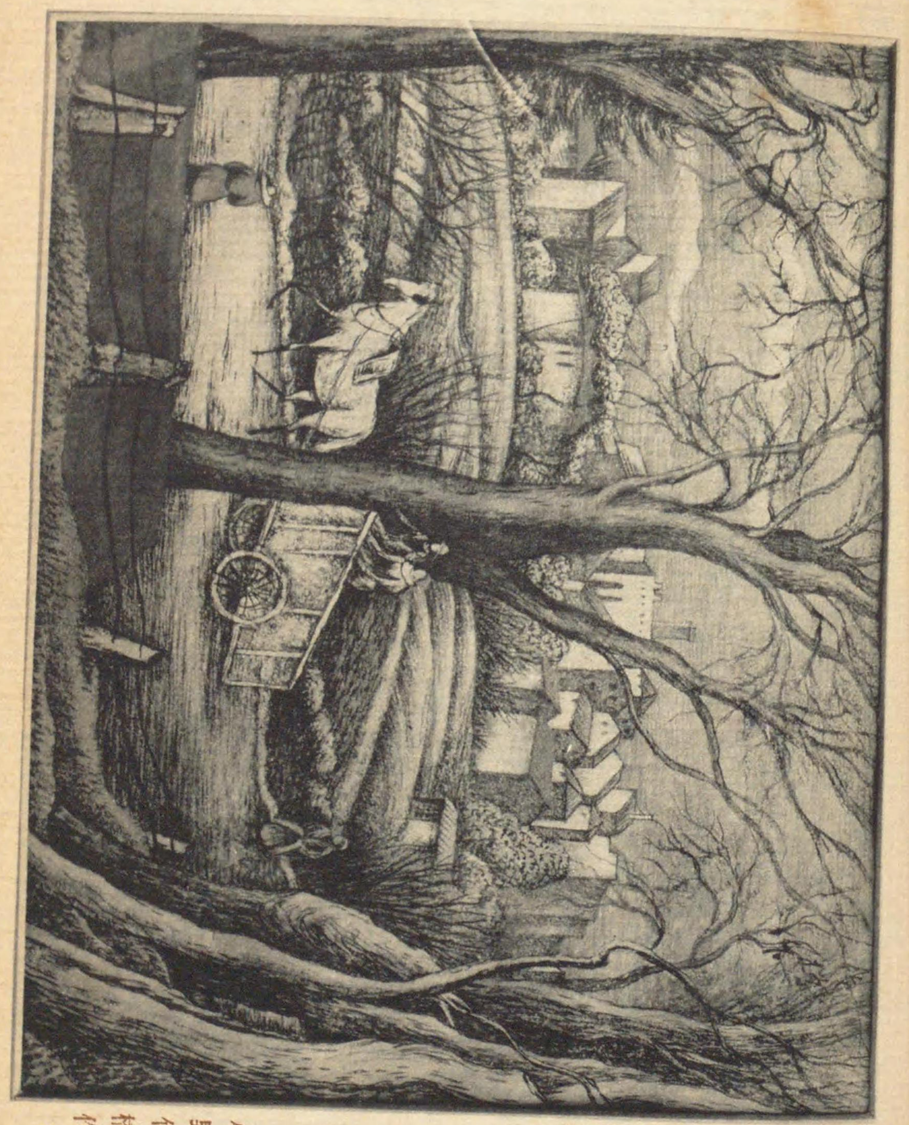
ゼノアとピザ

——伊太利遊記第一篇——

（一）

二夜をニースに送つて、その翌る日の朝早く私達は再び車上の人となつて、佛伊の國境に向つてゐた。嶮々として空に迫る中部アルプスの峰巒が南に走つて俄に地中海の藍碧に侵される、其迂曲に沿つて行くこと此ゝて、ニースを出るなりシミエの隧道を通り、それに續いて數へ切れぬ程の隧道を入つては出る度に、車窓を掠めて飛び過ぎる煤煙の隙から、時として翠巒、時として巉岸、其裾に繞らされた白亜黄土の家と共に、瀲灩たる水光に映じるのが見えた、賭博場で有名なモナコや、モンテカルも先を急ぐ旅こゝて下りて見る氣もせず、行き行く程に十時過ぎヴンチミルへ着いた。こゝから先は中央大陸の時間とあつて、時計を五十五分進ませる。で、十一時何分である。

汽車を降りて、佛伊兩方の稅關を無事通過し、荷物の世話を賴んだ赤帽に聞いて見ると、正午に出る汽車は途中二度乘換へでピザへ着くのが明日の午前四時だと云ふ、そんなに乘換へしないで行くのはないかと云ふと、午後二時過ぎに出るのがゼノアで一度乘換して、これも矢張り翌る朝の四時に着くと云ふ二つとも同じ時刻に着くのはちと可笑しい、ニースのホテルで聞いて來たのと違ふと何度聞き返して



カイニユの並樹道

小野竹橋作

も同じことである、え、面倒臭い十二時のに乘つちまへと、氣の短い土田君が云ふのに任せて、サンド井ツチなどを買ひ込んで乘り込むと間もなく發車、汽車は相變らず山と海とのけぢめを縫つて走りながらモネの畵で名高くなつたボルデグラを過ぎ、サンレモ、アラッシオと數へて四時前サヴォナへ着いた。こゝで乘り換へ、次の發車までに二時間もあるので、構内の食堂へ入つてまつ黒になつた顔や手を洗つたり。少し早いが夕食をしたゝめたりした。こゝで始めて伊太利の時間表を買つて調べて見ると、推察に違はず私達の乘つて來たのはサヴォナ泊りで、次のがゼノアまで行くのであつた兩方共同じ時刻にピザへ着くのはあたり前である、何だそれならさう云つてくれ、ばこんな所で乘つたり降りたりの面倒を見ずとも、今夜ゼノアまでは眞直に行けるのにと呟いたが、何とかの智慧は後からで間にあはない。待ちあぐねた時分に次のが來たので乘る。中は一ぱいの人ごみである。廊下に鞄を下ろしてやつと腰をかける。六時發車、日が落ちて月が出た。鱗々として光る海の面に透して黝黒な巖の形が見られた。削り立てた樣な崖の裾に白い浪がしらが當つては碎ける。また幾つかのトンネルを過ぎて七時過ぎゼノアへ着いた。

迚も明日の朝方まで乘つてゐては身體がたまらぬのでこゝで泊る事にし、お宿はと赤帽に聞かれて、こゝは豫定に入れてなかつたので突差の場合、オテル　ミラノと、答へる心得て大きな鞄を三つもかついでさして重たさうな顏もせず、停車場の廣場を突つ切り、夜目にもそれと著きコロンボスの記念像を左手

オリーヴの老樹

土田麥僊作

に見て、ヴィア　バルビを物の半町も行つた處まで連れて行つてくれた。

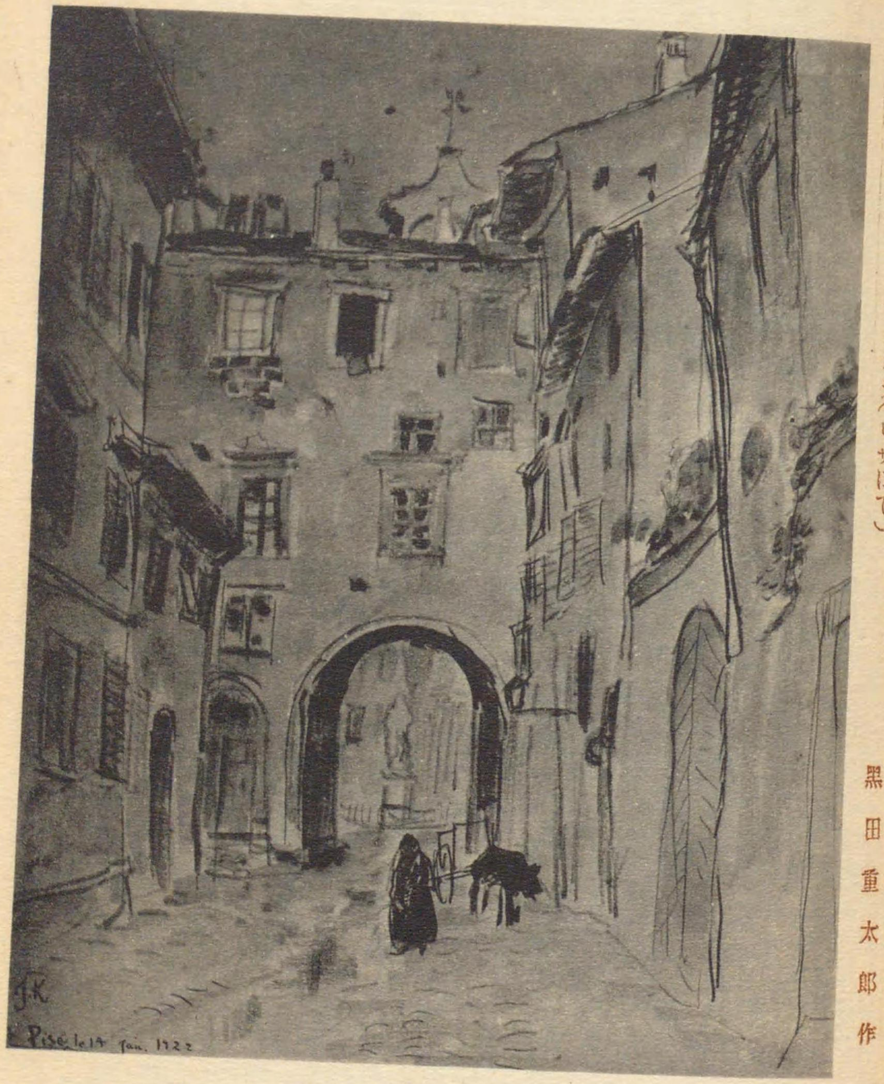
（二）

別に誰に聞いて來たわけでもなく、聞かれた場合、即座に時間表にあつた廣告を思ひ出して名指したまでの事であるので、此夜此ホテルでの寢心地は、大してコンフオルタブルなものでなかつた。がらんとした大きな部屋へ案内してくれたのはいゝが、それだけにけちな間暖めではこたへず、寒さうだなどいひ乍ら、兵隊のやうに三つ並べてある寢臺へ潜りこむと、バネが緩んでゐたと見え、夜中誰かが寢返りするど、其度にカタ〳〵鳴つて誰かが眠りをさました。要らぬ裝飾までくつゝけてあつて、寢臺と枕元と足元に、鐵葉の丸い板にマリイ　アントアネツトと云ひたい樣な肖像が描き込であるのが、鐵棒に當る度に響くのである、お庇で頭が痛いと、あくる朝土田君が呟してゐた。また腸がわるいと云ひ出さなければいゝがと私は密かに心配した、此人の腸と頭とは餘程密接な關係を有つてゐるらしい。

實を云ふと、私はゼノアに就いて語る可き多くを有たない。昨宵着いて今日立たうとする高が半日の見物では、それも當然であるけれど、今一つはこれから訪ねて行かうとする伊太利の市邑に比して、私達を惹きつけるものが尠少であるので、最初から豫定に入れてなかつたからでもある。勿論私とても、此地が既に中世に於て幾つかのモニユマン遺をし、殊更峻烈にして海に迫り、常に狹小な平面しか持し得ない地勢が、反つて建築史上に一樣式を導いて、十六世紀中葉アレッシの偉才を生んだ事も、また屢々

動搖はあつたとしても此地の殷盛が十七世紀の初め、リユーバンス、ワン　ディクの二大家をして來つて貴紳の像を描かしめ、繪畫史上に一つの事蹟を殘したのも知らないではない。が、他に見たいと思ふ所さへ事に依れば割愛しなければならない切り詰た豫定で、さう便々としてゐる譯にも行かなかつたのであつた。

朝起きるなり仕度をして、先づ薔薇宮と云ふのへ行く十六世紀後半、アレッシの作と傳へられてゐるが、其名の依つて來る所は此建築の外面に施された色彩だと云ふので、ざんな綺麗なものかと思へば紅殻色の剝げたやうなのであつた。茲にあるチシアンのフィリップ二世の像と、ヴン　デイクのアントニオ　ブリニヨール　サルの像とを當てにして行つたが孰れもさう好きになれるものでなく、反つて當てにしてゐなかつたパリス　ボルドネの『婦人像』が私達の注意を惹いた。畫格は迚もチシアン、チントレツトの渾麗に及びもつかないが謹嚴な、そして優美な筆致はまた一顧に値する者がある。殊に此畫の婦人の金と見紛ふばかり、美しい黃な絹の上着を羽織つて、蠶と立つた姿と其顏の表情は氣高くさへ思はれて此作家の作中でもいゝ方だと思はれた。でも此一枚ぢや食ひ足りないと呟き乍ら其處を出て、ヴイアガリバルヂをぶら〳〵歩き乍ら、フオンタナ　マロゼの廣場を右へ曲り、ウンベルトの廣場で、高い所へ上つて、大勢の人だかりを前にして、何か喋つてゐる男を見て、野師だらうか勞働演說だらうかと囁き合つたが、結局解らなかつた。でも伊太利は暇な所と見え、ほか〳〵日の當る町を、用事のなさう



ヴィア　デラ　ファジオラ（ピザにて）

黒田重太郎作

な人間が澤山あるいてゐる。其近くのサンロレンゾ寺院の正面は注目に値する。チイムパンに彫つてある基督と四福音書の徽表と、柱頭の天使や獣や、柱の唐草はロオマン風のものとして遜色のないものであつた。あと二三軒お寺をまはつて見たが、別に面白いものにも出くわさず、最後にパラッツオパラピキニへ行つて、こゝの畵廊は鎖つてゐると断られ、なんの、あてにして來たチントレットオの一枚位、ヴエネチヤへ行けばいゝのが見られると、妙な所で慨慨して、畫過ぎの汽車があるのを幸ひ、匆々にしてピザに向つた。

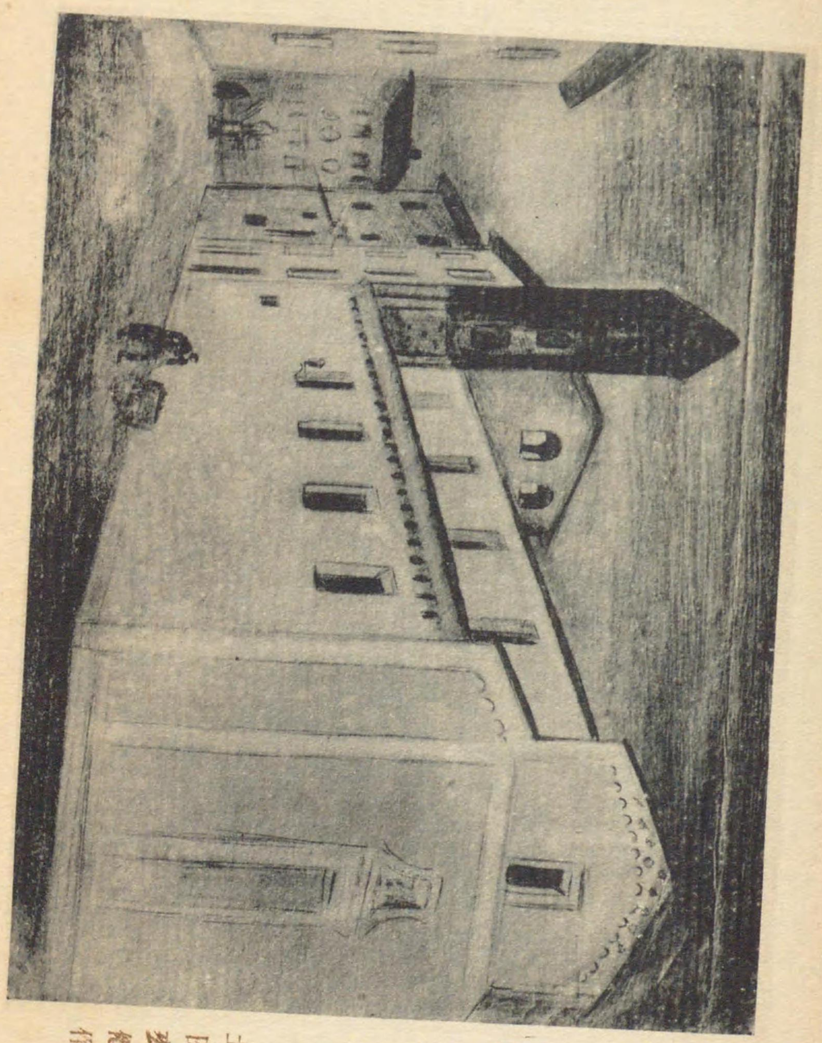
（三）

春はまだトスカナの野を訪れてゐなかつた。暮方近く日が陰ると俄に薄ら寒さが襲つて來た生憎車室内には蒸汽が通つてゐなかつたのである、見るゝ〳〵湧き出す夕靄の底に遠い山影は沈んで、憤慨樹の間に白い家並ばかりが浮き出して見え、一すぢ黄な光が檳榔樹の梢に流れる頃、漸くピザへ着いたオテルネツチユノの馬車に迎へられて、ほのかに暮殘つたマルノ河を渡る、宿はルガルノ河岸を少し下つて、辻を曲らうとする角にある。夕餐を了つて、部屋へ戻ると何處のお寺から鐘の音が聞こえて來た。明日はいよいよカンポサントが見られるかと思ふと嬉しくてたまらず、せめて繪葉書でも探して來やうと外へ出て、河縁の胸壁傳ひに歩くと、靜かに海へ流れて行くアルノの水の面に岸の家並が倒に映つて、嚴しい星の光も宿つてゐた、寒かつた。宿へ歸つて浴室を命じると、ちよろ〳〵と日向水の樣なのが水管か

ら流れ出すのに驚いて、そこ〳〵にして上り、其夜は早く枕に就いた。

翌日朝九時宿を出て、ピアツア　デル　ドオモへ志す、青々と晴た空が、兩側から推し迫る高い軒と軒の間から、一すぢの帶と見える、狹い街路を通つて、行く程もなく廣場の片隅へ出た。右から數へて、例の斜塔が聳え、續いて伽藍、洗禮堂と、何れも浪費と云ひたい迄に大理石を使つて、くすんだ緣の廣い芝生を仕切る前の敷石道と共に、まことや『死人の都』の名にふさはしい、白々した姿で立つてゐた。

馬車がドオモの前で止まると、其處に立つてゐた男が一行を見るなり帽を取つて挨拶した。名前を聞くと、若しよろしければお雇ひなさいと、出る時宿で注意してくれた案內人であつたので、それに任せる事にして、先づ此所から見て廻る。此伽藍は人も知る如く、ピザの共和軍がパレルモ近くの海戰でサラセン族に勝た後、其れを記念するために建てられたもので、約半世紀の星霜を費した後、一一一八年に最初の落成を了はつたのである。併し其後幾度かの修築を經て今日私達が見る所のものは一五九六年火災の後、八年に亘つて施された全然復興期の趣味であると。此處の穹窿にある『光榮の基督』は普通チマブエの作と稱されてゐるけれど、實際其作として諸家に承認されてゐるのは基督の左脇に立つた聖ジャンスバプチスマだけで、アンドレ　ベラチエの說に從へばあとの二つは最初此彩石畵に手をつけたフランセスコと云ふピザ諸寺院の彩石畵工の長をしてゐたものゝ作であらうと云ひ、またフオヴイルに依れば基督の右脇の聖母は一三二一年之を完成したヴイチノ　ダ　ピストヤの作だと云ふ。そしてチマブエ



聖シスト寺ピサ　土田麥穗作

の作さへも一三〇一年若くは二年と一定してゐない。孰れにしても彼が逝去に先立つ事僅かな時代に成されたのは事實で、また彼の作と認められてゐる青い外套を羽織つた聖ジャンの部分が殊に優れてゐる事も爭へない。總體として見ると殊に大きな基督の像がグロテスクで一寸親しむ氣にはなれなかつた。その他聖所の壁にあるソドマの『基督埋葬』と『アブラハムの犧牲』も私達の注目を惹いた、特に此後者は優れたものとして私の記憶に遺つてゐる。

（四）

晴れたと思ふ空へ何時の間にやら湧出した雲が、紫匂やかなピザンヌの峰々から、洗禮堂の赤い圓蓋の邊までを一面に蔽つてしまふと芝生の日影が薄れて（冷たい風が頰を撫でた（古びた外套の肩先を搖り上げて胴慄ひしながら案内者が、此冬になつてからこんな寒さは始めてですと呟く、ニコラ　ピザノの傑作と傳へられてゐる説教壇を見て洗禮堂を出ると、私達はカムポサントの方へ導かれて行つた。

一二七八年ニコラのネギオヴンニ　ピザノに依つて上棟され、約二百年の後漸く工を終へ、五十三の艨艟遠く地中海の彼方より聖地の土を齎して其處の聖徒の屍を埋めた、此建物は其外觀よりも内部に私達を惹きつけるものを有つてゐた。尖弓形を重ねて穹窿として、穹窿を連ねて廊として廊と廊との方形に相接する處一つの中庭を形造つて、花の落ちた薔薇の植ゑ込みが、窓の下に枝をさし交してゐる。戸口を入つて左手の南の廊に歩を移すと、普通シモオネ　マルチニの作と傳へられる優雅な『昇天』の圖に

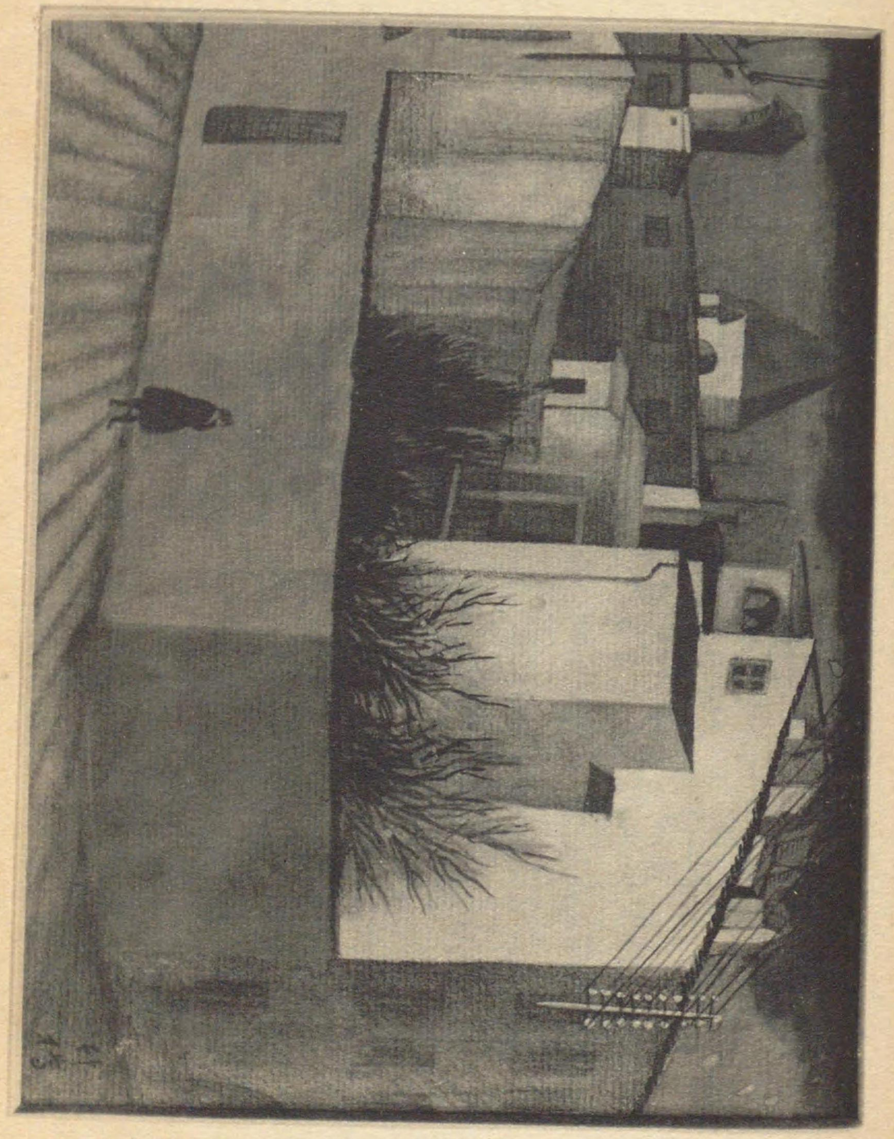
續いて、所謂『修道僧の壁畵』が其處の壁を飾つてゐる。大分損じた所があつて、その美しさを充分に止めてゐないのが惜しい。其れを曲つて西の廊にある壁畵は十四世紀の頃既に失くなつてゐたとフオヴイル氏は云つてゐる。現在あるのは近代のもので『これはあなた方が御覽なさるものではありません』と案内者が云つた。北の廊の創世紀を題材としたものはオルヴ エトの畵家ピエロ デイ ブツチオの作で十四世紀末年に成されたもの、鈍重な手法と暗い色彩は餘りいゝ感じを與へなかつた。

それに續いた壁面の殆ど全部を埋めたのは、同じく舊約聖書から題材を採つたベノツツオ ゴツツオリの作で、マンギヤン博士の說に依れば一四六八年から八四年まで約そ十六年に亘つて成されたもの、畵聖アンゼリコの優麗な畵風を繼承して、それに格致の雄大さ、手法の清新を加へた此畵家の圓熟期を語るものとして、正に絕好のものであるのみならず、當時フイレンツエ畵派の作中最高頂を示すものと云つても過褒でないと思へる、向つて左から數へて行けば、先づはじめに『ノアの醉體』がある。嘗て全地を覆つた恐ろしい洪水は名殘をも止めず、生めよ殖えよの神の祝福に從つて、世はいまだなつもの、盛りである。見渡す限り鮮かに晴れた空に、黃土色の丘が聳え、檜樹、笠松などがすく〳〵と立つてゐるのを背景として、前の葡萄棚の綠の葉影から熟れた果房が累々と垂れてゐる。梯子に登つて實を蒐める若者、籠を頭にしてそれを運ぶ少女、鄙びた唄をうたひ乍ら酒槽を踏む男、どの顏にも生の歡喜は溢れてゐる。葡萄酒に醉ひ疲れて倒れたノアと、それを見て驚いてゐる次子ハム、父の隱し所を見まいとして後向

に寄つて衣をかけやうとしてゐる長子セム、伏目になつてゐる美しい少年ヤペテ、後の家の軒のあたりに、一羽の孔雀が長い美しい尾を垂れてゐる。惜しい事には寝てゐるノアの邊がひどく破損して、顔が失くなつてゐるが、其上方の掌で顔を隠した若い女の指の間から覗はれる眉目の美しさこ、姿體の優美さは蓋し此の部分の中でも傑出してゐる。續いて『ノアの呪ひ』こなる。此部分の左下は損傷殊に甚だしく、僅かに怒れる父の表情と悔いこ悲しみに充ちてゐるハムの顔だけが窺ひ得られる。壯麗な邸宅が見え、屋上には孔雀が尾を擴げ、地上には花が咲き亂れてゐる。檳榔こ檜の樹の間を透して、向ふに摺鉢形の橄欖の丘が見える正しくトスカナの野の景色である。青空に浮んで、靜かに展舒する雲、飛び翔ける小島の群、水溜に首をさし寄せて水を呑んでゐる犬や、其邊に手をつなぎ合つて遊んでゐる小兒、其確實な寫實的表現こ、全幅に浸潤する牧歌的情緒に於て、ベノツツオは茲に一個の卓れたる色彩詩人こして、其素質を充分に發揮してゐる。

（五）

史家の配述に依れば、此れ等の壁畫が成されたのはベッツオの生涯中最も幸福な時期であつたこ思はれる、ピザに移り住むだ時彼は四十八歳、權勢並びなきメヂン家の眷寵こして、名聲手腕共に當時の群畫家を壓するものがあつた。彼は此處に來つて三年後父の訃に接する悲しみを有つたこしても、既に三人の子を設けた其の妻モンナ　ナナこの仲も睦じく、更に四人の子の誕生を迎へて、一家の和氣靄々た



ピザの街

小野竹橋作

るものがあつたに違ひない。彼が住居と定めた處はヴィア　サンタ　マリアで此の舊い市の中でも最も美しい處にあつた。其街の一方はルガルノの河岸に通じ、他方はドオモの廣場に接して、彼が制作のために其家とカムポサントの間を往來する度に、遠く彼方の、瑠璃色の空を劃して、圓らかな輪郭を有つてゐる。ビザンスの山の姿や、中古のモニユマンな金色がてらせる和やかな日ざしが彼の視界に入つて其詩情を一層裕にならしめた事は察するに難くない。それは續いて歩を移して『バベル塔の建設』の前に立つた私の胸に、明かに感じられた所である。摩天の高塔未だ成らず、差し渡された足場の間から、僅かに其初層の半を示し、足場の上と下とには多くの工人の働く姿が見える。それを取捲くのはフイレツエの市民であり、貴顯メヂシの一族である。黄金の實たわゝに熟る香橙の樹の間を透して、壯麗な建築が續き更に其建築の絶えた所から幾曲りする野路と、檜の並樹と、匂やかな遠山影が見える、恰も好し雲を破つて中庭に落ちた陽が、明るい反映を壁面に投げ、その全體を宰べた爽かな群青と綠と黄の對照を一層鮮かに照して、死の沈默は鎖された此廻廊に、薫ばしい初夏の風を吹き入れる思ひをさせた。

『バベルの塔』を過ぎて、それ等舊約傳説の壁畫が中斷されると、其處にアムマナニの禮拜堂が開かれる、戸口の上壁に描かれたのは受胎告示であり下つて『東方博士の禮拜』である、其行列の中にベノツツオの像がある事を忘れてはならない、禮拜堂の中にはジオットと云ひ、又其弟子の作とも云はれてゐる壁面の斷片が數個連ね懸られてゐる禮拜堂を出て更に歩を移せば再びベノツツオの舊約の情景が展開される

『アブラハムとベロスの崇拜者』であり『ハランを出づるアブラハム』であり『勝利のアブラハム』であり『ハガルの出發』であり『ソドムの火災』である。ひたすらに道を急いで逃れやうとするロトと其娘達と、唯一人名殘を惜しむで後ふり返つたロトの妻が鹽の柱に變へられた。姿は私達を感動させた。續いて『イサクの犧牲』となり『結婚』となつて、更に幾つかの情景が相接して、それ等のアミューザントな群像や、清新な自然の姿を次々に展開した後、遂に無慮二十三の場面に仕切られた美しい壁畫は『シバ女王』に至つて全く終るマンギャン博士の云ふ如く、ベノッツォの才能は小品に適せず大作に叶ふものであつた、畫架の畫よりも壁畫に卓れた作品を遺してゐるのも其譯である、殊更大なる畫面をも尚ほ狹しとして憂へた彼が、窮屈な宗門の束縛から離れて自由に其手腕を發揮した此大作こそは、私達が豫て豫期して來たものであり、また其豫期を裏切る事のないものであつた。此後私達は二三の美術館と、有名なフイレンツエのリツカルヂ宮に彼の作品を見たが、遂にこれ程の感動を與へられる事はなかつた。

（六）

廻廊を一巡して再び南の廊へ歩を運ぶと、其所の壁に『最後の審判』『死の勝利』などがある。後者は一九一一年フイレンツエの聖クロチエ寺で、ヴサリの記述にあるオルカニヤ筆の同じ命題の壁畫を發見して以來、その二つの間にある多くの相似した點が、この畫も同じ作家のものとする說が行はれて、現に案内者もさう述べてゐたやうであるが、これとても異說が多い。『最後の審判』に至つても同樣で、一々

長ショールの女

黒田重太郎作

正直に受け容れてゐては結局歸する所を知らない譯故大抵の所で切り上げて置く事こし、先づ十四世紀の中葉、幾人かの畫家の合作に成つたこ云ふのが大體間違ひのない所こして置いて、私達はなほ暫くの間それ等の前に足を止めてゐた。『最後の審判』の地獄の部分はあまりグロテスクで私にはしみじみ來なかつたが、『死の勝利』の樂園の部分はまだ手法の稚拙を脫してゐないこは云へ、樂を彈じ、鳥獸こ戲れてゐる群像の姿體に優雅掬す可きものがあるの思をつた。

カムポサントを出て待たせて置いた馬車に乘るこ、空は復曇つて、眩しいばかり白銀に輝く雲こ、古綿の斷れるやうな鼠色の雲が斜塔の背後からもく〳〵競り出してゐる、ごうだい、あすこへ上つて見やうぢやないかこ小野君が云ふこ、いや僕は高い所へ上がるこ足が顫へてねこ麥僊君が氣の弱さうな事を云ふ。中には何も御覽になるものがないのですからこ云ふ案内に任せて、塔の最下層の繪樣帶にノアの箱船が彫つてあるのを美しいこ見ながら、聖フランセスコ寺へ走らせる。本堂の壁にガツドオ　ガツヂこバルトリのフレスコがあつたが、全然無價値なものではないにしても、大して取り立てゝ云ふ程のものでもなかつた、こゝの僧院が改造されて市設美術館こなつてゐる、修繕のために閉鎖されてゐたのを案内者の口添へで見せて貰ふ。トスカナ畫派の作品にちよいちよい好いものを見る事が出來た、其處を出ると書過ぎてゐた。

×　×　×

×

其日の夕方、もと來た道をもとの樣にして宿の馬車に送られながら、ルガルノ河岸からポンテ　デメッツオを渡るこ、橋の袂の辻にも、一日の仕事を了へたこ見え、暢氣さうな人通りにも、急に殖えて、晝間寂こ靜まり返つた町々生々こ癒返らせてゐた、停車場へ行くこ五時過ぎこ云ふ汽車が半ば過ぎても影を見せず、六時になつてやつこ來た、土曜日なので込むかも知れないこ心配してゐたがガラ空きで樂に身を横へる事が出來た。ピザを出て間もなく日が暮れる。今朝から怪し氣な空模樣がこうく本物になつて、斜な雨の脚がボチ〳〵窓硝子を叩く。外面を透かして見ても何も見えなかつた、時々さつこ光が射てまた暗に歸るのは、小さな停車場を過たのであらう。

何こ云ふのか名は忘れたが大分羅馬に近くなつて、とある驛へ着くこ偶然乘り込んで來た日本人があつて見るこ、それは詩人ダヌンチヨオの友こして、日本から名前を聞いてゐた下井春吉氏であつた。大變此瀧車は遲れましたね。一寸要件が出來て此邊まで來たのですが、これぢや羅馬で接續する筈のナポリ行も出て了つたでせう。仕方がないから私も羅馬で泊りませうこ云はれる、いろ〳〵ナポリやボムベイの話を聞く。そして是非ナポリでお訪ねする事を約して、羅馬の停車場へ着くこ別れた。

羅馬にて

——伊太利游記——

（一）

我が鄕土、魂の都こバイロンが詠じた羅馬の第一印象は、私達に取て甚だ詫しいものであつた、通例なれば最う迚うに着いてゐるものを、途中次第に遲れて、私達がテルミニ停車場へ着いたのは夜の二時近く、空洞こした構內を僅な旅客の影が散つて行くこ、出口の邊りにあぶれた樣な宿引が四五人詰めかけてゐた。ピザから電報を打つて置いたホテルを名指して呼ぶこ、其時まで煩く附纏つてゐた男が、やれ私が先口だ、いや此方がこ負けず劣らずせり合つてゐる。結局後の男がそれこ早合點して、其處へ廻して來た自動車に乘るこ、出し拔かれた男は口惜しさうに、拳固を鼻先へ突きつけ乍ら、何か解らぬ事を喚いたが、やがてそれも闇の彼方へ消えてしまつた、雨が止んで月が射すこ見たのは人通りの絕えた廣場に、獨り煌々こ輝く弧光燈の影であつた。寂こ靜まり返つた街を少し行つたがこ思ふこ止つて降ろされたのはホテル　エリートこ看板をあげた、名指しこ違ふ家の前である。何故こんな處へ連れて來たのだこきめつけるこ、いえなに此の方が新しくて、部屋が淸潔でこ濟ましたものである。それを押し返して云つた所で、そんなら御勝手にこ出られゝば、此夜更けを、重い鞄を抱へて方角も解らぬ町を迂路つか

羅馬のある街角　　土田麥僊作

ねばならない。さては一杯食つたと氣がついても後の祭り、宿の者は寢入端と見え、やつとしてから開けてくれた戸口を入らうとすると、其男は、掌を出して此處までの案内料をと請む。して見るとホテルの迎へでもないらしい。重ね重ねの始末である。

以前よく伊太利を旅した人の話に、宿屋が立込んで停車場で夜明しをしたり、やつと賴み込で直かに床板の上へ寢かされたりした事があると聞いたが、そんな目に逢ふよりましと僅かに自ら慰めて、其夜三時漸く疲れた身體を横にする事が出來たが、永遠の都羅馬にもこんな處があるのかと驚かされたのは部屋の調度や裝飾である、何處も彼處も赤々と、綺麗な色で塗立て、、間々未來派を思はせるやうな怪體な圖案が施してある。ずつと後になつて思ひ當つた事だが、察するに此家は開業早々と見え、殊更閑散な昨今、躍起となつて客引に努め、停車場あたりをうろついてゐる案内者とも立ん坊ともつかない輩にまで渡りをつけてゐるのらしい。現に其れから何日か經つて、ナポリからの歸るさ、また此處へ立寄ると、思ひがけず巴里で顔馴染の人に逢つた。や、妙な所でと驚いて、段々話を聞いて見ると、其人も矢張り私達と同じ傳で羅馬に着くなり連れ込まれたのであつた。

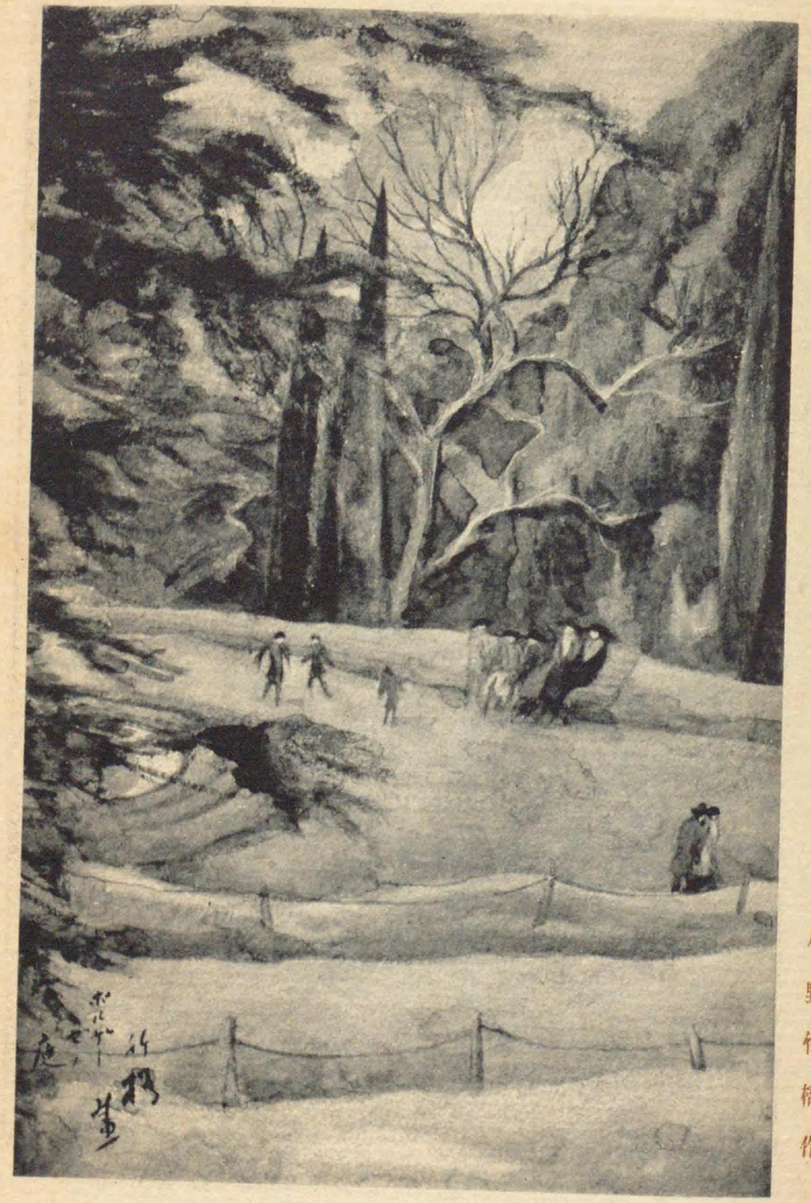
× × × ×

翌る朝十一時、昨日からの疲れでさなきだに重い頭をあげて、晝餐を濟ますと直樣馬車を雇つて、降りしきる雨の中を井ルラ　ボルゲーゼへ駈けつけたが、日曜の事とて、僅かな時間の相違で、畫廊は閉

まつてゐた。濶やかな庭の樹立の下を縫つて、しつとり濕つた土の上を、轍ゆるやかに軋らせ乍ら、道をモンテピンチオの上に辿れば、其處の高臺の端れから、羅馬の一部が展けて、幾十の寺塔圓頂、七つの丘へ連ね重ねた甍の間に參差して、煙霧の中に隱見する。一際高い聖ピエトロの穹窿を彼方にして、黄に濁つた河水が家並の間から出て家並の間に隱れるのはテベレである。其昔、北より來つて聖都を拜しやうとする者が、車を連ねて通つたと云ふピアツツア　デルポポロは眼の下に見ゐる。廣場の中央に一基の尖碑が聳ゐ、其周圍を寸馬來り豆人行く。茸に似たものが幾つも往き交ふのは、近く寄れば日本の飴屋のそれを思はせて、賃雇馬車の御者がさしかける大きな雨傘であつた、檜樹の立ち並んだ丘の斜面に沿ひ乍ら、道を雁木形に降りて廣場の端に出で、テベレを渡つて聖天使城の下を過ぎ聖彼得寺の廣場にベルニニの柱廊を賞し、あとは當もなく町を走らせたが、雨氣衣を徹して寒さ頻に迫つたので、其まゝ宿へ引返させた。

（二）

一度歴史の地層を穿つて、過去三千年の堆積に立つ羅馬を見れば、嘗て其處にあつた者と、今ある所のものゝ間に餘りに照應の多いのを驚かぬ者はあるまい、コルソ　ウムベルトの南端、白大理石の列柱を繞らし、幾十級の石磴を控へ、高さ二十丈に垂んとする、ヴィットト　エムマヌエルの記念碑をあふいで、何故こんな馬鹿氣たものに疲弊した國帑を傾けやうとするのだらうと不思議がるには及ばない。由



ボルゲーゼの庭（ローマ）

小野竹橋作

來巨大は羅馬人の好むところであつた。暫く美的價値を措けば、テベレ右岸巍然たる聖彼得寺の圓頂もパラチノ、カピトリノに連なる羅馬墟址も、更にカムパニヤを横斷して虹の如く空を劃する水道穹窿も皆それと規を一にすると云ひたい、唯一神教である筈の基督教も、羅馬人の手に渡つて加特力となれば其偶像崇拜的な點で、以前あつた異教と擇ぶ所はない。ピアツツア　コロンナに矗立するマルクオウレルの圓柱の上には聖堡路の像が威儀を整へ、フオロ　トラヤノの廣場の、トラヤノ圓柱の頂きには聖彼得が嚴めしく、群衆を見下してゐる。法皇の絶對神權は帝王の專政威壓の變形に過ぎない。信者の膏血を以て建てた聖座の伽藍の下には、嘗て無辜の血を流したネロの鬪戲場があるのだ。——こんな事を考へ乍ら、これも其例に洩れない聖マリア　ソプラミネルヴヱて其昔ミネルヴヱ神殿のあつた跡に建つてゐるドメニカ派の寺を尋ねて講僧アンゼリコの墓を弔ひ、いまの聖マリア　ロトンダと呼び慣らはされてゐるパンテオンにラフアエルの墓を展して、ピアツツア　デル　ポポロを過ぎると、昨日に引かへて青々と晴た空の下を、中央尖碑の臺座のあたり、仕事を探しあぐねたらしい立ん坊が何人もいぎたなく睡りこけてゐた。羅馬は『過去』の上に温かな日を浴び乍ら睡りこけてゐた。

ボムゲーゼの畫廊にチシアンの『天愛地愛』、コレジオの『ダナエ』を賞した後、ジアルダノ　デル　ラゴを左にして、いくつも石像の配置してある道を行けば、綠濃い笠松の蔭を衣影傘影の紅紫匂やかに、なだらかな芝生の上に晴々として語りあふ若い男女の姿も見えた。ピンチオを降て、聖マリア　デル

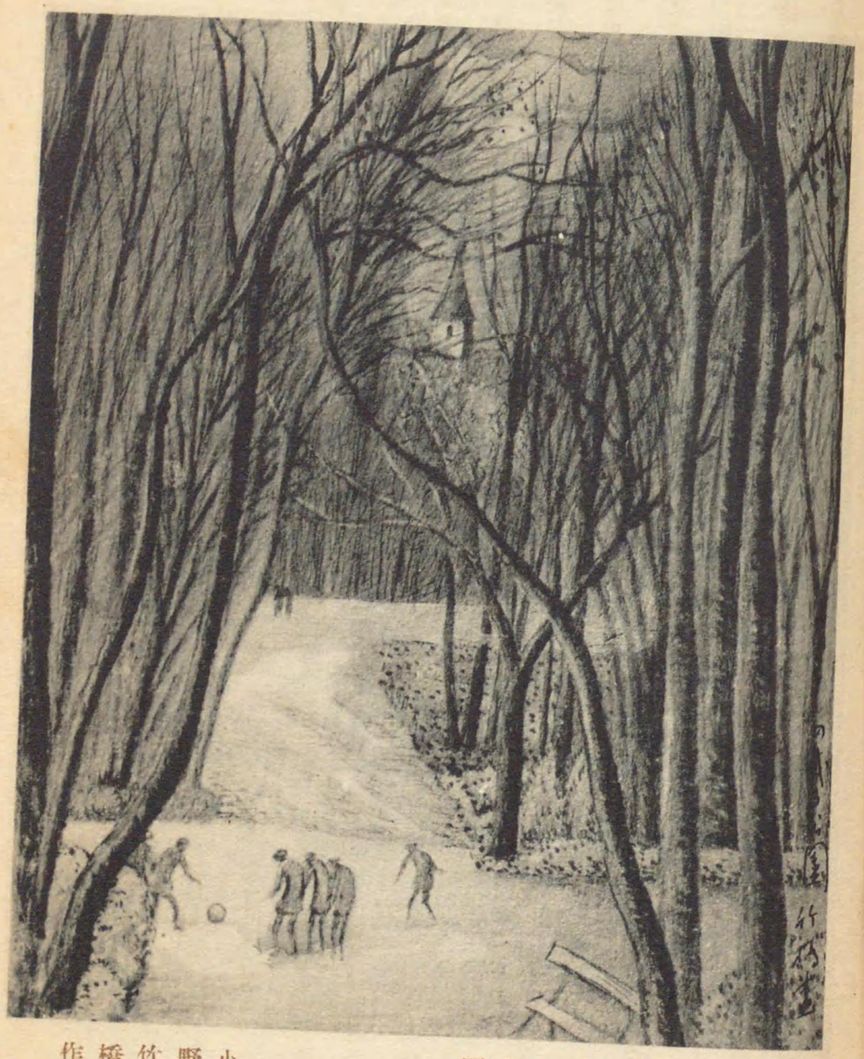
ボボロの、稍薄暗さを覺ゆる堂内に入ると其處の右手の禮拜堂にピントリツキオの『基督降誕』が、優しい抒情詩を奏でてゐる。脈々たる哀愁は、聖家族が集ふベツレヘムの農家のあたり、一もこの樹の梢を端れて、黄光の漂ふ空から、何時となく見る者の胸に忍び入るのだ。

暮近くなつて急に曇つて來た。西班牙廣場を通つて『即興詩人』に屢引かれてゐる有名な石段の前まで來ると黑い肩掛を纏つて、花賣る女の姿が見えた。早あちこちに白い焔を吐いてゐる街燈の下を、そこはかとなく夕闇が迫つて、忙しげに行き交ふ人々を呼び止め乍ら、帽を片手にして哀を乞ふ男がある。アンデルソン寫眞店で用を足したあと、ボルタサラリアから城壁傳ひに、宿の戸口まで戻ると、しめやかな小雨が訪れて、其處の舖石を濡らしてゐた。羅馬の二日目は斯うして過ぎたのである。

（三）

三日目の朝、車を聖彼得の廣場に驅ると、柱廊の邊りにうろ〳〵してゐた、案内者の一人が『何處へ？』と云ふ。『ボルジアの舊棲』と答へると『シスチナ禮拜堂はもうお濟みになつたですか』と問ひ返す。案内者が訝かつたのも無理はない。ヴチカノの中で此處を先に擇んだのは、昨日ピントリツキオの壁畵に感心してからであつた。

それはラファエルの室房の下になつてゐる。ニコラス五世以來、歷代法皇の居と定められた所であるが悽慘な可嫌な記憶を遺してゐるボルジヤ一族の歷史は、ヂユリオ二世以後、それ等の室房をして全く閑



マドリツドの或る公園　　小野竹橋作

鎖せしめたのである、それが廢絶に歸しやうとするのを救つたのは其處の穹窿に殘つてゐるピントリツキオの藝術與つて力があつたと云つていゝ。

一八八九年四月二日午後時の法皇レオ十三世は、彼が日課としてゐたヴチカノ庭園逍遙の駕を枉て、此處を訪れたのである。赤天鵞絨に金の刺繍をした制服に身を固めて六人の輿丁の規則正しい歩並に從ひ乍ら、駕は廊房の角を過ぎ、廣やかな書庫の廊を通つて、ボルジヤの舊棲まで來るや、急に止まつた常に變る振舞に從者を驚かせ乍ら、法皇の下す命に依て、番衛の開く扉は鋭い響をあたりの壁に投け返し乍ら、軋つた黴臭い空氣が其處に居合はす者の面を撲つた。四世紀の闇に鎖されて、臆測は臆測を生み、夜々鬼も哭く可き奇怪な傳說の數を加へて行つた其等の室房は、此時初めてイノンダーブルな春の日を、心ゆくばかり吸ひ込だのであつた。ベルベデルの庭に向つて、一樣に設けられた窓から流れ込む明るい光が、六つの聯續した室の荒れ果てた樣を、悲し氣に照してゐた。朱の袍の上に白い上覆を掛けて法皇は先づ第一の室に歩を移し、ギオヴンニ　ダ　ユヂノシピエトロ　デル　ワガの筆になるシ云ふ其處の穹窿を見上げた、それは一五〇〇年の夏崩落して、ボルヂアの主長、法皇歷山六世をして危く積惡の報ゐるに死なしめやうとしたのである。續いて五つの室房には、ピントリツキオの壁畵が、塵塚の中の古金襴の斷片を見るやうに、埃の中から燦として光を放つてゐた。此の十五世紀美術の珠玉空しく地に委せむ事を嘆いて、レオ十三世が畵家セイツ等をして修復を命じたのはそれから間もない事である。で、此

れが公開されて、私達の眼にまで觸れるやうになつたのは比較的近年の事である。

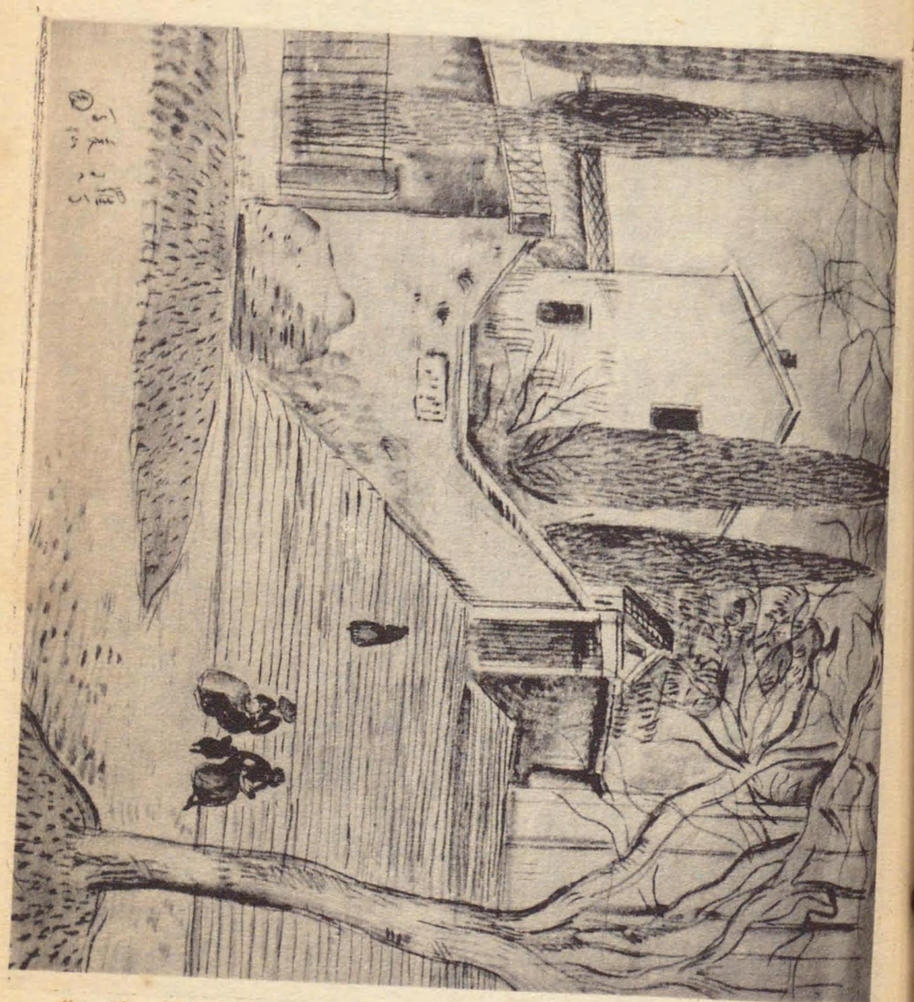
歷山六世の下にピントリツヽオが此等の穹窿を裝飾したのは一四九二年から約三年に亘る間と記憶する。當時彼はボルジアの寵宰として、其榮華に圍繞せられ、名聞勢力其先輩のペルヂノ等を凌ぐものがあつた。金碧燦爛とでも形容したい、此等壁畵の外貌がよくそれを證明してゐる。併し私達はまたその裡に一種の纖弱がある事を見逃す事は出來ない。此の纖弱さは時として『奇蹟の間』のつゝましやかな聖母やいたいけな幼兒基督の擧止となり、『聖徒の間』の窈窕たる聖カテリナの風姿となつて、魅惑的な作用を、觀者に投けかけるけれど、其の多くの部分に用ゐられた、衣裳調度の美しさを極度に表現するため、まるで押畵を見るやうに、漆食土を盛上げて、惜氣もなく金泥の模樣を置いた、厭はしい成金趣味が、偶此作家の個性を裏切つて、其處に華美にして空虛な、宮廷生活の壓迫に呻吟する一個脆弱な魂の狀態を、慘ましいまでに繰り披げてゐる。『聖セバスチアノの殉教』こ云ひ、『貞潔シュザンナ』こ云ひ、娓々たる傷情流露する所、流石にデル　ボボロの多感な畵家を思はせるけれど、遂にミケランゼロ、ラファエルの大才は此人の有でなかつた。ヴサリの傳ふる所に依れば、彼の纖麗な畵風は當時の貴顯の持て囃す所となり、多くの依賴を招致したが、彼は其練熟に任せて速かに其希望者を滿足せしめたこ云ふ『然もそれ等の作品は、彼が更に多くの日子こ注意を以て試みたものに比すべくもなかつた』。此才能と技倆を以てして、尙ほ此の藝術家を蠱毒すべき貪縁を拒絕し得なかつた所に、境遇のまゝに左右されて

行く彼の心弱さが窺はれる。アツパルタメントオ　ボルジアの壁畵に多少の期待を破られたが、なほ種々の點から教へられるものを贏ち得て、私達は其處を出たのである。

（四）

その翌る日の朝である。まだ時間が早かつたゝめか、それとも天氣の故か、シスチナ禮拜堂には人影も稀だつた。灰色の雲重く封じて、外には雨さへ催さんず景色である。高い空から斜に落ちる白い光が祭壇の端を冷たく光らせてゐた。

祭壇を正面にして左手の壁を蔽つたのは、モオゼの一代記である。ベルヂノ、ピントリツキオの感傷的な作品に續いて、ボチセリの筆に成る、祭司のエテロの娘達の羊に飲ふ樣は美しかつた。右手は基督の事蹟である。頭を轉じて穹窿を見上げれば、云ふ迄もなく其處はミケランゼロの作で光を呼び、日月を懸け、空と水と陸と海とを分ち、動植の數を盡して創め給ふ神、その息吹きに起き上るアダム、眠れる夫の肋から生れるアダムの姿が描かれて、美少女の容を假つた惡魔は蛇形の尾を引き乍ら智慧の樹の梢を攀ぢ、誡を破つた始祖夫婦は天使の劍に追はれる樂園を後にする刑罰の水の面に、ノアの箱船漂へば、其氾濫を僅かに抽いて遠く高山の嶺も望まれる、更にそれ等を取卷いて幾十の壞景が展開され、十二豫言者の姿が或は瞑想に沈み、或は書冊を繰り披げて、其間に配置される。仔細に見去り見來れば、それ等は悉く嘆稱に値するものであるけれど、一度祭壇後壁の、高さ七丈に垂んとし、幅三丈を越える尨大な、



聖ヴィゴリオの石段

土田麥僊作

『最後の審判』に向ふ時、群星の光を改めて、唯だその美と力とを愈々發揮せしむる爲のアクセッソアルに過ぎない氣を起させる。

熱を病む巨人の夢も斯くやそれは惱みに悶え、怒りに激する巨大な裸形の捩れ合ひ縺れ合ふ、凄じい情熱の世界の表現である。天使等の吹き鳴らす喇叭は虚空に響き渡つて羔の怒りの日は來た、畏しいばかりに灼熱する榮光を身に負ひ乍ら、聖母はじめ、聖群徒を率ゐて、復仇者基督の颯爽たる姿が雲の上にあらはれる。彼が擧げた一方の手の下は勝利者の一群である。塚穴は開いて、其處から蘇生された人々が聲高らかに歡呼しつゝ、身も輕げに大空高く登つて行く。彼が下げた腕の下には敗北者の一群がある天から追ひ降された惡魔と共に、歡樂の夢いま覺めて、或は嘆き、或は悔い、物狂はしげに遙な地の底へ落ちて行くカロンの舟に運ばれて、冥府の岸に投げ出される多くの魂がある。いまその部分は掻き消されて分明でないけれど、罪人を待つて大きく口を開いた地獄には、不斷の猛火が炎々として燃えてゐたのである。向つて右手の下端に、異相の男が蛇に肢體を卷かれてゐる。ミノスに擬した主祭ピアジォの像である。一日彼は法皇パウル三世に扈從して此畫の製作中に訪れた。法皇が其意見を徵するに及んで彼はしたり顏に浴場か旅亭にふさはしい猥らな裸形で、此神聖な場所を飾るのは其意を得ぬと答へた。其言葉に忿怒を抱いた畫家は、彼が去ると直に筆を執つて此部分を成した。畫家に依つて地獄に定められたピアジォは、直らに法皇に向つて其事を嘆くと、法皇答へて『若しも汝が練獄に置かれたのであれ

オセロ　小野竹橋作

ば、予も汝の爲に取なしの仕様もあつたであらう。されど地獄では予の力及ぶ所にあらず。汝は永久其所に居らねばならぬ』と云つたと傳へられてゐる。

（五）

ミケランゼロが此作に費した年數に就ても、或は六年、七年、八年と諸家の說は一致してゐない。思ふに法皇クレメント七世が彼に命じたのが一五三三年で最初此作の外に、禮拜堂の今一方の壁を飾るため『背叛天使の墮落』も其題材の一つとして選ばれたのであるが、これは遂に實施の運びに至らずして止むだ。多くの試作を重ねた後、愈々彼が『最後の審判』に筆を下したのは一五三六年、實に前記の穹窿畫から三十年近くの星霜を閱した後であつた。彼は此前年、其終生の愛人たるペスカラ侯爵夫人ヴイットリア　コロンナを識つた。孤獨な二つの魂が、淨い境地に於て相逢ふところ、一つのプラトニックな戀を形づくつて、其れ等の生活內容を豊富にしたのは察するに難くない。併し乍ら此戀は、彼の暴君的な天才と共に、その裡に在つて常に彼が虐げたものであつたのを忘れてはならない。彼は既に老いてゐたそしてその美しからぬ容貌が婦女の歡を得る事が出來ないのもよく知つてゐた。然も其熱烈な情緒を如何ともする事が出來なかつた、悶々として自ら抑ふる能はず、彼が謳つた多くの十四行詩の一つに『愛よ、まことや汝は我が青春時に在りて、千度我を征服し、死ぬる迄に傷けたり。されど今日、我が白髮の下にありて、なほ我は汝の頼むに足らざる約束に身を委ぬ可きや』とあるのでも知れやう。『我が燃

ゆる心よ、そは美しけれど滅ぶる或るものに充ち足らう事能はず、大空に向ひて翼を延ぶるなれ、戀はまことに、彼に取つて一つの練獄であつた。

彼はそのほか一身を纏綿する種々な事情に惱まされてゐた。それのみでない。一五三九年、彼は製作中足場から墜落して、脚部に重傷を負つた痛苦と憤怒は同時に彼を襲つて、其友なる醫師ルウチニが訪れた時も、床中に呻吟しながら、其介抱を拒絶したと云ふ。『忽ちにして燃え熾り、忽ちにして凍結し苦痛の重荷の下に絕えず鞭たれて、悲しく惱ましき望みに充ち滿てる我が心は、慘しき過去の再來の外我に未來を示すことなし』。絕望は彼をして、恰も傷つける猛獸の如く、極度の苦惱の裡に、其渾身の力を奮はしめつゝ、遂に一五四一年十一月此悲壯な作品を成就せしめたのである。其年の降誕祭、足場が拂はれて、はじめて公衆の眼に觸れたとき、此壁畫は稱讃よりも物議を釀した、それも無理はない。其處には天堂の頌讃よりも地獄の呪詛が、歡喜よりも懊惱が多く語られてゐた。

いまこれを見るに、無理解な人達に依つて、後年幾度か加へられた無用な補筆と、歲月が與へた變化其者が、此畫の悲劇的な効果を多分に害つてゐる事は爭へない。然もなほ焰の閃きを發しつゝ、陰暗な空に燃え上つてゐる多くの裸形の强烈な色彩と、基督を中心として一つの大きな旋渦を形造りつゝ、左から昇つて右へ降りて來る、奔放な勢ひを有つてゐる構圖とは、見る者の胸に一種の激甚な感動を惹き起させる。それ等の動勢は誇張に過ぎてゐるかも知れない。それ等の色彩は狂激であるとも云へやう。

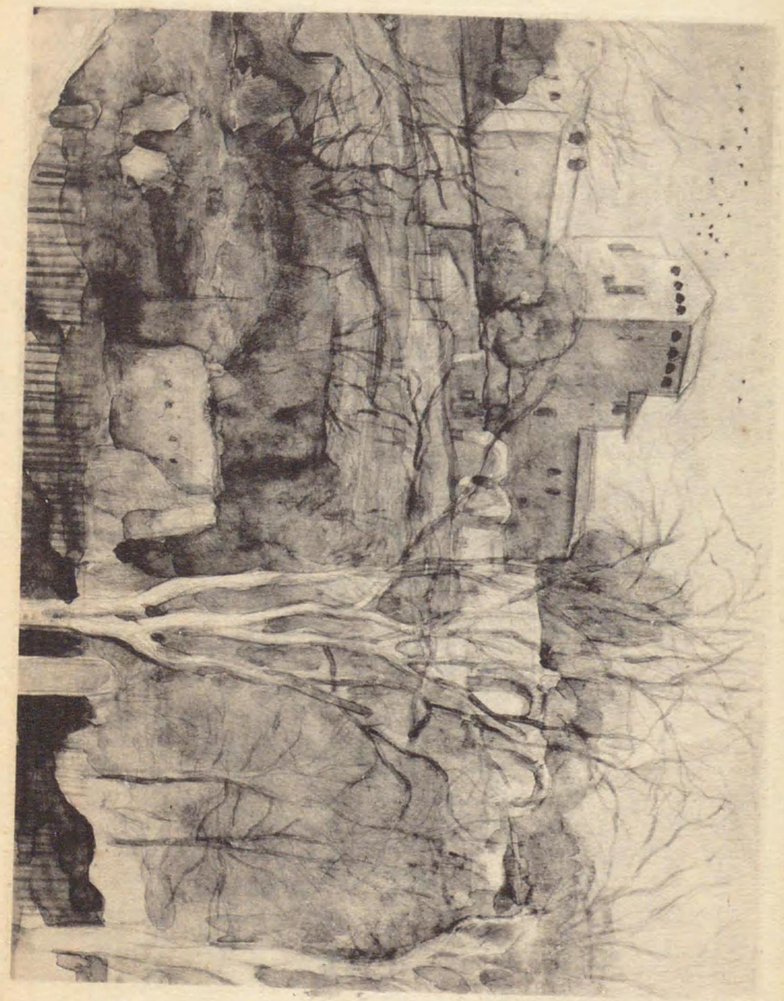
實際こけ脅かしだと云ふ非難を何度も知つた人の口から聞いた事がある。併し私は其誇張狂激の中に、飽くまで執拗な人間の意志と、生の潑溂たる搏動を讀む事が出來る。

偉大な人間の仕事は、屢個人の狹小な趣味を超越する私自身の事を云へば豫て此畫に多大の期待はかけてゐたものゝ、優しい靜かなものに惹かれ勝な私は、事實其れを目前にする時、或は反撥を感じるかも知れないと私かに惧を懷いてゐた。然も其結果は反對であつた、私はいまだに此畫に對して或る懷かし味をさへ感じてゐる。既に價値の定まつたものを、餘りに平凡な感心の仕樣をすると云ふ人があつても、私は答ふる所を知らない、私は敢て異を樹てる爲に、嘗て人類が遺した最高の仕事の一つを、容易く斥け去る程の勇氣を持てゐないのだから。

（六）

シスチナ禮拜堂を辭してラフアエルの室房を訪れた。復興期の最も美しい頁は、斯て歩を轉じる毎に私達の目前に展開されるのである。

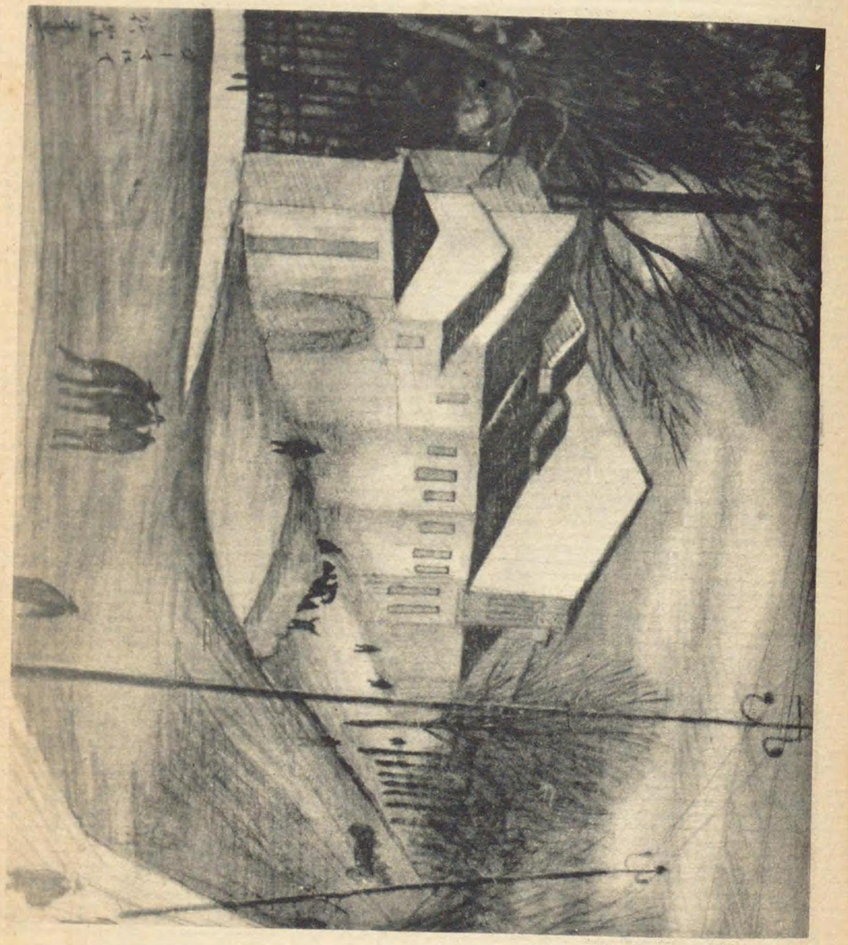
横暴で、殘酷で、氣短かでまるで『投石機を離れた石』の樣な、謂はゞ法皇中での淨海ヂユリオ二世が其寶座に即いたのは一五〇三年であつた。其の時住居と定まつたボルジアの部室に彼は久しく留まる事を欲しなかつた苛棘な、血を好む野犬の魂の宿つた、『特權的惡人』の一族を聖者に擬へて、其れ等の肖像を描き現はしたピントリツキオの壁畫や、彼等の卑俗な趣味を代表する、金ぴかの、けばけばしい裝



バラチノ丘の裏手　土田麥僊作

飾が、彼を忌々しくさせたのである。彼は間もなく建築家ブラマントに命じて、恰度其上層にあるニコロ五世の舊居を、新に調らはせて引移る事にした。其れ等の室房は、以前千四百年代の壁畵で裝飾されてゐたのであるが、アンゼリコの作を殘して、悉く新たな作品の下に掻消されて了つた。ブラマントに依つて招かれたペルヂノソドマ、ペルッチ、ロット等は其處に其妙技を闘はせやうとしたのである。が、それ等相反噬する畵家達に依つて試みられたものは望ましい効果を齎さなかつた、其雜駁にして奇怪な點では、ボルジアの部室も寧ろ一籌を輸する者があつた。ヂユリオ二世が滿足しなかつたのは想見するに難くない。時に一五〇八年十月偶ウルビノ出の一青年畵家があつて、來つてブラマントを介し、携へ來つた畵稿を彼の前に呈出した。それを一瞥するや、法皇は直ちに前記諧家の務を解き、此新來者をして代つて衝に當らしめる事となつた。云ふ迄もなくラフアエルである。法皇は其秀麗にして閑雅な容貌の裡に、偉大な天稟が潜んでゐるのを早くも洞察したのだと云ふ、稗說の傳ふる所である。が、これは少々怪しい。

ラフアエルは此時二十五歲、夙に熟してゐた才能は彼をして既に幾つかの優美な聖母や、其他の題材に不朽な作品を殘さしめたものゝ、彼の有してゐた聲名は未だ一地方に限られたものであつた。如何に畑眼であるにしろ『學識に乏く、難解な書物が大嫌で』只だ見て居れば解つて、そして面白いと云ふ樣な粗大な見解から美術愛好者となつてゐたヂユリオ二世に、ほんの畵稿を一目したたけで、其偉材を洞察



羅馬の墓場末

小野竹橋作

し得るだけの鑑識があつたか、ごうかは甚だ以て疑はしい。思ふに此一個白面の青年をして其寵宰に加へしめたのはブラマントの推擧與つて力があつたのは推察するに易い。その傍、法皇の祕書フエドラインギアルミや、シヂスモンド ダ コンチに多少の敎養があつて、其れ等の優れた箇所を彼に向つて指示する事が出來たと見る方が自然ではあるまいか?。

それは孰れにてもあれ、ラフアエルは時を移さずして、來つてスタンツエの壁に其絕技を試みる事ゝなつた。恰もミケランゼロが其の敵手ブラマントの嫉視の下に、嘗てファミリエルでなかつた壽技を、シスチナ禮拜堂の穹窿に施さねばならぬ事ゝなり、慘澹たる經營の苦を味つてゐた時である。ラフアエルに取つても、其れ迄彼の成功は多く壽架の上に在つて、斯かる尨大な壁面にはなかつた。從つて初舞臺たる意味では其腐心ミケランゼロに讓らぬものがあつた。豪宕と優婉の長所を各持してゐる二人は、今や兩々相對して美術史上最もエパヌイツサントな局面を開かうとするのである。

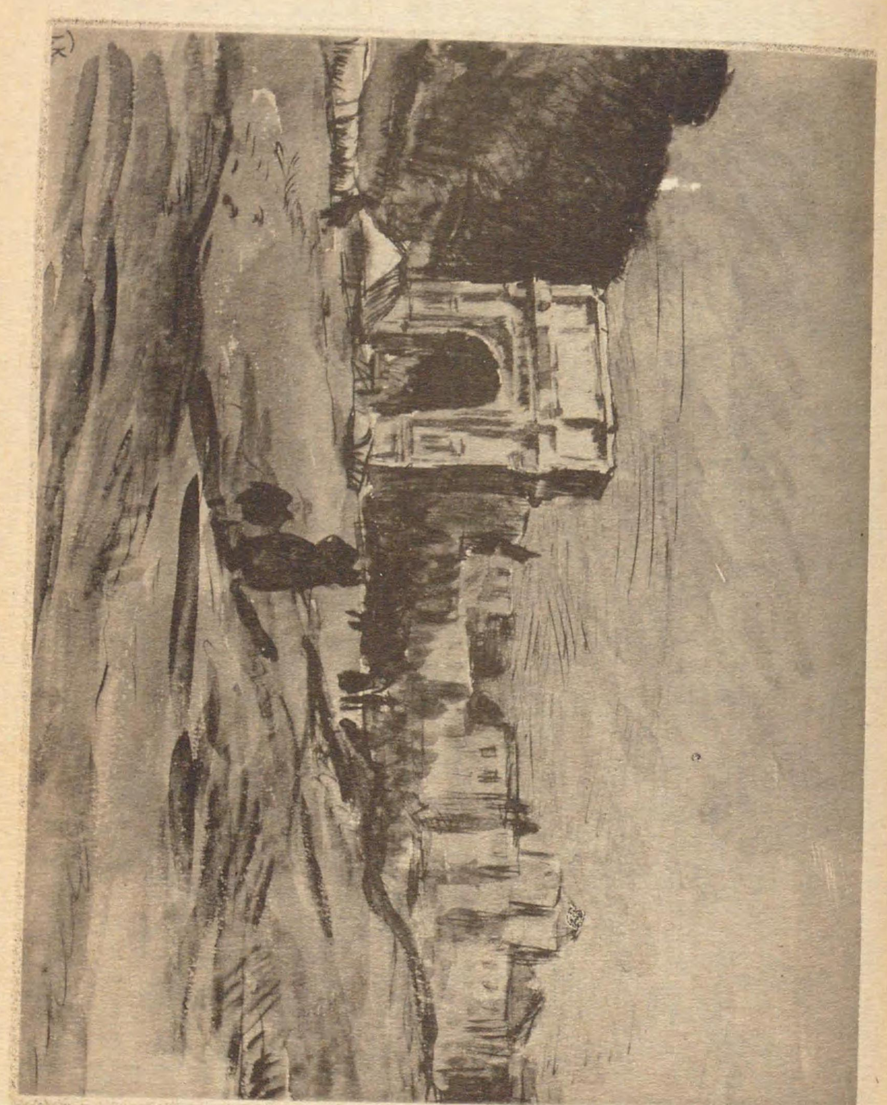
（七）

若しもシスチナ禮拜堂のミケランゼロを以て、雄渾な劇作家に比し得るならば、スタンツエのラフアエルは典麗な抒情詩人だと云ふ事が出來やう。前者を見て後者に移つたとき、突差に起つたファードな感じが、私達をして何か物足りなく思はせた。併しそれは激しい衝動を受けた後、何時の場合でも必ず伴ふ感じであつて、それを以て兩者の輕重を律する事は出來ない。何故なれば、前者が示す奔放な情熱と

後者が具へてゐる、清純な感情とは種別の差であつて價値の高下ではない。澎湃たる波濤も瀲灩たる流れも其水たる事に於て變りはないからである。唯だ感動の強さを問はれゝば、勿論前者を擧げるに躊躇しないけれど、それだからと云つて、全然後者を無視したくない。突差の感じは多くの場合人を欺くものである。眞の判斷は其等の作品の前を去つて、獨り靜かに回想する時、自ら頭に浮んで來る。少くも私の場合にはそうである。

そうした意味に於て、私はいま限りのない愛撫を以て署名の間の氣高い四女神の像や、『雅典の學舍』のアルキメデの無邪氣な子の顏や『聖祕蹟討論』の可憐な聖約翰の姿を想起する事が出來る。更に『パルナソ』の、アポロの肩のあたりに集まつたタリアクリオ、ユテルペの嫻雅な姿に深い嘆美の念を發せずには居られない。窈艶にして而かも塵俗の氣を含まざるものありや、斯く問ふものがあれば、私は先づラフエルの女神等を擧げるに躊躇しない、美はしくして而も滅びざるものありや、斯う尋ねる人があれば、私はそれ等の少女や少年の像を以て答へるであらう。

寔や『久遠の美』は彼の藝術を通じて一つの目標となつてゐる。彼はそのために表現の完備を求めて止まなかつた。斯くて形體の世界の優美な圓滿な再現に依て、精神の世界のより高い諧調を啓示しやうとしたのである。彼がそれに對して充分な聰明を有つてゐた事は爭へない。そして之が彼をして復興期の美術家中、最も顯著な古典的傾向を帶びしめたのである。アングルをして『彼と同時代に生を享け、其



チタスの凱旋門　黒田重太郎作

弟子の一人となることがなかつた』不幸を嘆ぜしめたのも亦因由なしとせぬ。

餘りに完全を求めて、周到な實施法は情熱の迸出を碍ける。また人をして想像の餘地なからしめる。云ひ得可くは『餘りに磨きのかゝつた形式』と、形容したい迄に達したそれ等の聖母や、其の他畫架で成された同じ種類の作品を私は概して好まない。そして此スタンツエの大きな橢圓も全體として見る時は、多くの美術史家が喋々する程えらい者とも思はない。けれども其或る部分を拙いて自分の想像で切り取つて、仔細に見て行くと、それは全く比儔のない美しさに滿ちてゐる。優美な表情、自然な擧止、纖細な筆觸、潤雅な色彩、一々念頭に上り來つて、彼をしてミケランゼロと共に『造型的修辭學に神通して最も光輝ある一人』としてエリイ　フオールの說に賛成せずには居られなくなる。

浪曼派の勃興以來、近代畫家の中でも彼の藝術に慊焉たる人は尠くなかつた。現にそうした意味の事を言表してゐる人もある。併し、『彼等がそれを愛しなかつた時でさへも、摸寫や版畫でしか見なかつた時でさへも、ラフアエルは歐洲近代畫家の總てに權威であつた』恐らく『古典への復歸』が再び高く叫ばれやうとする時、彼に對する新しい見地に立つた批判も今後に期し得られるこゝと思ふ。

×　×　×　×

私は尙ほニコロ五世禮拜堂のアンゼリコをはじめ、同じくヴチカの書館や、其他幾つかの宮殿など復興期の作品に就て語る可き多くを殘してゐる。然ども餘りに趣を等しうする記述が讀者を倦ましめる事を

恐れて、暫く筆を更めて他の時代の遺蹟や遺作に及びたいと思ふ。

（八）

『鶯の歌あり、まだ巣籠りゐて、薔薇の枝の緑の葉を啄ばめども、今生ぜむとする蕾をば見ざりき』『鷗外氏即興詩人』年毎に催される童男童女の説教會に幼い戀人達の魂が結びあつたと云ふ聖マリア　アラチエリを出て高い石段を降りやうとすると、はらはらと通り雨がした見る〳〵濡れてゆく舗石の上を、早傘を傾けて行き違ふ人が見える、待たせておいた馬車に乘つてカピトリノの裾を廻ると、狹い通りの向ふにマルセロ劇場跡の巨大な障壁が突つ立つてゐる。雨は一しきり降ると止むだ。颯と落ちて來る光りが、バラチノの下の樹立の間を流れて其處に、聖ラオドロの圓形堂が立つてゐる。羅馬最古の稱がある聖マリア　アンチカへ入れば先づ目につくのは七八世紀の頃になつた、ビザンチン派の壁畵である。大分損じてゐる箇所もあるけれど、稚氣を帶た基督や聖母の像が、ふつと幼ない時の夢の現に通ふ懷しさを思はせる。但し作品其者としては大した價値があるのである。

ヴイア　デル　グラチエを經てカピトリノの背後へ出ると稍上りになつた路が、矩形を作り乍ら岸際に沿つて、其處から二つの丘に挾れた一つの凹地が、略西より東に向つて開いてゐる。雨氣を含むで雲霧低迷する空に、一際高く黑ずむだ殘壁を戴いた丘が右手に聳えてゐるのがパチラノである。異教時代羅馬の遺址は此丘を中心として求心的な集團を形成しつゝ、其處から發祥した歷史に大きな額緣を與へてゐ